

UFO・超能力・宇宙哲学

UFO

SINCE 1961
GAP-JAPAN NEWSLETTER



UFO・ESP・Cosmic Philosophy

コンタクティー

contactee

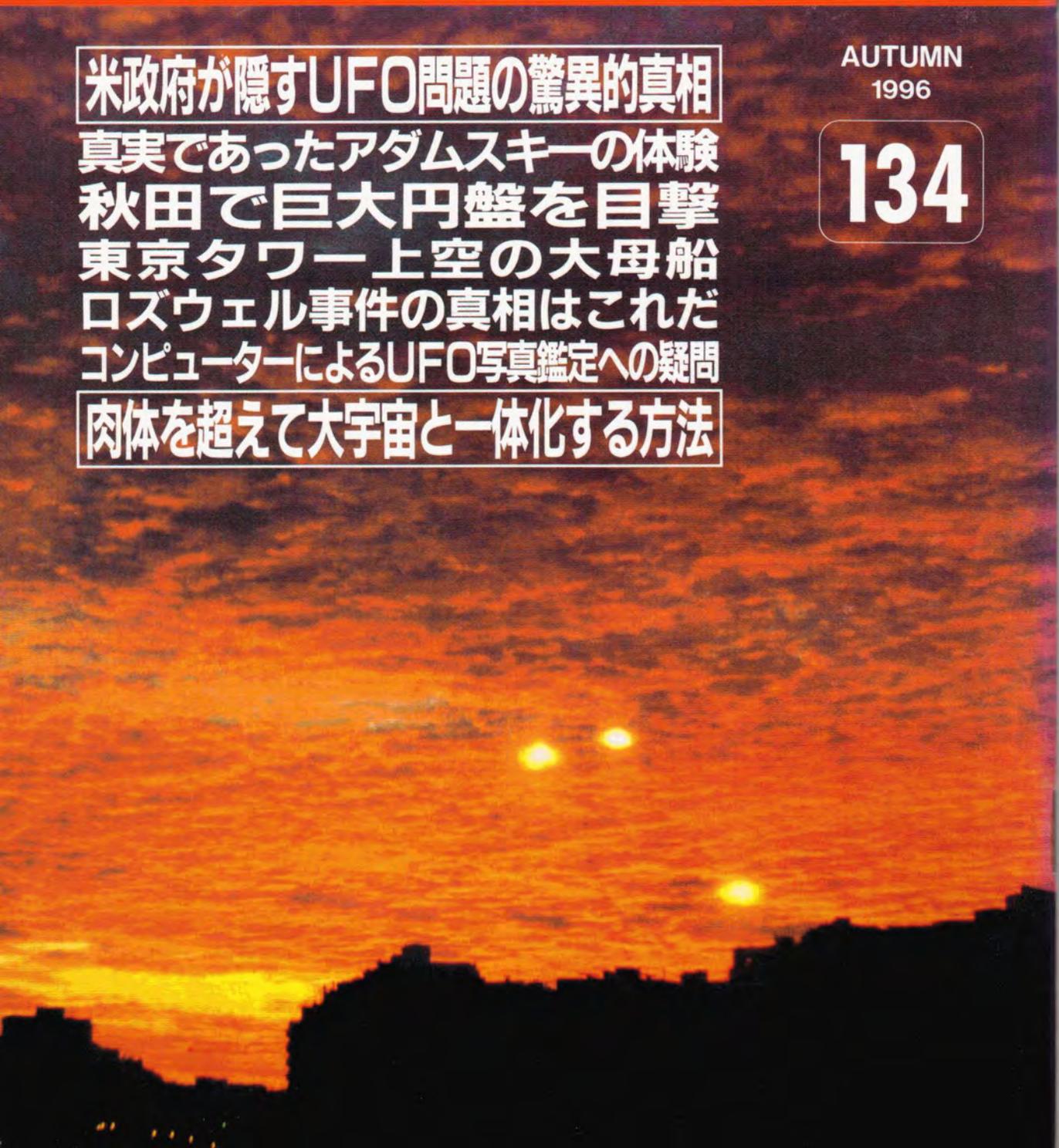
米政府が隠すUFO問題の驚異的真相

**真実であったアダムスキーの体験
秋田で巨大円盤を目撃
東京タワー上空の大母船
ロズウェル事件の真相はこれだ
コンピューターによるUFO写真鑑定への疑問**

肉体を超えて大宇宙と一体化する方法

AUTUMN
1996

134



CONTENTS <Dedicated to Space Brothers and Cosmic Consciousness>

〈巻頭言〉人間と万物	1
米政府が隠すUFO問題の驚異的真相	久保田八郎 2
真実であったアダムスキーの体験	ゴードン・クレイトン 12
GAP短信	18
真の健康を保つ方法	ジョージ・アダムスキー 19
〈写真〉ビームを放つUFO	20
秋田で巨大円盤を目撃!	加藤 純一 21
東京タワー上空の大母船	遠藤 昭則 22
科学——SCIENCE	24
ロズウェル事件の真相はこれだ	26
コンピューターによるUFO写真鑑定への疑問	遠藤 昭則 28
「自然治癒を考える会」で会長講演	35
東京造形大学でまたも講演	36
肉体を超えて大宇宙と一体化する方法②	37
盛況! 秋田支部大会	45
UFO contactee バックナンバー主要記事	46
〈予告〉1996年度日本GAP総会	47
〈投稿欄〉ユーコン広場	48
〈広告〉新アダムスキー全集	50
編集後記	51
日本GAP全国月例セミナー案内	52

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて「コスミック・パワー」の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米・他の大國政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。



〈表紙写真〉

1978年6月、スペイン、バルセロナの夕暮れ時、主婦のモンセラート・バトリョーリさんが家の外に不思議な光体が浮かんでいるのを発見。カメラでとらえた。秋山眞人氏の鑑定によると、3個の内の中央の光体がUFOで、左右の2個は瞬間移動による映像だという。

しかし誰が何を言おうと、戦後あれほどに世間の耳目を揺るがせたUFO問題は一向に衰微することはなく、またテレビ等で中国人気功師らが行なう物凄い実演等によって大衆は確実に超常現象に関心を持ち、これらの展開に期待を寄せていることは間違いない。昨年大騒動を起こした某教団によって結果的に流布した「超能力イコールまやかしのもの」という図式はすでに崩れて、教団の騒ぎが沈静化した現在、またも超常現象やUFO等に対する大衆の関心が高まってきたことは、この

〈巻頭巻〉 人間と万物



超能力やUFO問題、その他の超常現象の存在をいまだに否定してかかる人達がいる。唯物論一辺倒で教育を受けた人達の思想は、測定器で検出できない物質以外の物の存在を認めてはならないということらしい。良い意味で言えば堅実な考え方だが、これでは百年河清を待つ体の牛歩の進歩しか望み得ないだろう。あるいは進歩的な理論を唱えてひどい目にあうのを恐れているのかもしれない。福来博士その他の偉大な先人の無残な結末を知っているからだ。叩かれると怖いのだ。

種の専門誌の発刊や、研究機関の設立等で首肯できることである。

新聞によれば科学技術庁放射線医学総合研究所はすでに人体の出す微妙なサインをハイテク機器で測定する研究をすすめているという。これは他人の体に触れずに相手を跳ね飛ばしたりするいわゆる念力と呼ばれるものや、肉眼で見えない物を見透したりする遠隔透視力等、科学の世界では全く顧みられなかつた不思議な現象に最新の科学の目をあてようとするものだという。

科学技術庁といえはれつきとした日本政府の一部門である。そのお役所がこんな研究を始めたからには、よほどの根拠があつてのことだろう。世界的な大企業であるソニーはすでに専門の研究所を設立して超能力の研究調査を続行している。

「遠当て」という実験がある。これはマンションの二階に合気道の一派である「気の教室」を主催する男性がおり、五階にはその弟子の女性が待機している。互いに連絡はとれない。

ところが二階の先生が片手をかざすと、五階の弟子が後ろへ吹っ飛んで、背中から壁にぶつかった。壁は厚い布で覆われているからケガはしない。四八回の実演で、六回は一秒足らずで反応したという。

この「遠当て」実験を千葉市にある科学技術庁放射線医学総合研究所が試みた。そして人体の発する赤外線、磁

場、電場、音波、オゾン、放射線などを、脳波、心電図、脈拍、呼吸、皮膚の電気抵抗と同時に測り、それらの変化を調べる方法を開発したという。この研究は総額一億円の予算で五カ年計画で実施する。そして「気」やテレパシー現象を解明する予定である。

一方、ソニーではすでに一九九一年一月にエスパー(ESP ER)研究所を設置している。そしていわゆる虫の知らせ、テレパシー等の超感覚的知覚作用の本質を解明する。現在スタッフは五名。さまざまな実験が試みられている。「なぜソニーがこんな事を？」といふかる人はもつと目を開く必要がある。将来、電波に代わる最も力な通信手段として人間の想念波動に着目しているのだ。さすがは世界のソニー、考えることが違う。

もちろん人間の思想信条は全くの自由であつて憲法で保障されているから、誰が何を信じようとするかは、夢を持つ人と持たない人とはこうも違うものかと思わせるのが、こうした超常現象の世界に対する関心の度合いである。科学は重要だ。非科学的な概念だけで世の中は向上しない。しかし科学に固執するあまり盲目になつては進歩がないだろう。

昨年一二月にイギリスでとつともない事件が発生した。中部のマンチェスターに住むピッキー・ウィルモアという一〇歳の少女が、ある日突然頭痛

がして「鏡文字」しか書けなくなつた。鏡文字というのは、文字の左右が逆になつた裏文字であつて、鏡に写すと正常な文字に見えるのである。この少女は正しい文字さえ読めなくなつてしまった。もちろん医学では全く治療法はなく医師は啞然とするだけだ。

ところが、ある日自宅でサッカーの試合を少女がテレビで観戦中、地元チームが負けたために残念がつて体を後ろへのけぞらせたところ、テーブルの後頭部を強くぶつけた。驚いたことに翌日から正常な文字が書けるようになり読めるようになつたという。

この不思議な現象はタイムズやデイリー・テレグラフなどの有力紙が大々的に取り上げて報じたので、イギリス全土の大評判になつた。

世の中には謎の現象があるものだ。こんな事件までも否定する人がおれば正常な人間ではない。それこそ鏡文字人間である。自分の姿を鏡に写して見たときの左右逆の像を正常な自分だと思ふのだろう。だがある種の気功では「部屋の中の壁や天井などは自分を見つめているもう一人の自分なのだ」というフイーリングを起こす訓練をして凄腕能力を開発するといふ。

そこで、「万物を見るときに、それはすべて自分自身なのだ」と説くアダムスキーの哲学こそ人間を真に覚醒させる最高のカギであると思われるのである。

米政府が隠すUFO問題の驚異的真相



久保田八郎（日本GAP会長）

●各種UFO事件の内幕はこれだ！

英米両政府は戦後五〇年間の沈黙を破って地球へ飛来してきたUFOに関する真相を近く発表するらしいという説が流れている。最近の各種の情報を検討しながら筆者の見解を加えてUFO問題の興味深い裏世界を明かすみに出してみた。

ロスウェルの大事件とは何か

戦後大いに世間を騒がせたUFO問題について、どうやら近い将来に米政府からその真相が発表される気配が濃厚になり、しかも近來大きく問題化したロスウェル事件その他のUFO問題が近未來に公表される可能性が大になつてきたらしい。

米政府のG A O（米政府の会計検査院。議会及び政府の各省や機関を補佐し、連邦政府の収支決算を確定する独立機関）は、一九四七年のロスウェル円盤墜落事件後、円盤の回収と異星人の遺体の解剖に関する秘密文書類の調査を終了した。この調査はニューメキシコ州の下院議員ステイヴン・シフから任命されたのである。このG A O

によるロスウェル事件の調査命令には上院議員のダイアン・ファインスタインも一枚かんでいた。有名なロスウェル事件というのは次のとおりである。

一九四七年七月四日、米ニューメキシコ州ロスウェル市の陸軍航空隊基地（現在はウォーカー空軍基地となつている）の北西約一二〇キロのフォスター牧場に一機の空飛ぶ円盤が爆発墜落して、これを管理人のブレイズルが発見し、連絡を受けた空軍五〇九爆撃部隊情報部のジェシー・マーセル少佐が部下達と共に機体の残骸や破片類、さらに異星人らしき小人の遺体四体を回収し、さらにこれらをテキサス州フォートワースのカーズウェル空軍基地へ移送したという大事件であつた。

大体に一九四五年八月に大戦争が終つてから、急にUFO問題が世界の話題になり、日本でも連日のように記事が新聞に掲載された。当時はUFO（未確認飛行物体の略称）という言葉はなくて、もっぱら「空飛ぶ円盤」と言つていた。

四七年七月の五日か六日頃の当時筆者が購読していた毎日新聞にも、アメリカ・ニューメキシコ州ロスウェルに円盤が墜落して、小人宇宙人の死体が発見されたという記事が掲載されたのを筆者は今でもはっきり記憶している。

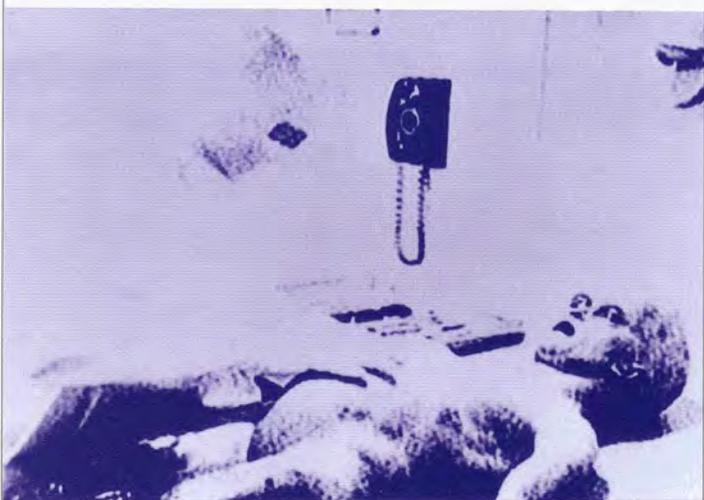
航空隊から復員してまもない筆者は、空飛ぶ円盤というのは米ソの超秘密兵器だろうと思つて全く関心はなかつたのだが、なぜかこのロスウェル事件の記事には引かれるものがあつて、友人にこの事を話したら相手はブツと吹き出して「戦争が終わつたら面白い話が出始めたのう」と大笑いしていた。

確かにこの当時は奇怪な話題が新聞を賑わしていた。たとえば日露戦争の旅順港閉塞作戦で広瀬中佐と共に戦死したはずの杉野兵曹長が、実は船外に

放り出されて無意識で海上を漂流していたのをロシア軍に救助されて捕虜となり、第二次大戦後、上海でひそかに老齢で生きながらえていたとか、中国で戦死した軍神・西住戦車長が生きていたのだの、途方もない話が流れていた。しかしロスウェル事件は真実であつたのだ！

狼狽した米空軍はただちにロスウェル円盤墜落事件の隠蔽工作を開始し、その処置としてまもなくカーズウェル空軍地区司令官ロジャール・レイミー准将がラジオ局から緊急放送により「あれは気象観測用の気球だつた」と発表して新聞記者団に煙幕を張り、完全に否定してしまつたのである。以来この事件の真偽をめぐつて世界のUFO研究界で激しい論議が展開し、テレビでも放映されて有名になつた。

だがマーセル少佐と会見したロスウェル事件の研究者ウィリアム・ムーアは、「決して気球ではなくて、何かの物体が空中で爆発して落下したものだ」と少佐が詳細に説明した内容を著書で述べている。ロスウェルに関する



▲ロズウェル事件の解剖される直前の6本指異星人。

©ポニーキャニオン

詳しい記事は本誌一二七号に「ロズウェル事件とMJ12文書」と題する坂本貢一氏の記事が出ているので参照されたい。

大体にニューメキシコ州は世界最初の原爆製造の土地であり、ホワイトサンズはロケットの発射実験場として名高く、第八空軍五〇九核爆撃隊が駐屯するという、戦後は世界で最も物騒な地域であった。これを別な惑星から来た異星人が重点的に観察していたと考えても不合理ではないのだ。円盤が墜落したのも放射能と関係があるのでは

なかるうか。

隠蔽策に躍起な米空軍

話をもとへもどすと、G A Oのロズウェル報告によれば、重要な空軍の文書はどうかやら許可なしに破棄されたらしいという。シフ下院議員はこの文書類を「重要」なものの特徴づけて、この文書類によってもっと多くの情報が知らされればよかったのにと述べている。

「空軍は、誰が文書類を破棄したのか、

なぜ破棄したのかを知っていない」とシフは言い、さらに、空軍の説明はその当時施行されていた軍の極端な機密保持政策と一致していないし、ロズウェル事件に対するG A Oの調査は多数の下院議員達の関心を引き起こしたという。G A Oは多数の人にインタビューした上、その報告の中には各種の事実が入っていないことを知ったので、

いざい議会で公聴会が開かれるだろうとG A Oは予測しているというのだ。

ロズウェル事件に関する空軍の第一号と第二号報告は出ているが、第三号

報告書は出てくるのだろうか。一九九四年九月に米空軍はロズウェル事件に関する第二号報告書を出して、過去四七年間、米国民にウソをついていたことを認めたのである。空軍によれば、極端な警戒下にロズウェルから回収した物体は気象観測気球ではなかったというのだ。しかしその報告によれば、回収された物は「たぶん」プロジェクト・モウガルと呼ばれる高空放射エネルギー探知機を搭載したスパイ気球だったかもしれないと言っている。なんとも矛盾した話だ。

一九九五年一月一日に、ある信頼すべき情報筋によれば、空軍情報部内のある部署がロズウェルに関する第三号の報告書を準備中だという。この報告書の骨組みはすでにニューヨークタイムズ紙に洩らされており、米空軍のある機密文書からの情報を含んでいるとも言われている。だが空軍本部は、情報部の職員によると思われるこの漏洩事件の打ち消しに躍起になっているのである。

遠隔透視にもUFO探知！

『UFOマガジン』誌のリチャード・ホールは一九九五年の記事で、CIA（中央情報局）海外での情報収集や政治工作を担当する大統領直属機関は、CIAのUFOとの関わりあいの歴史を発表するだろうと述べている。しかしどうやらCIAはUFOの調査結果を間接的に徐々に認めるようだ。

その報告第一号は驚くべき内容だった。それは一九九六年一月にニューズ通信社を通じて発表されたが、それによるとCIAは数十年間、種々の関心のある目標物、たとえば湾岸戦争時のイラクの大統領サダム・フセインの隠れ場所などを、遠隔透視能力者を使って探知していたというのだ。

報告第二号はコートニー・ブラウン博士による『宇宙航海』と題する暴露本として二月に発行された。この著者

はある大学の教授で、軍で訓練を受けた遠隔透視能力者である。

この中でブラウンは次の事実を洩らしている。つまりDIA（国防諜報局）一九六一年から陸海空軍の諜報活動を統合した機関）、NSA（国家安全保障局）、INSCOM（陸軍情報保障司令部）などで抱えているRV達が透視目標を拡大したというのだ。

（ここで言うRVというのはレジャー用多目的車ではなくてRemote Viewer（リモート・ビューアー）の略で、遠隔透視能力者を意味する英語である。英和辞書にはない言葉だがアメリカの雑誌ではよく使用されているので知っておくと便利）。

そのRV達が透視目標として狙ったのは地球へ来る異星人達で、その中には地球人と同じ姿をした火星人、グレイといわれる変な宇宙人なども含まれている。

ここでリチャード・ボイルンが『ペルトウエー・スロウト』と仮の名で呼ぶワシントン市のある情報筋は、ブラウン博士の透視能力の指導者であるデイズ少佐が一〇年ほど前に米議会に対してRVに関する状況報告を行なったが、その中にはRV達が透視した未来の種々の出来事が含まれていたという。いざい出る第三号報告は地球へ来る異星人に関する重要な事実を集めたものになるだろう。これが爆発的なショックを与えると思われるのだ。

グレン中佐、別な惑星の母船と遭遇

一九六一年四月二日、ソ連のユリン・A・ガガーリンが搭乗した宇宙船ボストークは、遠地点三二七キロの軌道に乗って地球軌道を一周し、人類最初の宇宙飛行士の栄誉を受けた。

これに遅れること約三週間後の五月五日、今度はアメリカがマッキューリ計画による有人宇宙船を打ち上げて成功したが、これは地球軌道に乗らなかつた。翌年二月、アメリカ海兵隊のジョン・グレン中佐が乗ったマッキューリ六号（フレンドシップ七）がアメリカ最初の地球軌道周回飛行に成功し、一連のマッキューリ計画の本格化の幕開けとなった。

英雄となったグレンが帰還後に、宇宙空間にホタル火のような物体が沢山見えたと言ったためにアダムスキー

がその著書『Inside the Space Ships（宇宙船の内部）』。日本語訳は中央アール出版社刊・新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』に収録）で述べた宇宙空間の目撃体験を立証するものとして騒がれたので、当局は以後、宇宙飛行士に対して厳重な箝口令をしいたといわれる。つまり異常な光景を見たことをしゃべるなという命令である。このホタル火の件が当時の日本の週刊誌に大きく書かれたのを筆者は覚えている。またグレンが宇宙飛行中に日本製カメラのミノルタハイマティックで撮影した宇宙空間の写真の中に奇妙な細長い物体が写っているのを、アダムスキーは別な惑星の母船だと指摘していた。アメリカ史上最初の有人宇宙飛行を別な惑星の人達が注視していたのだというのだ。危険な状況になれば救出しようとしていたらしい。彼らはもちろん友好的な異星



▲ジョン・グレン中佐



●マーキュリー6号の打ち上げ

グレン中佐は目撃した！

1962年2月20日、米海兵隊のジョン・グレン中佐が搭乗したマーキュリー6号（フレンドシップ7）が、改造型アトラス大陸間弾道ミサイルで、キューバに近いフロリダ半島のケープカナベラル基地から打ち上げられた。そして約5時間の航行で地球軌道を3周した後、無事帰還したが、その間彼は宇宙空間で不思議な現象を目撃してアダムスキーの主張を裏づけた。

人である。

クーパー宇宙飛行士、驚くべき UFO 事件類に關係

マーキュリー計画最後の実験は一九六三年五月一日に行なわれた。マーキュリー九号（フェース七）に乗ったルロイ・ゴードン・クーパー空軍中佐は、地球軌道を二週して無事帰還した。

二年後の六五年四月に、アーカンソー州で開催されたある集会で、クーパーが米空軍将校であった当時の一九五七年に、四人の空軍搭乗員がエドワーズ空軍基地で、ある航空機の着陸装置のテストを記録映画として撮影中、突然一機の UFO が急降下して基地へ着陸したと発表したのだ！ その光景を空軍の映画撮影機がキャッチしていた。仰天した撮影班の男達は撮影済記録



▲ルロイ・クーパー中佐（中央）。右側はジョン・グレン中佐。

映画フィルムをエドワーズ空軍基地の司令部に届けた。ゴードン・クーパーは個人的にその映画を見ていたのである。司令部の幹部将校連はその後、そのフィルムをワシントン市の国防省へ送ったが、なしのつぶてであった。以後誰もそれについては知らないという。クーパーは近々に放映されるテレビ番組で、この事件の内容を話すものとみられている。

この UFO 大事件の記録映画に関して、クーパーはカナダのある映画製作会社に勤めているアイルランド人の映画プロデューサー、ジャッキー・ダンと協力関係にあった。

クーパーはまたインデペンデント・インターナショナル映画会社のサム・シャーマンとも会っている。この男は『地球を超えて』と題する映画を製作中で、これは九六年の前半に公開が予

定されている。

この作品の中でクーパーは、異星人とコンタクトしてかなりの知識を得たある男と共に UFO の機構に関して研究してきたと述べている。この男は小さな UFO の模型を作った上、あるアラブ人の国から資金援助を受けて直径一五メートルの試作機を建造していたという。だがこの男は他界した。

またクーパーはアドバンス・テクノロジー・センターについても語っている。この会社はすでに存在しないのだが、一時期は明らかにある種の異星人の技術をひそかに応用する仕事に関係していた。その上クーパーは例のロスウェル事件の際に彼の友人が異星人の遺体を見た件についても話している。どだいクーパーは「UFO 男」と呼んでよいほどに凄い事件に関わっていたのだ。

NASA による月面の実態の隠蔽工作

一九九五年四月に出たある記事で、元 NASA の情報部長であったモーリス・シャトランは、アポロ宇宙船が月面で「不自然な種々の幾何学的構造物」を発見したと爆弾発表を行なった。月面上の UFO 活動に関する NASA の極秘文書については、本誌先号に筆者による「月は異星人の基地だった！」と題する記事で詳細に伝えているので、それを参照されたい。

とにかくわれらの月をすでに別な惑星から来た異星人が占有して基地化していることは間違いないのだ。ただしこの異星人達は敵意をもつものではなく、むしろ地球人に対して友好的であることはアポロ計画を全く阻止しなかつたばかりか、危機に瀕したアポロ一三号を救助したフシがあることからもわかるのだ。

ジョン・シルヴァー率いる海賊一味が目ざす宝の隠し場所を発見したときには、すでに中にもぬけの空だった。失望した海賊達の耳に不気味な歌声が響いてくる。

死人の箱に一五人

ラム酒一本ヨーホーホー

ロバート・L・ステイヴンソンの名作『宝島』を地で行くような大失策をアメリカはアポロ計画で演じた。というのは別な惑星に触手を伸ばすための宇宙基地として月を目標にしたのだが、すでに「誰かが」先住していたからである。だがこれは宇宙に対して全く盲目であった地球人に驚天動地の事実を気づかせたという点でそれなりの価値はあったといえよう。

アポロ計画といえば隠蔽工作はまだある。一九六九年から七二年にかけてアポロ宇宙船が次々と月に着陸していた当時、ヒューストンの宇宙センターで写真技術者として働いていたドナ・ティーツという男が、一九九五年五月六日にワシントン市の WOL 局のラジ

オインクデビューに出演して次のように話した。

「秘密の部屋で自分と一緒に仕事をしていたある同僚は、アポロ宇宙船が月面で撮影した写真を一般に発表する前に、写真中に写っているUFOの姿をエアープラシで消すのが専門だった」

エアープラシというのは、絵の具を噴霧器にかけて写真に吹きつける工程または噴霧器そのものを意味する。写真修正用に必備の道具である。こんなことをNASAがやっていたのだ！

別な元宇宙飛行士ブライアン・オリリー博士は、一九九四年九月一八日にコロラド州フォートコリンズの国際ニューサイエンス会議で公式に次のような宣言をなした。それによると、ほとんど五〇年間、米政府内のある秘密機関がUFO問題や異星人とのコンタクト事件に関する情報を隠してきたというのだ。彼はきつぱりと述べた。「我々は異星人の文明と接触してきたのです」

こうした事実の公開についてはどう思うかと聞かれて彼は言った。

「少なくとも過去四七年間におけるUFOと別な惑星の人間に関する情報は、たぶんCIA、NSA、DIA部内のあるエリート集団によって調整されつつあると思います。この小グループはこうした信じ難いような秘密事項をきわめて巧みに隠す能力があるようです。あの根絶し難いピースト(米俗語で、

新しく複雑な機械の意味。つまりUFOのこと)を調査してきたその人たちは、UFO、異星人、マインドコントロール、遺伝子工学、フリーエネルギー、反重力推進法その他の秘密事を宇宙ウォーターゲートと呼ぶならば、本物のウォーターゲートまたはイランゲートなどは子供だましのようなものとみていますよ」

ロズウェル事件の「遺体解剖」映画は本物なのか

一九九五年三月五日の金曜日、イギリスのテレビプロデューサー、レイ・サンティイリは、ロンドン博物館で記者会見を行なって、彼は陸軍航空隊による墜落したUFO回収作戦の場面を含む軍情報部撮影の一四巻にわたる一六ミリ記録映画フィルムを所有していると発表したが、この中には数体の異星人の遺体が解剖されている場面を写したのもあるという。

サンティイリ氏によると、彼はこのフィルムをジャック・バーネットからもらったという。バーネットというのは八二歳になる軍の専属の写真家で、一九四七年七月のロズウェルUFO墜落回収作戦で彼が撮影した機密のフィルムの個人的なコピーを保管しているというのだ。

しかしサンティイリ氏の仕事仲間であるクリストファー・コリーはこの話はピンとこないと感じており、そのフィ

ルムは情報部員のリーク(漏洩)を通じて入って来た気配があるという。

この墜落UFOと遺体解剖のフィルムが実際に情報部筋から出たという根拠は、次の二つの事件を意味するのである。

一九九五年にロンドンに滞在していた台湾UFO研究会のメンバー達は、同年六月にその記録映画を見たのだが、彼らは二年前の一九九三年に中国のUFOフィルムと交換にCIAから同じ遺体解剖のコピーフィルムを受け取ったというのだ。また元空軍情報部員のディック・ドティー軍曹が言うには、少し前にニューメキシコ州ロスアラモスの国立研究所でロズウェルのフィルムを見せられたというのである。一九九五年六月二八日、ステイヴン・シフを含む一九名の上下議員団が、彼らの要求に対して異星人遺体の解剖の記録映画を見たのである。

これから二カ月後の一九九五年八月二八日には「異星人遺体の解剖。事実かウソか?」と題する特別番組が世界で放映された。六本指の身長一・五ないし一・八メートルの異星人がテレビ画面に出てきたが、これはサンティイリ氏が所有する別な記録映画で見られる四本指の身長約一メートルの異星人とは異なる人種だった(三頁の写真参照)。

このような差異を見ると、この各フィルムはロズウェルと別な場所との二種類の事件を意味しているらしい。こ

うした矛盾が意味するところは次の点だ。

ある巧妙な情報機関がデマ拡張作戦を実施して、疑惑を起ささないサンティイリ氏や世界の大衆にニセの映画を押しつけることによって、一九四七年のロズウェルUFO墜落事件に関する証拠が急速に広がる状態から大衆の目をそらさせようとしたのかもしれない。

いずれのフィルムも本物か

二者択一的にみると、この矛盾は巧妙な積極的なデマ作戦を意味しているのかもしれない。その場合は、各地の墜落UFO回収場面を撮影した本物の軍情報部撮影の記録映画がロズウェルの名のもとにそろって出回ったと思われるのだ。その場合はロズウェルとは別な場所でも撮影されたものとロズウェルとを見分けるために大衆の側の眼識を必要とするだろう。

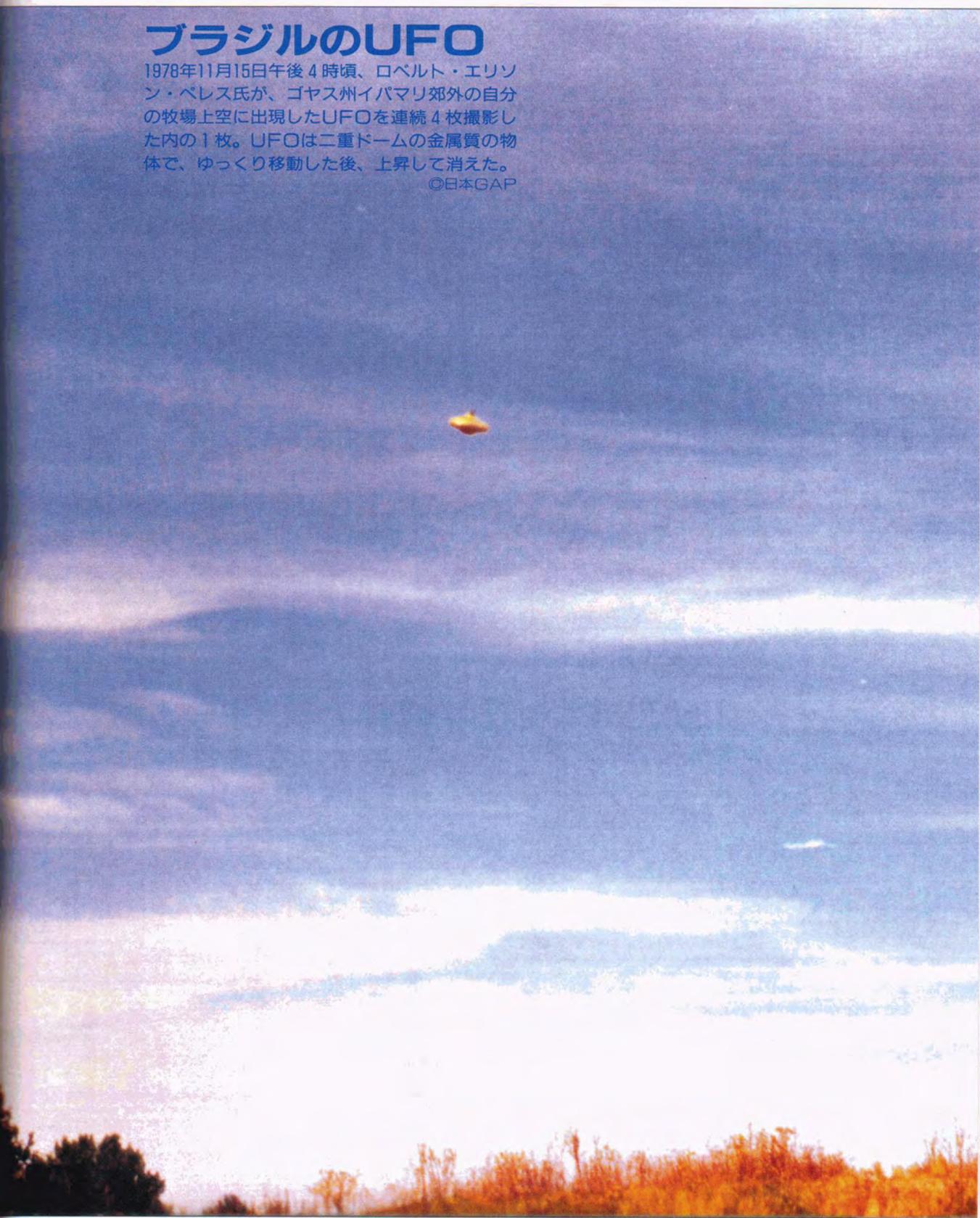
この後者の作戦は、調査されたロズウェルの事実と矛盾する映画の場面を見せることによって、結局ロズウェルの事件は発生しなかったのだと思わせて、恐怖心をいだいている不信論者達を安心させる狙いもあったのかもしれない。

以下、ポニーキャニオン発売のビデオ「宇宙人解剖フィルム完全版。ロズウェル事件48年目の真実」の最後に出てくる二〇分間にわたる記録映像の抜

ブラジルのUFO

1978年11月15日午後4時頃、ロベルト・エリソン・ペレス氏が、ゴヤス州イパマリ郊外の自分の牧場上空に出現したUFOを連続4枚撮影した内の1枚。UFOは二重ドームの金属質の物体で、ゆっくり移動した後、上昇して消えた。

©日本GAP



粹は、明るい照明のもとで行なわれている解剖遺体の粒子の荒い画像を見ている。別な方面からの報告によれば、この部分は各種のフィルムに撮影されている三回の死体解剖の二番目だという。

病院の手術室のような部屋で三人の医師が働いている。そのうち二人はフード付きの病原菌隔離用の服を着ており、他の一人は大きなガラス窓の向こうから観察している。

隔離服を着た二人は黒い死体置き台の上に置かれている一人の異星人の遺体にとりついて作業をしている。その遺体の身長は一・五メートルないし一・八メートルぐらいだ。どうやら女性らしい。この女性の頭は人間よりも大きくて、頭蓋骨の後ろが大きく発達しており、異様な形である。両目は大きくて黒い。胸は腹部が大きくふくらんでいる。たぶん荒れ地で腐敗したのだろうか。

異様なのは手の指が六本、足の指も六本あることだ。右脚の一部は焼け焦げているが、これは墜落時の衝撃のためだろう。頭髮または腋の下の毛はない。見たところ肋骨もないようだ。耳と鼻は小さいが、人間のものと比較して未発達だ。口には歯がなくて、唇はつきりしない。耳は極端に低い位置にあり、アゴの関節の下にある。ヘソもない。性器の割れ目と思われるものがあるけれども、はつきりとわかる乳

房はない。したがってこの死体は異星人と地球人との混種ではないかと考えている研究家達がいる。というのは一応性器があること（これは地球人的なもの）、乳房が存在しないこと（これは異星人的なもの）のためだ。

イギリスUFO研究会の幹部であるフィリップ・マントルがむかし見た別な記録映画の場面によると、身長約一メートルから一メートル二〇センチ、手に四本の指を持つ異星人の遺体解剖が行なわれていたという。世界トップクラスのフィルムメーカー、コダック社がこのフィルムのリーダー（端に着いている挿入部分）を調べたところ一九四七年製であることがわかった。つまりロズウェル事件の発生した年なのだ。

これで大体に見当がつくのは、四本指の方がロズウェル異星人らしいということだ。そうすると六本指の方は別な場所に墜落した異星人で、これを軍がなんらかの意図でロズウェルと称したのか、それとも単なる混同なのかは不明である。

ロズウェル異星人はロボットか

筆者がかなり以前にヨーロッパの某国で某研究家から聞いたところによると、あのロズウェル円盤墜落事件はまぎれもない事実であったが、遺体として回収された異星人は実は本物の人間

ではなくてロボットなのだという。

そういえば、アダムスキーは昔ソ連で製作されたUFOの劇映画を見て、画面に出てくる異星人のスカウトシツプ（円盤）の中に、自分が絶対に洩らしてはならない特殊な「物」があるのを見て、ソ連にも自分と同じようなコシタクティーがいることがわかったと述べているが、あれはロボットを意味するのだと昔アメリカで別人から聞いたことがある。それが真実だとすれば異星人の科学は物凄い進歩をとげているということになる。

ジム・ラグズデイルという当時のロズウェルの現場を見た唯一の目撃証人が昨年（九五五年）七月にガンで亡くなったのだが、その五日前に公証人に対して次のように証言している。

「野原で夜遅く恋人とデートしていたら、突然空中に爆発音がして物体が落下した。そばへ行くと円盤型の物があり、大きな穴があいていて、その中には立派な椅子が一つと四く五個の小さな椅子があった。壁のパネルには多数の不思議な装置があった。さらに身長一・二メートルほどの死体が四個あり、肌は灰色で、触るとへビのような感じがした」

これは本物の人間ではない。明らかに人造人間、つまりロボットである。ただし全くの金属製機械仕掛けのロボットではなくて、有機質の人間に似た内臓を持つロボットらしい。

ラグズデイル氏は現場に散乱していた金属片を持ち帰ったが、数日後、恋人が謎の交通事故で死亡し、彼の家には留守中に泥棒が入って金属片は持ち去られていたという。軍の機密保持要員にやられたのだろうか。

秋山眞人氏の見解

ここで超能力者であり、またコンタクトティーとして名高い秋山眞人氏の見解を聞いてみよう。時は五月下旬、場所は同氏の事務所である。

「今回中国から宇宙人情報が出るというのを見越してこの記録フィルムが出ているのです。ですから、かなり作爲的な感じもするんです。例のミステリーサークルをマスメディアに流したコリー・アンドリュースの所に最初にこのフィルムが匿名で送りつけられたらしいのです。それでアンドリュースからいろいろな所にはばらまかれた経緯があります。ただし別なルートでだいぶ前に沖縄の議員の手にこのフィルムが入っているんです。それはアンドリュースではなくて軍関係の資料から出たものだと聞いています。」

以上が事実とすればロボットです。ロボットといってもクロン人間です。つまり生体ロボットです。

（クロンというのとは細胞、DNAなどの一つの個体から無性生殖的に生じた遺伝的に均一な個体群。俗に複製生

物、コピー生物という)これは異星人にとつて非常に困難な探索等に使う場合があるんです。

いわゆる小人タイプと言われている宇宙人のなかには、クローンで作ったものと、非常に遠い惑星から来ている原種もあるんです。ですから現在、異星人達にとつてはクローンで作ったロボットのようなものと、それに非常に近い形の原種と二種類の登録がされているわけです。

そこでロズウェルの場合ですが、ロボットの一体を手に入れて解剖した可能性もあります。しかし私がああ記録フィルムを見た限りでは、やはり生き物だと思ふんです。これ自体はハリボテではないですね。ですから可能性としては一つはクローンを捕まえて解剖したか、もう一つの考え方としては、障害者を使ってかなり精密にやった死体解剖のフィルムを捏造用に作ったという可能性もあります。

これは指が六本あるんでしょう。ロズウェルの本物といわれるフィルムは指が四本です。中国から出てきたフィルムは指が四本です。

もう一つの可能性は、本当は指が四本だったけれども、混乱を起こさせるためにハリボテの指だけ付けておいて、それを撮影させたとも考えられます。

大体、このカメラマンに撮らせた経緯というのが非常に不自然です。だからわざと撮らせているんなりーク(漏

洩)をさせたとも思われます。

どちらにしても、この写真(筆者がポニーキャニオン社から借用した異星人解剖写真)と入手経路やいろんな人間をながめてみますと、まず正しい異星人情報(われらの太陽系の各惑星に住む人間は地球人と全く変わらない体型や知能と運動能力を持つという情報)が流れつつあるので、それが広がらないようにするための作為であると思われまふ。つまり正しい異星人情報と混乱しやすいような正しいものに近いようなものを流していると思われるんです。ですから一種のクロニ的な生体ロボットを実際に捕まえた例は何体かあるんでしょうから、その一体を解剖しているフィルムを作った可能性もありまふ。体自体は本物の生命体だと思ひますが、一連のフィルムを特殊な編集によつて作つていった経過があるんじゃないでしょうか。

しかし(と言つて解剖写真を指さしながら)この写真の「人間」は間違ひなく生き物です。ですからハイテク応用によつて、ある程度の機械的な部分と生体の部分が融合された中間的な物だと思ひますね。

このタイプの「宇宙人」というのは、小型の球形のUFOが腹の中に入っているんです。機械的な部分はそれだけです。それに対して増殖したそれぞれの生体の神経部分を脳につなぐようにつないであるんです。そして何かの理

由でそのロボットが作動不能になったときには、証拠を残さないようにするために、UFOの部分は上空に上昇させて待機している宇宙船が押収し、あとの生体の部分は、処分するのであれば、ある波動を放射すると全部ドラドラと寒天状になつて蒸発してしまふんです。

しかしこの写真を見ると、どっちかという判定がつきません。いづれにしても、正しいUFO情報を混乱させるために作偽的なフィルムが流されていることは間違いありません。

正しい異星人情報に恐怖はない

前述のようにわれらの太陽系の友好的な惑星から来る異星人が搭乗しているスカウトシップ(二〜三人乗りの観

測機。俗に円盤といわれる小型の宇宙船。通常は大母船に積載されて、地球に接近してから離船する)には本物の人間パイロット以外に一体のロボットが使用されていて、着陸してから船外活動などに使用されると筆者は以前にヨーロッパで聞いている。地球の危険地域に来た場合はこのロボットを使用するといふ。これは秋山氏の話と一致する。したがつて正しい異星人情報に

関して恐怖すべきものは何もないのだ。ロズウェル事件で、「宇宙人」というのは不気味な格好をした悪意に満ちた生物なのだといふ概念が一般化すれば、

地球人は根本的に誤つた知識を持つこととなる。太陽系の惑星群から来る本物の異星人は地球人と全く変わらない体型を持ち、高度な知能と超絶した科学力を駆使し、テレパシー、遠隔透視その他の能力を持つ神に近い人々である。アダムスキーは述べており、筆者もそのことを知っている。

精神と科学の両方の進歩が必要

昔、といつても一九五四〜五年頃のマンデス・フランス首相の時代に、フランスの田舎で多数の小人宇宙人らしきものが、ぎこちない動作で線路のそばをヒョコヒョコ歩いていたという事件が発生したことがある。あれもロボットの群れだったのだから。

筆者が昔アメリカで読んだアダムスキー最後のまぼろしの原稿(書物にならなかつた)には、金星では各家庭でほとんど人間と同じように作動するロボットが多用されているとあつた。こうして人間の肉体の疲労を軽減させているのだ。これも彼らが超長寿を保つ一つの理由らしい。

余談だが地球でも現代は電気洗濯機掃除機、炊飯器その他の電気器具類から成る、いわば「ロボット」類を使用している。これによつて体力の消耗を防ぐので、これが寿命の伸びの一原因になつていのではないかと思はれるのだ。戦前の昔、厳寒時にタライへ凍

りつくような水と洗濯板を入れて、素手でゴシゴシと長時間洗った原始的で難儀な肉体労働の頃から見れば今は夢のような時代になった。いつかは人間に似た精巧きわまりないロボットが出来て社会に大変革をもたらす時代がくるだろう。

だがその前に重要なのは、科学力による地球規模の環境の大改善と、人間の精神の向上によって地球上の波動を根本的に高次元化することにあると思われる。地球社会を絶対平和にして人間が超長寿を保とうと思えばだ。

アダムスキーは正しかった

アダムスキーがソ連の映画を見てスカウトシップ(探査用円盤)の中にロボットがいるのを口外しなかったのは、混乱を防ぐためであったと思われる。つまり人間に似て非なるものを宇宙の彼方の惑星から来た“宇宙人”だと一般大衆に思い込ませないように細心の注意を払っていたと考えられるのだ。

彼は一九五二年一月二〇日、米カリフォルニア州南部のデザートセンター砂漠で、着陸した金星のスカウトシップ(探査用円盤)から降り立った金星人と約一時間会見してテレバシーとジェスチャーで語りあったが、そのときに米空軍の数機の偵察機が超低空で飛来し、会見中のアダムスキーと金星人の姿や、そばの斜面に一部分着陸し

ている金星のスカウトシップなどを機中から撮影した写真が、米空軍のトップシークレット(超機密)証拠物件として秘蔵されているという話が昔から伝わっていた。筆者がアメリカで徹底的に調査した結果、これは事実であることが判明した。ただしどこに隠置してあるのかは不明である。

アダムスキーが会見したその金星人やその他の異星人は、すべて見かけは地球人と全く変わらないという。このことはコンタクトテイである秋山真人氏の体験談でも強調しておられることである。したがって、いわゆる“宇宙人”なるものを奇怪な姿をした妖怪や悪魔的なものとみなしがちな一般の風潮はひどくゆがめられた概念にもとずいているのであって、これはなんらかの方法で是正されるべきである。友好的な惑星から来る異星人は地球人と同様、全くの人間そのものであり、しかも偉大な英知と高貴な精神の持ち主であることは前述したとおりである。詳細については新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』に述べてある。

しかし米空軍や米政府はいずれ真相を発表するだろう。「本当の宇宙人というのはオバケやロボットではないのだ」と。その発表の時期は遠くはないように思う。そのときこそ地球の文明が真の意味で宇宙時代に突入するときだろう。



●ロズウェル宇宙人解剖事件を詳細に記録したビデオが発売されています。83分のカラーとモノクロから成る実写画面は1947年7月の大事件の実情を克明に描写し、見る者を興奮させます。

●ハイファイ、ステレオ、VHS、スタンダードサイズ、1巻。
定価 ¥9,800 送料 ¥700
発売元 ポニーキャニオン社
〒104 東京都中央区入船2-1-1
TEL. 03-3355-6611

ここではロズウェル事件が全くの捏造事件だというのはないし、ロボットの存在を否定するものでもない。むしろこの事件はまぎれもない事実であり、驚異的な生体ロボットを製作するほどの科学力を持つ異星人に対して畏敬感さえ生ずるのだ。この背後には本物の異星人が存在して、亡くなった生体ロボットに対して憐憫の念を送っていたことだろう。

複雑きわまりない地球社会のデマ情報や誤った概念等から脱して真実を知るのは容易ではないけれども、しかしやはり“真実”を求めて前進することが重要であり、そのためにはあらゆる情報網を駆使して探求の手をゆるめずに、ひたすら「知る」ことに専念して探求をすすめたいと思う。

戦後世界の耳目を揺るがせながら信・不信の渦中にあつたUFO問題はいまや文明の流れを変えるほどの重要な現象として注視されるようになった。余談ながら、アメリカへ調査に行くたびに筆者が肌で感じるのは、UFOの出現や着陸にアメリカほどに好適な国はないということである。これは雄大な国土もさることながら、アメリカ人のふところの深い人間性、進取の気性、先端をゆく科学力その他が異星人の“好み”に適しているのかもしれない。その証拠に人口に比例してUFOを信ずる人の比率は一九五〇年代から圧倒的に高率を示していた。それも高学歴の人ほど信ずる傾向が強いといわれていた。

これに比べてわが国のUFO人口はまことにうすら寒い状態にあつたが、いまは多少とも上昇しているらしい。しかしアメリカの後塵を拝する状態は否定できない。他の面でもそのようだ。考えさせられる問題である。国土の狭隘に起因するのだろうか。

真実であったアダムスキーの体験

●ゴードン・クレイトン／久保田八郎訳

クレイトン氏はイギリスの名高いUFO専門誌「フライング・ソーサー・レビュー」の幹部であった。昔アダムスキーを支持して、アダムスキー派編集長チャールズ・ボウエン氏とともに論陣を展開していたが、後に編集者が交替してから同誌は反アダムスキー的になった。この記事は昔の同誌に掲載されたもの。編者(久保田)も昔クレイトン氏やボウエン氏らと文通していたが兩名とも世を去った。

ペルーにアダムスキー型円盤が出現!

この素晴らしい目撃事件の新聞記事を送ってくれたのは、かつてバナグラ航空に属していたペルー、リマのジョージ・ミルバークで、彼の旧友であるアレク・デンブスター(訳注Ⅱ一九五五年から五六年にかけてイギリスのフライング・ソーサー・レビュー誌の編集長であった人)を通じて私に回送されてきたものである。

事件は一九七三年一〇月一九日に発生した。この日、ペルー人技師である

ウーゴ・ルヨ・ベガという人が、空中に静止している正体不明の物体をポラロイドカメラで撮影したというもので、これはどう見ても一九五二年一二月一三日に米カリフォルニア州パロマーガーデンズで、不運な、しかもひどく悪く言われていると思われるあのジョージ・アダムスキーによって撮影されたという「金星の円盤」にそっくりなのである。

ジョージ・ミルバーク機長には、このペルー人技師を知っている一友人がいるという。そのためにもっと詳細な報告とその写真のコピーがいざれ入手できる可能性があるのです、そのことをミルバーク機長に依頼しておいた。手元にあるリマの新聞「エル・コメルシオ」の一九七三年一〇月二三日付に掲載されたその記事によると次のとおりだ。

一九七三年一〇月一九日、金曜日の午後三時頃、ウーゴ・ルヨ・ベガ氏はリマに向かって車を走らせていた。これにはマトウカナの事業関係の客が同乗している。この客は路傍の露店でマシダリン・オレンジを少し買ったばかりで、ちょっと停車して、そのオレンジを食べようではないかと誘いかけてきた。

ベガ氏の言葉によると、
「そのあと、われわれはほんの数メートルの所に空飛ぶ円盤を見た。息がはずんでくる。二人とも無言のまま。一連の考えが心をかすめた。私は騒がずに車へ走りもどってカメラを取り出した。そして細心の注意を払って写真の撮影をした」

氏はたった一枚だけを写せたという。話は続く。
「最初、円盤はたいそうゆっくり動いていたが、次に上昇を始めて急速に視界から消えてしまった。このため一枚しか写せなかつたのだ。その瞬間、私は写真がうまく写っているとは思わなかつた。写真の技術は下手だと自認していたからだ。だが像が現われるのを見たときは驚喜した。その物体の形が写っているのだ。とにかくこの一枚の写真はそれが本物のUFOで、心の産物ではないことを証明しているよ」

ベガ氏の説明によれば、初めに二人

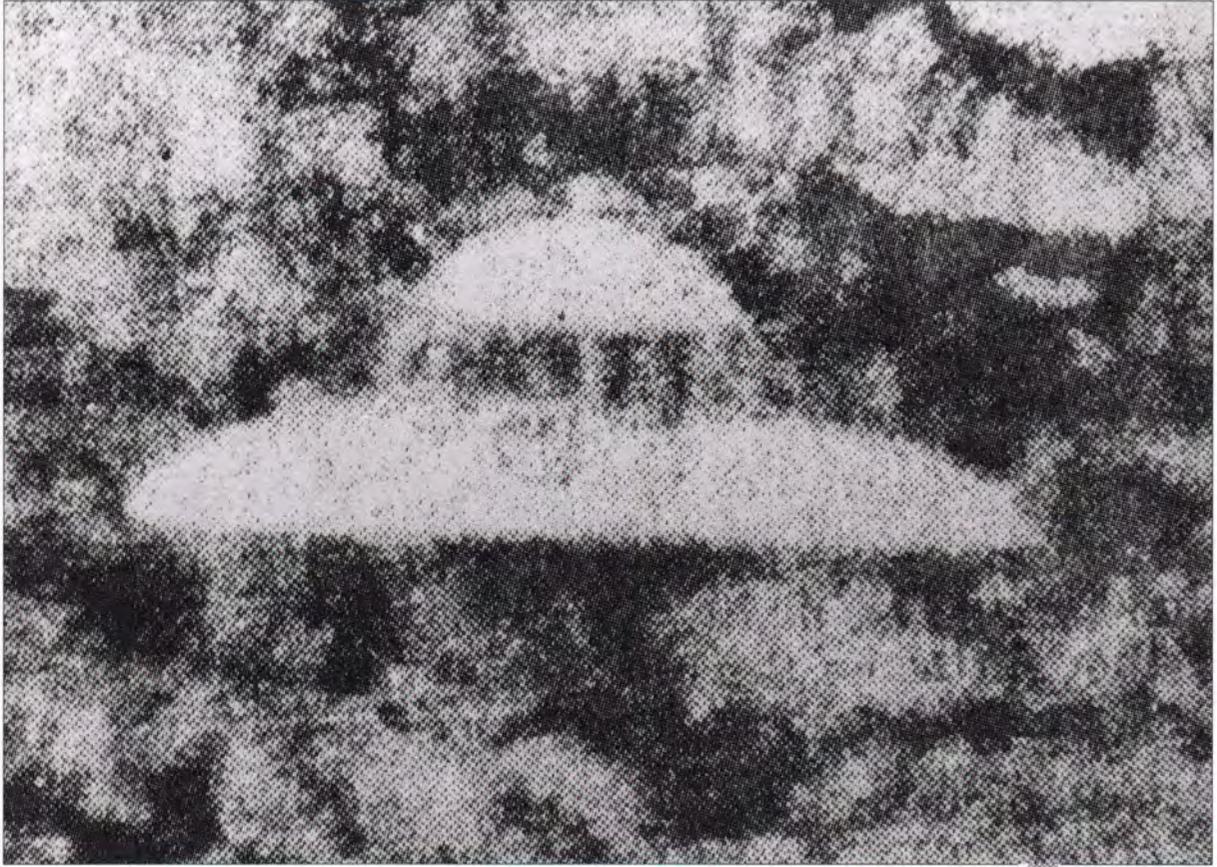
が円盤を見たときは、それが「目の高さ」にあったという。その場所はペルー中央ハイウエーの約五四キロの地点、ラ・カルレテラ・セントラルである。氏は新聞記者に次のように語っている。「それは輝く銀色を帯びていた。上部は丸屋根のように見え、頂上には一定の青い光があつた。」

(ゴードン注①)「アダムスキーは彼のスカウトシップ(俗に円盤といわれる)が半透明のガラス状の釣鐘のように見え、その頂上には「一種の重いレンズのように見える丸い球」があつて、それが光つていと述べている。他の多数のUFO報告も、物体の頂上に必ずしも青色とは限らないが、きらめく光があつたことを特筆している」

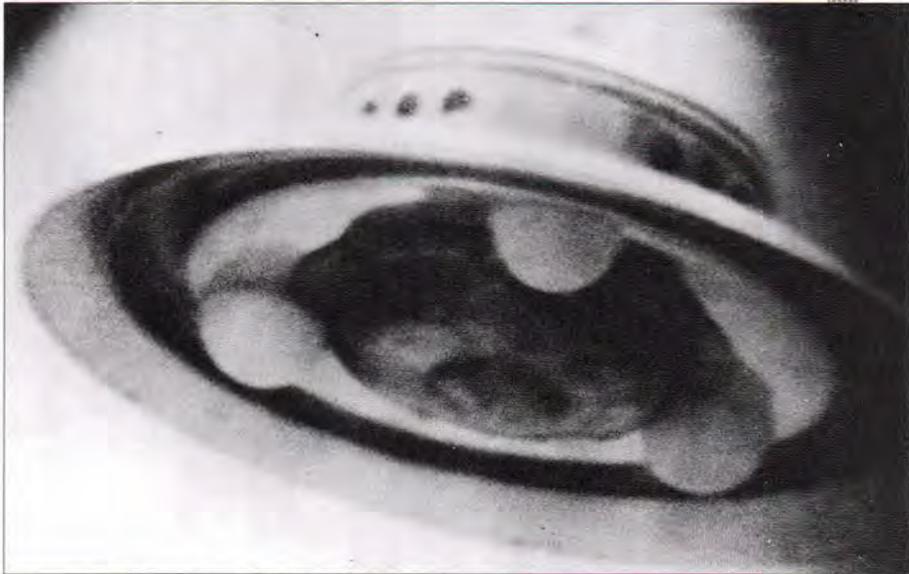
その下に小さな窓群のついた小塔があつたが、これはよく見ることができた。さらにその下方には円盤が大きな台状に広がって、その直径は約一〇メートルだつた。

(ゴードン注②)「約一〇メートルというのはUFOを間近に目撃したという人々の話に共通した目測値である。アダムスキーは自分の見た円盤が約二〇フィートあると考えたが、彼は目撃して呆然となつたために、正確な大きさを注意して測れなかつたと言っている」

円盤の底部の中心にはコーン型の物があり、そこには非常に明るい暗赤色の輝きがあつた」



▲ウーゴ・ルヨ・ベガが撮影したアダムスキー型円盤。©日本GAP



▲ジョージ・アダムスキーが1952年12月13日、米カリフォルニア州パロマー山腹の住宅前で6インチ反射望遠鏡を使用して撮影した金星の円盤（スカウトシップ）。©日本GAP

(ゴードン注(3)) アダムスキーは円盤の底部が光っていたとは言っていないが、彼の写真はたしかにベガ氏のスケッチに見える「コーン」と同じ物を示している。しかも他の多くの目撃者もまったくこれと同じコーンについて語っており、多数の円盤写真もはつきりとそれを示しているか、それらしい物を見せている。その上、アダムスキー写真とベガのスケッチはドームの下部の側壁を取り巻いているリングまたはどっしりしたコイルに関してまったく一致している。丸窓のすぐ上のキャビンを取り巻く「リング」といわれるものや、フランジヘスカート状の外縁、それに半分のぞいた三個の球形着陸装置などもそうである。その他にも私が見逃したものがあるかもしれない。

二人が茫然自失の状態から元へもどるのに二〇分ほどかかったが、その後ドラライブを続けるまでに、しばらく円盤のことを話し合っていた。

一緒に目撃した客が誰であるかは新聞社が伏せている。「その人は名を知られたくないある金持ちだ」としかベガ氏は言わない。

ベガ氏は新聞社のためにスケッチを提供した。ごらんのようにこれは典型的な「アダムスキー型円盤」を示している。しかもこのスケッチには見たところ四個ずつの丸窓があるが、これによつてある興味深い話がよくあつてくるのである。多数の読者はご存じあ

るまいから、ここでひとつ紹介しよう。
ステイヴン・ダービシャー少年の驚くべき体験

アダムスキーがパロマーガーデンズの上空に飛来した「スカウトシップ」(偵察用小形円盤)を撮影したと称してから一年二カ月ほどの後、医師の息子である当時一三歳のステイヴン・ダービシャーというイギリスの少年が、一九五四年二月一日の朝一時に、ランカシャー州レック地方のコンニスト湖の上手にある丘の上で、アダムスキー型の円盤と酷似した二枚の写真を撮影したのである。

この日、ステイヴンと従弟のエイドリアン・マイヤーの二人は、コンニストン・オールドマン山の頂上へ登った。小鳥の観察が二人の趣味だったので、鳥の写真を撮るつもりで安物の小型カメラをさげていた。

そして頂上で地面近くの空中に瞬間的に滞空した物体を目撃し、ステイヴンは二枚ほど写した。うまく撮れてはいなかったが、ともかく形と大きさはなんとか示していた。

ステイヴンによれば、その物体は銀色のざらざらした表面を見せており、「光線が透るけれども、中まで見通すことはできないような物」であつたという。

最初それはじかに太陽の光を受けていたが、上昇し始めるにつれて雲が直

射日光をさえぎつたため、少年達もつと明瞭に見ることができた。

「それは固い金属状の物体で、ドームと丸窓(複数)があり、底には三つの球体があつた。底の中心部は黒くて、コーンのようにとがっていた。キャビン・ドームの頂上にはハッチのような物があつた」と言っている。

(ゴードン注(4)) これについては一九五五年三月、ロンドンのフレデリック・ミューラー社刊「ウェイヴニー・ガーバン著『空飛ぶ円盤と常識』を参照)

数日後にステイヴン・ダービシャーが四名の新聞記者の質問攻めにあつたとき、記者達は少年に心変わりを起こさせようとしたり、些細な点で言葉の食い違いを起させようと躍起になつたがだめだつた。また彼らはアダムスキーとレスリー共著の『Flying Saucers Have Landed』を読んだと言わせようとしたが、これも少年は否定した。両親も否定している。

(久保田注) この書の初版は一九五三年九月にロンドンのワーナー・ローリー社から出た。久保田は一九五四年刊の第八版原書を所有している。日本語版は中央アート出版社刊「新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』の第一部に収録)

(ゴードン注(5)) 初版はアメリカではなくてイギリス・ロンドンのワーナー・ローリー社から出た。この出版社

の社長はウェイヴニー・ガーバンであつた。というわけは、最初アメリカの各出版社はアダムスキーの原稿を断つたからである。それでデズモンド・レスリーの原稿と一緒にウェイヴニー・ガーバンが編集して出版したのである。

しかしステイヴンはアダムスキーのスカウトシップ(偵察用円盤)の写真を見たことはあるという。これはロンドンの雑誌「イラストレーターズ」誌の一九五三年九月三〇日号に掲載されたものである。

しかしステイヴンは記者達を困惑させるような少年らしい論理をふりかざして、自分が見た物とアダムスキーが見たと称している物とは「まったく同じ種類の物ではない」と主張した。説明せよとせまられて彼は「イラストレーターズ」誌に出てくる写真の円盤には三個の丸窓が一列に並んでいるが、自分が見た物体には四個の丸窓が一列に並んでいたのだという。

物体が降下してほとんど地面に触れそうになつたときは丸窓が三個しか見えなかつた。これは二人の少年が最初に見た数だったのである。だが、続いて物体が回転したために四つの丸窓があるのを認めた。三個ではなかつたのだ。

(久保田注) 少年が目撃した光景は、久保田が昔経営していたゴズモ出版社(後にユニバース出版社と改称)から

刊行していたUFO専門誌『ゴズモ』の一九七三年発行第六号六四頁に掲載されたレナード・クランプの『宇宙・引力・空飛ぶ円盤』の『序』に詳述してある。いずれ本誌に再録する予定である。

円盤の丸窓は四つだった

翌年の一九五五年にイギリスで『フライング・ソーサー・レビュー』誌が創刊された。

(久保田注)これはUFO専門誌として世界一流であった。私が寄稿した西本奈生ちゃんの驚異的な高松円盤事件の英文記事も掲載してくれたことがある。この高松円盤事件は久保田著『UFO・遭遇と事実』に出ている)

私(ゴードン)は多年の海外生活を終えてイギリスへ帰ったばかりだった。私自身は一九四一年に中国のある都市の上空で一機のUFOを見たことがある。ニューオーリンズでは、一九四四年の一二月に連合軍がドイツを空襲したとき、『フープアイター』が見られたという厳重な検閲済みのアメリカの新聞記事を読んだことがある。

(ゴードン注(6))一九四八年から一九五一年にかけて私がブラジルにいたときに初めてUFO関係の記事が出たのを見た。したがって当然のことながら私は『フライング・ソーサー・レビュー』誌の創刊号からの読者になっている。そしてまもなく当時の編集長だっ

たアレク・デンブスターや編集長のウエイヴニー・ガーバンと知り合った。

当時の実業界におけるウエイヴニー・ガーバンの地位は、ロンドンのワナー・ローリー社の社長であった。この出版社は一か八かの社運をかけてアダムスキーとデズモンド・レスリー共著の『Flying Saucers Have Landed』(邦訳は『第二惑星からの地球訪問者』)を最初に出版した会社である。

同社が出版に踏み切ったのはまったくガーバンの先見性によるものである。彼は独自の考えから、急増するUFO出現報告の裏に何か真実の要素があるにちがいないという確信を抱いていたのだ。

(ゴードン注(7))ガーバンは『空飛ぶ円盤と常識』の中の一〇頁で次のように述べている。

「一九五三年の始めに私はイギリス、ドーセット州ウエイマスに住む一人の男から手紙を受け取ったが、それによれば空飛ぶ円盤は存在するどころか、その町の背後の丘に着陸した円盤の乗員と彼は実際に話があったというのである。その乗員は『自分達が地球へ来るのは地球の政治指導者がずるずるとつくりあげた困った状態に対して警戒するようになったからだ』と言った。

これは二〇年以上も後になってわれわれがやっとうなずけるようになった洞察力である。ガーバンは続ける。「私はこの手紙を読んだときにしげら

く考えた。それから衝動的にそれを引き裂いてクズかごの中に投げ入れた。その手紙の差出人を狂人だと思っただらだ。

それから約一カ月後にアダムスキーの原稿と写真類が私の机上にあった。そこで急にそのウエイマスからの手紙を思い出したが、遅すぎた。私はその人の名前を忘れたので、私の不信を許して頂きたい。そしてもう一度、早急に連絡して頂きたい」

私(ゴードン)が知る限りでは、ガーバンは本人から連絡を受けていない)

一九五五年、私達はときおり昼間に会合をもったが(こうした会合はロンドンのセント・マーティンズ・レーンにある舞台俳優などの出入りで有名なパブ『ザ・ソールズベリー』で通常行なわれた)ガーバンはアダムスキーの円盤写真とダービシャーの写真について、ある興味深い事実を話してくれたのである。

彼が言うには、アダムスキーからの写真を受け取ったとき、大写しにされたその円盤写真には、たしかに一列に四個の丸窓があったという。しかしこの写真を初版本に掲載するにあたって、出版社側は写真の右側をカットしたために、印刷されたものは丸窓が三個しか見えないものになってしまった。そういう事実を知らないはずのダービシャー少年は、「自分」が見た円盤に

は四個の丸窓がついていたと主張したのである。両名が撮影した各円盤には、とにかく丸窓の数に関して同じだったのだ!

(ゴードン注(8))デズモンド・レスリーとジョージ・アダムスキー共著の『Flying Saucers Have Landed』で一九七〇年にロンドンのネビル・スピアマン社から刊行した新版には、レスリーの追加記事が掲載してある。すでに指摘したようにアダムスキーはやはり弁護されてしかるべきだと信ずる。ゆえにこの問題に関心のある人はこの書物を、特にレスリーの記事を注意深く読みたい。彼のアダムスキー問題に対する現在の見解は『フライング・ソーサー・レビュー』誌に述べられてきた見解ときわめて近い。アダムスキーの言う謎の『金星人』の性質や由来については特にそうである。

ウエイヴニー・ガーバンとのこの対話のあとしばらくして私はレナード・クランプの『宇宙・引力・空飛ぶ円盤』というすぐれた書物を読んだ。

(久保田注)円盤の推進原理を解明したクランプのこの書については、私の翻訳で昔の『ゴズモ』誌に連載したことがある)

その序文はレスリーによって書かれているが、ガーバンがアダムスキーの円盤写真の右端をカットしたこと、ダービシャーが新聞記者から質問攻めにあっただけについて私に話してくれた

ことをレスリーが確認していることを知ったのである。レスリーは『Flying Saucers Have Landed』の新版中でもこのことを確認している。

しかもレナード・クランプはその著書の中に正射影法による比較図を掲載し、それによってアダムスキー写真とダービシャー写真を厳密に比較し、問題の両物体が何であろうと、形に関してはまったく同じであるとの結論を出したのである。

アダムスキーがとてつもなく巧みでつちあげたインチキ劇をカリフォルニア州からイギリスのレック地方まで足を伸ばして演じたのか、それとも一三歳の少年がそれをやったのか、いずれにしてもこのインチキ説は次第に影が薄れ始めたのである。

中米でもアダムスキー型の円盤が撮影された

くり返すが、アダムスキー型の円盤写真としてはこの二点だけが唯一のもではない。この種の写真は他にも多数存在するのである。それらの写真の信憑性は他の型のUFO写真と大体に同程度である。特に私はアダムスキー型のある写真を思い出す。

それは一九六三年の春か夏のイタリアのグラビア誌に出ていたものである。解説文はマデイラという米陸軍将校に関するもので、その人が撮影した物体は中米のある共和国の（私はコスタリ

カだと思う）高速道路上かそのそばに立っているときに、円盤が着陸するのを目撃したのだという。私はその物体とアダムスキー写真の物体とに相違を見出すことはできなかった。

一九六三年にイタリアの新聞は多数のUFO関係の報道記事で溢れていた。そして私はその多くを『フライング・ソーサー・レビュー』誌のために翻訳したが、その中にこの将校の記事も含まれている。しかしその記事は当時レビュー誌の編集長だったガーバンが採用しなかった。なぜ活字にしなかったかは謎である。なぜなら彼はアダムスキーがウソつきでもなければ山師でもないことを強く確信しており、この写真がアダムスキーを有利にすると考えていたからだ。

（ゴードン注⑩）この翻訳のファイル用コピーは空き部屋の膨大な書類の下に埋もれているはずだが見つからない。マデイラ撮影の写真の載っているオリジナルのイタリア紙の切り抜きは、私の訳と一緒にガーバンへ渡したが、その後どうなったか知らない。

ペルーのベガ氏の目撃報告の到着は、アダムスキーの写真類やその体験記について綿密な再考をするほうが賢明ではないかということを示唆している。

というのは、私が先にも述べたように一九五二年以来多年にわたって「釣鐘型金星円盤」の目撃報告やその写真類の出現の流れが確実にあつたばかり

ではなく——これは疑う人にとっては恐怖以外の何物でもないが——アダムスキーが早まって発表してしまった、あの「背の高い、きれいな、長髪の、慈愛深い人」に関する報告類も出てくるからだ。しかもアダムスキーの報告はアメリカやヨーロッパで人々が長髪を好まなかった頃のことである。

アダムスキーを恐れるのはなぜか

一九六六年一〇月に私が書いた記事『中南米におけるヒューマノイド』の中で、誠実な人はこの種の問題について非常に綿密な調査を要求するけれども、おそらくこのような誠実さは示されることはなかったと述べた。これはアダムスキーは結局正しかつたのかも、しれないという恐怖のためである。

（久保田注⑪）この傍点の部分は原文ではイタリック体にしてある。

結局われわれは一九五二年以来膨大なUFO関係報告「コンタクト体験記類」を見てきた結果、われわれは心の操作、洗脳、プログラミング、計画などについて多くを学び始めている。

現在われわれの所へ殺到しているまったくフアンタスティックな体験記類を考えてみると、一九五二年にジョージ・アダムスキーによって語られた体験だけを特に「問題外」または「納得できない」としているのはどういふことなのだろうか？ 彼はむしろ長持て

がすると思われろのではないだろうか？

やはり空飛ぶ円盤だ！

最後に、アダムスキーの「金星から来た円盤」という特異な問題に関して付け加えたい。私の写真術の知識はきわめて貧弱なものだが、写真に関して深い知識を持つ多くの人が多くの機会にこの問題を論じ合うのを聞いてきた。そしてジョージ・アダムスキーがなんとやつかいなものを撮影したことかと話し合っている人が二人といなかったという事実が強く打たれたのである。

（久保田注⑫）アダムスキーの円盤写真は模型やトリック写真ではなくて本物の円盤であるという結論を写真の専門家達が出したという意味。

こうしたさまざまな「解釈」を集めた私のささやかなコレクションの中で、特に罪のない権威者達が次のような判決をくだしているのが目立つ。あの円盤はアメリカの病院で用いられる一種のランプ。タバコ入れ。ニワトリの卵器。

あの謎の物体がこの三種類の目的に役立つとは、ともかくも私には認めがたい。年月の経過とともに、私はあの物体がジョージ・アダムスキーの言ったとおり物なのだろうと、しきりに考えるようになってきた。「空飛ぶ円盤だ」と！

訳者（久保田）付記

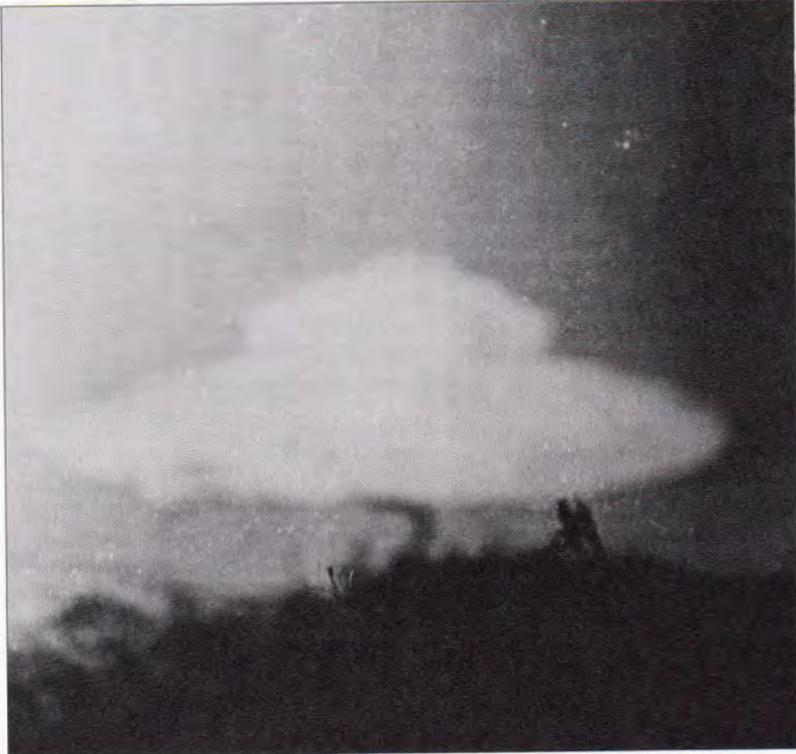
この記事に掲載したダービシャーが従弟のマイヤーと二人で写っている写真と、ダービシャーの説明を聞きながらお父さんが描いたイラストの入手に関しては不思議な経緯があった。

私は一九七三年の四月からコスモ出版社を設立して商業誌としてUFO専門誌『コスモ』を同年七月より発行し始めた（後に『UFOと宇宙』に改題）。これは当時の日本GAPの貧弱な活動ではアダムスキー問題が拡大しないと考えて別個に展開した出版業であった。

当時、掲載用の写真類は大手の写真提供専門のO社と取引して仕入れており、窓口としてT氏がわが社に入りにしていた。

あるときT氏は「こんなものがありましたが必要ありませんか」と言って二枚の写真を出して見せた。なんとその一枚はステイヴン・ダービシャーがエイドリアン・マイヤーとともに写っている勇姿であり、他の一枚はダービシャーが撮影した円盤を、息子の説明を聞きながらお父さんが手書きで描いたという説明付きのイラストであった！この二枚を夢想していたときなので私は飛び上がらんばかりに驚いた。T氏はこれらの写真の意味を全く知らないで持参したという。普通なら売れもしないようなこんな写真を誰がO社へ持ち込んだのか、全くの謎である。

当時私が経営していた出版社では不思議な事がよく発生していた。



▲1954年2月15日、イギリス・ランカシャー州のコンistonで、当時13歳のステイヴン・ダービシャーが撮影したアダムスキー型円盤。



▲カメラをかまえたステイヴン・ダービシャー。右はいとこのエイドリアン・マイヤー（8歳）。



◀ステイヴン・ダービシャーが目撃した円盤のスケッチ。

drawing by Steven Derbyshire, age 13 years, done before he was 14. The same illustration submitted

●「自然治癒を考える会」で会長講演

本年四月三日、医師団の任意研究団体である「自然治癒を考える会」より久保田会長に講演の依頼がありましたので、当日都内千代田区のニューグライヤモンドビルで、会長はアダムスキー問題、宇宙哲学による癒し、ルールドの奇跡その他について三時間熱弁をふるい、多大の感銘を与えました。

このグループは五〇名ほどの医師から成るようですが、当日の出席者は約二〇名。幹事は横浜の某大病院の耳鼻咽喉科医長で若い女医さんの浦尾弥寿子医学博士。浦尾先生はむかしからアダムスキーの著書を読んでおられて、特に「生命の科学」が素晴らしいというところから久保田会長を招待されたもので、当日は二時間の予定だったのに、内容があまりに面白いのもっと話せという要望によって、さらに一時間延長して計三時間に及ぶという大熱演でした。

●東京造形大学でまたも会長講演

かねてから同大学教授で日本GAP会員の佐藤彰先生のご招待により、久保田会長は毎年一回同校でUFO問題と宇宙哲学の講演を行なっていますが、今年も三回目として五月三十一日に一年生男女学生計三五〇名を対象にして大教室でアダムスキー問題と宇宙哲学の講演を一時間三〇分行ないました。これは一般教養の正規の授業の一端として実施したもので、一時間を講義、三

〇分をスライド映写にあてて会長が熱弁をふるい、多大の拍手をあびました。今後も毎年同校で講演を行なう予定です。写真入り別掲記事をご参照の程を。

●秋田支部大会、盛況

かねてからの予告どおり、六月八日には秋田支部大会が秋田市の秋田パークホテルで開催されて、出席者四一〇名のもとに盛況でした。秋田支部は二年前に第一回大会を開催して以来、隔年ごとに（二年に一度）大会を開催する予定になっており、今年が第六回目です。この熱意により東京、静岡、大阪方面から参加した人達もあつて、会場は熱気に溢れ、素晴らしい雰囲気のもとに進行しました。

夜は同ホテルの別室で夕食会を開催、演芸として副支部代表で民謡の大家・佐藤晴雄氏の見事な歌と津軽三味線の名手・佐藤裕二氏の素晴らしい演奏等で盛大な拍手が渦巻く一夜でした。この後さらに二次会もあつて徹底的に盛り上がったようです。

翌日は絶好の晴天を約三〇名で観光に出発。目ざすは鳥海山麓の由利高原。標高五〇〇メートルなるも隈氏二度の汗ばむ陽気のもとで空を観測。早速数名がUFOを発見。帰途、雄物の川の橋上でバスの窓から東京本部役員に加藤純一氏が大きな円形の銀色の物体を目撃したが黙っていたとのこと。これについては別掲記事をお読み下さい。とにかく支部大会は大成功でした。

●今年度秋の日本GAP総会

たびたび予告しましたように、今年度の秋の総会は東京都港区の機械振興会館で盛大に開催の予定です。今回は日本GAP特別会員の九五歳翁・塩谷信男医学博士の「大宇宙の無限の力による長寿健康法」と題する素晴らしい講演が行なわれます。先生はいまだにゴルフをされるほどの驚異的な体力の持ち主ですが、その秘訣は先生独自で開発された瞑想法にあるとのこと、この指導も合わせて行なわれます。総会翌日は都内観光を実施しますが、今年には三コースに分かれて出発。各自で好きなコースを選べます。詳細予告は本号四七頁に掲載。申込み要領等その他が詳述してありますので早めにお申込み下さい。

●東京本部月例セミナーの講演録音テープの販売元変更

従来、東京本部の月例セミナーにおける久保田会長の「生命の科学」解説講義のテープは松村芳之氏が製作して頒布していましたが、本年八月の解説講義のテープから本部が提携しているテープ製作会社による本格的な製作によって音質やラベル等を良質化して頒布します。そして従来は二巻セットにしていたのを解説講義のみ一本にして定価を一五〇〇円とします。詳細は本誌巻末の広告頁に出ていますので、八月分からのテープのご注文はかならず日本GAP宛にお願い致します。ただ

し代金は前払いです。なお解説講義のビデオは従来どおり伊東芳和氏が取扱いますから、そちらへご注文下さい。

●日本GAP特別維持会員制度

日本GAPは普通会員とは別に特別維持会員制度を設けています。これは一種の寄付制度であり、普通会員がさうらにGAPの運営と発展に貢献するための援助活動として、絶大な役割を果たしています。これに加入すれば久保田会長が個人で毎月発行している「意識の声」と題する小冊子のエッセイが各維持会員に直送されます。これは本誌に掲載されない秘話、会長独自の宇宙的能力開発法、会長の珍しい体験、行事の速報、その他興味深い記事が掲載されています。これを綴じて保存している人も多くいます。特徴は常に読者に大いなる信念と勇気と希望を起させるための激励に満ちている点にあります。エッセイ「意識の声」はA4判紙面にぎっしり印刷された記事が四頁分ある美麗オフセット印刷です。

特別維持会員に加入希望者はハガキに「特別維持会員案内書送れ」と書いて日本GAP宛に出せば案内書と専用振替用紙が送られます。ただし普通会員でない人が特別維持会員だけになることはできません。退会は自由です。日本GAPは絶対に強制や押し売りを致しません。入退会の全く自由な調和に満ちた明るい研究団体です。安心してご参加下さい。

いま世界の人口の少なくとも五〇パーセントはなんらかの病気で苦しんでおり、健康そのものと称している人でさえも、ときには頭痛、風邪、少しばかりの消化不良、その他にかかっている。病気というものがこうまで蔓延しているのは不思議ではない。というのは、こんなにスピードを競う世界では、人間が生命に関して自分自身を知ろうとする余裕がほとんどないからである。人間の肉体の働きの謎と、形ある物の維持に必要な化学物質の解明に、科学が絶大な役割を演じたのは事実である。

世の中の人々の考え方としては「病気の原因」の排除を考えるよりも、何があるんでも病気そのものを排除しようとする考え方に落ち着いている。そして今の世の中で時間的余裕のないこの頃は、各人が価値のないゴールを目ざしての気違ひじみた競争から離れて、最少の時間を得ようと必死になつているのである。価値がないというのは、もし本人が自分の達成事を羨しむだけの健康を維持できないならば、それは無価値になるからだ。

治癒の科学は古代の古めかしい拷問の方法から、怪しげな治療師が病人の頭蓋骨に穴をあけて簡単な頭痛からひどい嗅病に至るあらゆる病気を治そうとする悪魔的な医師が活躍した中世の時代に至るまで、長い段階を経ていた。

しかし新しく発見された各種の治療法があるにもかかわらず病気が存在し続けるし、世界の人類の苦痛を引き起こす

思われる唯物科学の表面的な外観の背後に、もつと何かがあるのではないかというところに人間は気づき始めているのである。

科学は今や人間の感情が肉体に凄影響を与えていることを発見し始めており、その角度から病気を研究しているし、科学者はいまや現実の人間を扱っているのだ、本当の達成の道を歩んでいると感じている。彼らはあらゆる原子が物質、力、知性を持つことを証明したが、それは「宇宙の意識」の三つの大きな属性なのである。このようにして、人体の研究は「宇宙の意識」つまり「因」の経路を通じてもたらされねばならない。

最近の実験によつて、科学者は「怒り」の感情が肉体のある器官に影響を与え、血液中に糖分を放出することを示しており、それによつて肉体を弱めて、侵入する外来細胞の餌食にしていることを証明している。実際、あらゆる個人は一時的にせよ怒りの感情を体験したことがあり、このような不調和な感情は肉体に不調和な影響を与えることは明白である。怒りばかりか憎悪・貪欲・エゴ・嫉妬・恐怖・妬みなどは、肉体に同じような悪影響を及ぼす。

「心」という大通りを進行することが許されているあらゆる想念は人間の全身に影響を与えている。というのは肉体のあらゆる細胞は意識的な知性を持っており、そのために万物の作り手である意識的な想念に対して受容的であるからだ。

人間の想念は静かな水面に小石を落とす現象にたとえてよい。この場合、波が発生して広がって行き、ついには池のふちまで達する。想念も全く同じであつて、やはり波の形で全身のあらゆる細胞に影響をおよぼすのである。

恐怖、憎悪等の破壊的な考えはコントロールされない波動なのであつて、肉体内に緊張を生み出すだけである。

一方、「自由」というものは宇宙の偉大な法則であつて、緊張を生じさせる物が何であれ、それは自然の法則に反するのである。我々が怒りの想念を分析するならば、他人または他の物の表現に対抗する人間の抵抗の結果として発生する緊張の状態であることがわかる。たとえば、誰かがあなたの顔を殴ると、あなたはすぐに相手の行為に対して抵抗心を起こし、怒りだす。そして確実に闘いが始まって肉体の全細胞群のすさまじい緊張が発生する。

しかしイエスは言っている。「誰かが、あなたの片方の頬を殴つたならば、もう一方の頬を殴らせよ」と。

というのは、こうすることによつて、あなたは自分の感情の抑制力を保ち、あなたの全身の細胞群を完全に平静な状態に保つ力があることを立証することになるからだ。

「嫉妬」も他人の自由な表現に反抗して起こす抵抗の結果である。「恐怖」は通常、自分自身の自由な表現に反抗して起こす抵抗の結果である。こうした状態の

すべては、肉体内のアンバランスな化学作用を引き起こす。人間はこれまでに「自然の諸法則に従うならば健康で幸せになれる」と繰り返し聞かされてきた。

しかしこの諸法則に関して人間に教えた人はいなかった。自然の諸法則とは非抵抗の行為であり統一された表現であるということを知りながら人間は教えられなかったのである。つまり自然の法則とは「完全なバランスの原理」にもとづくものなのだ。

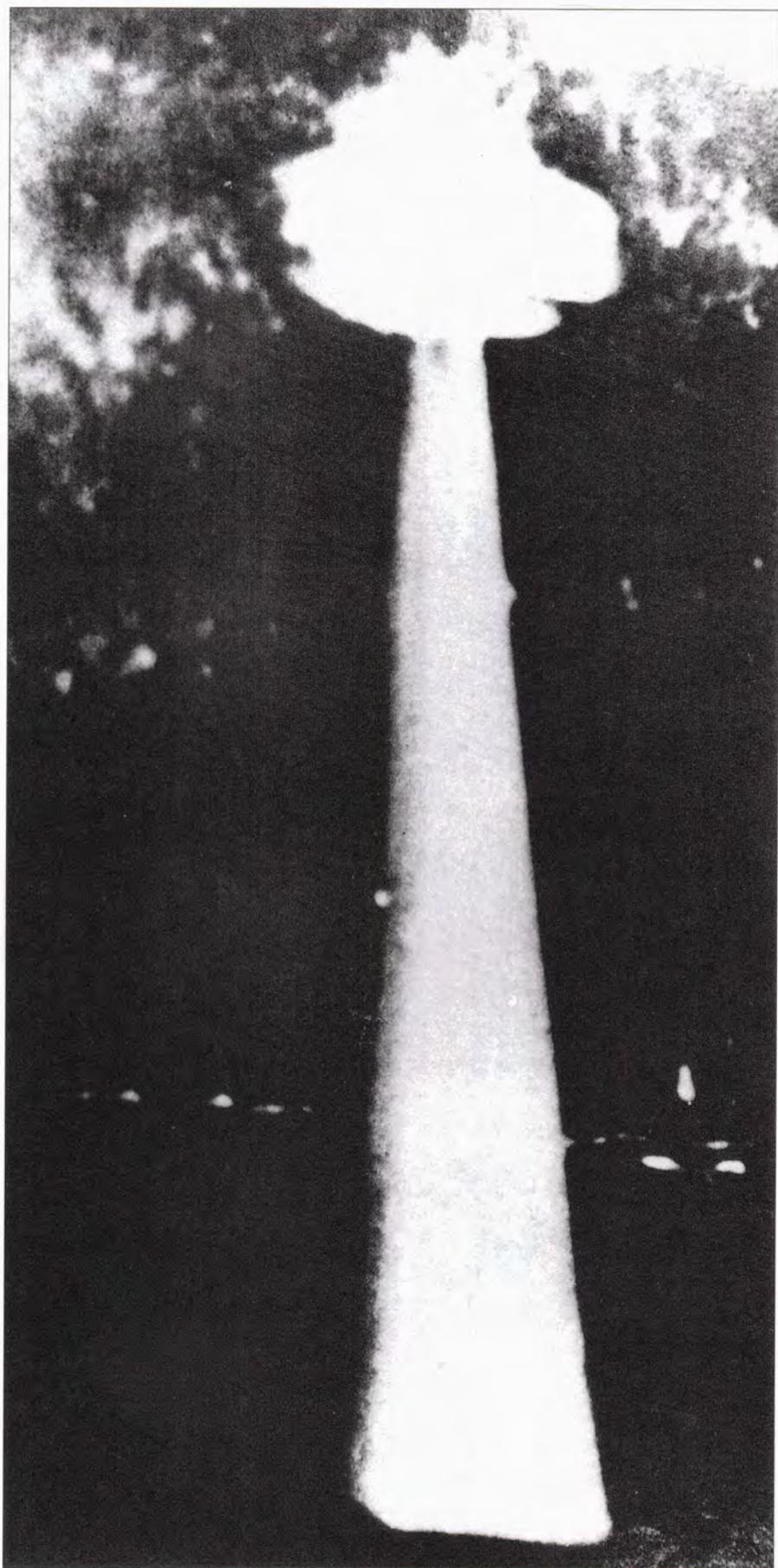
人間はこれまで病気に關しては守勢にまわつており、眞の原因を追求してそれを除くことはしなかつた。医学は大抵の病気を細菌やウイルスのせいにしてきたが、これらの微生物は多くの場合、人間の「憎悪」「恐怖」「貪欲」から生じた子孫であるという事実を医学はつきとめていない。肉体の細胞は人間の想念に答えるという事実疑問の余地はない。細胞は人間の知性の従者なのである。

人間が本当に健康を望むのならば、人間は常に完璧にバランスのとれた想念を保つように努力するべきである。「富裕・名声・名誉」などは「若さ・健康・幸福」などにくらべると、ほとんど意味はない。後者は、生命エネルギーを障害や抵抗なしに肉体と心の中に自由に溢れ出させることによつて得られるのである。

この記事は一九三〇年代に書かれた珍しい論文。現代でも燦然たる光芒を放っている。

●ビームを放つUFO

一九六六年に米ニュージャージー州のワナキューで撮影されたUFO。
長いビームが下方に放射されているめずらしい写真。撮影者不詳。





▲左は編者（久保田一郎）、右は加藤純一。米カリフォルニア州南部の山上にて。撮影/田中 淳

秋田で 巨大円盤を目撃!

●加藤純一

I Saw Big Flying Saucers in Akita
by Junichi kato

去る六月八日に開催された秋田支部大会に出席するため、前日の七日に飛行機で数名の仲間と共に久保田会長のお供をして秋田入りをし、支部の夕食会に出席したあと、私は市内の実家で仲間達とともにゆつくり羽を伸ばしました。

大会当日の朝方、私はUFOとスペース・ブラザーズに関するとても心地良い夢を見ました（編注Ⅱスペース・ブラザーズというのは友好的な異星人のことで、もとはアダムスキーの用語）。

こうした夢は目覚めた後にも、その高尚なフィリングが強く残っている場合が多いので、記憶となっていくまでも残ります。特に夢の中でUFOやブラザーズが出現される時、それは現実となつて私の前に現われます。

大会は大成功裡に終わつて、翌日の観光では鳥海山麓の由利原高原でUFOの観測が一同で行なわれましたが、なぜか出現のフィリングが伝わってきません。むしろ現地へマイクローバスで向かう途中に、強烈な出現イメージとフィリングが湧いていたのですが、現地ではそれが薄れてしまいました。

雄物川の橋から目撃

ところが、その帰りがけのバスの中で、またもフィリングがやってきましたので、雄物川を渡る途中に空港の方向に目を向けると、なんと巨大な円

盤が二機並んでいるのを発見したので。我々を乗せたバスはちょうど建物のない橋の上で止まりましたので、冷静に観察することができました。

右側の手前の一機は、他の一機に比べて二回りほど大きくて、北東の方向に見える低い山並みのすぐ上空（おそらく数十メートル）に静止しているか

のようでした。一方、小型の円盤は我々の進行方向へ移動して行くのが見えませんでしたので、対比しても巨大な円盤の方はやはり静止状態に近かったと思います。

この円盤は文字どおり円盤と呼ぶにふさわしく、見た目も完全に円形であり、その機体はフォースフィールドに包まれていない本体をさらけ出した金属質を思わせる銀色でした。

この日は快晴で太陽の反射のためかギラギラ光っていたのが印象深く、また同型の円盤が仲良く並んでいたのも強く心に残りました。

また、このたびの秋田支部大会は、何もかもが一体感に満ちており、観光のときなどは、まるで子供が遠足に出かけるようなワクワクした楽しさに満ち溢れていました。秋田支部の方々の一致団結した姿を拝見して我々も大変勉強になりました。

その夜、伊藤代表の車で空港へ向かう途中、円盤が出現した山の付近を通りましたが、その一帯には円盤と見間違えるような建物はいつさいありません

んでした。

今度は自宅付近で見る

さて、翌日会社から帰宅途中、自宅近くの小高い丘の向こうから飛んで来る一機のオレンジ色に脈動するUFOを目撃しました。このとき、ちょうど秋田での目撃のことを考えていたので、このタイミングの良さに少々驚きました。また、この夜はあいにくの小雨でしたが、この日に限つて傘を持ち歩いていなかったのがよかったです。そしてこのとき、宇宙の意識という言葉を使わなくても、きちんと伝わるのだなあということに改めて気づかされた次第です。

編者注

加藤君は日本GAP本部役員として活躍する優秀な青年で、また頻繁にUFOを目撃する特殊な宿命を持つ人。テレパシクな直感力が強く、UFOが出現する前には必ず予感がするという。いづれ重要な出来事に遭遇すると思われる前途有望な人物。

同君は多数の人と一緒にいても、なぜか同君だけがUFOや異星人らしき人を目撃することが多く、右の記事の件でもバスの中同乗者達は見ていない。同君はそのとき何かの見間違いであつてはいけなれないと思ひ、黙っていたという。当時、秋田ではナゾの気球が飛ぶ事件があつたらしいが、絶対に気球ではなかつたと同君は断言している。

東京タワー上空の巨大船



▲筆者・遠藤昭則氏

★ 遠藤昭則

一九九六年二月四日、日曜日。日本GAP東京月例セミナーが終了して、会場の機械振興会館から外に出たところだった。

夕食会は五時半から行なわれるので、そこまで他の人よりも先に行き、西川君と会費を集める準備をしなければならぬ。

彼は、もう先にタクシーに乗ったようだった。機械振興会館の前には、道路をはさんで東京タワーが大きくそびえ立っている。五時を過ぎているのでオレンジ色のライトに照らされて、夕方の青空と対比を成して美しく見える。快晴。たしかに雲はない、と思つて見上げるとあつた。機械振興会館から出たすぐのところ、北から天頂に上つていつて約八〇度くらい見上げた位置だろうか。上空の風は強いようで、一つの中心の雲からたくさん雲が吹き

飛ばされそうにたなびいている。

月例セミナー終了後には、東京タワーを見上げる程度で、空をよく見るということが、なぜかなかった。

しかしこのときは、そこを見た。いや、見たというよりも、まるで何かの力が私に見させたというようであつた。このようなことは以前にもよくあつた。よく、夜に光体としてのUFOを見る人はいるが、私は夜中に出て見るといふことを面倒くさがるためかもしれないが、どちらかというところ、日中の方にUFOを多く見てきたようだ。どうも自分は日中の方がUFOを見る波動を持ちやすいのだと思つている。

また、これまでを振り返ってみると、光体のような小さなUFOというよりも、もつと形のハッキリとしたものを見たことの方が多い。

その中には、光を放たずに、またも

ちろん反射もせずに、真っ黒な胴体をした腕を伸ばして約二センチメートルくらいに見える大きなラグビーボール型のUFOや、雲の中にかくれて行く、飛行機よりも巨大な、半透明をした円盤状の物体等々、はっきりとした形のものを見てきたのであるが、そのようなときにも、なぜか目はそちらに引き寄せられていた。

今回も同じである。しかし今回は柱のような雲しか出ていない。それも腕を伸ばして八センチメートルくらい大きなものである……？

柱のような雲？

どうも印象が強いことに気がついた。普通の雲ではない。これはひよつとして母船が中にいるのではないだろうか。そう思った。

そこでよく見ると、そこから右の方にたなびいて細くなつて消えていく雲には、なんとその柱が動いてきたような節のようなものがほとんど等間隔にあるではないか。

驚いた。ますます期待は高まつてくる。そうして何とはなしに柱の形をした雲の左下の方を見たときである。

なんとそこには、雲の間から黒に近い灰色の物体の一部がのぞいているではないか。これはたぶん母船の船体の一部ではないか。六時一五分頃である。

私は一人で見ていたので、他の人たちが来るのを待った。一分もしないうちに新宿で喫茶店を経営しておられる

秋山さんなど数名の人たちが会館から出て来るのが見えた。

しかし、その柱の雲はだんだんと細くなり、消えていってしまった。

UFO目撃には意味があるという。もつとも多いのが、それを目撃した人に関するところであるという。この日はUFOコンタクトイヤー誌一三二号に載せていただいた私の記事、「イエスの時代を透視する」についての講演をさせていただいた日だった。それと何か関係があつたのだろうか。

しかし、自分のことはどうであれ、GAPの月例セミナーやその他の催しのときにUFOがよく目撃されることが多い。それは、久保田先生の何らかのお力によるものであろうと思われてならない。

編者注

筆者・遠藤君は二〇年以上に及ぶ古い日本GAP会員で、また多年、本部役員をつとめていた円満厚道人柄。オーラ透視、過去世透視等の超能力を有する特殊な人物で（日本GAPにはこうした人が多い）、UFOをよく目撃する特殊なタイプの人。オーラ透視に関する著書を数種類出している。

UFOを頻繁に目撃する人に超能力的な人が多いというのは事実である。人間の鋭敏な感覚とUFO側とに何らかの関連があるのだろうか。深い意味がひそんでいるようだ。



▶機械振興会館の右横の出入り口の外から見た東京タワー。大母船が見えた位置に、ペンでその形を描き込んだもの。

撮影／久保田八郎

▼日本GAP月例セミナーを毎月開催している機械振興会館の右側の出入り口（矢印）。*印の位置から筆者が大母船を見た。

撮影／久保田八郎



〈宇宙〉

冥王星—ハッブル望遠鏡で鮮明に

太陽系の惑星で地球から最も遠く冷たい冥王星の鮮明な姿をハッブル宇宙望遠鏡が初めてとらえた。米航空宇宙局（NASA）が発表したもので、撮影した冥王星の画像をコンピュータ処理した、黒い縞で分断された極冠や明るい白斑、黒斑などが見られる（3・8読）



百武すい星接近

鹿児島県のアマチュア天文家・百武裕司さん（四五）が発見したこのすい星は今年三月二十五日午後四時頃、地球に最接近した。距離は地球から月までの四〇倍これだけ明るいすい星の地球接近は四四〇年ぶり。すい星は一万年から二万年の周期で太陽の周りを回っている（3・16朝）

宇宙開発にNASA新千年計画

宇宙探査の低コスト化を図るため、米航空宇宙局（NASA）が「ニュー・ミレニアム・プログラム」（新千年計画）を今年からスタートさせた。

「米国に限らず費用がかかりすぎることが最近の宇宙開発の大きな問題」と、同プログラムの飛行計画の責任者、NASAジェット推進研究所（メカリフォルニア州）のマーク・レイマン博士が言う。このため研究者は失敗を極力避けようと、すでに確立された技術を使いながらという。

新千年計画では、最先端技術を積極的に応用し、技術検証を目的とする飛行計画を実施。今世紀中には①小惑星と彗星への接近飛行②微小衛星による火星探査③衛星三個を使った宇宙望遠鏡の三計画を行なう。

最初の飛行計画である小惑星と彗星への接近飛行の担当はレイマン博士。一九九八年の一月から二月に探査機を打ち上げ、六月から一五月後に小惑星に、二年以内に彗星に近づける（5・18読）

〈自然〉

異常電波、海底でキャッチー巨大地震余りに新装置（郵政省初の試み）

郵政省通信総合研究所（東京・小金井市）が、巨大地震の震源になりそうな海底に受信機を設置、異常電波を直接キャッチするという新手法の地震予知研究に乗り出した。大地震発生前後に波長が長い電波が出ることを利用したもので、世界初の試み。数年後には東海地震の震源域に設置することを目指している。

同研究所では一九八九年から東海や関東地方の計一〇カ所の深井戸に受信機を

設置し、周波数が一〜九キロ・ヘルツの超長波（VLF波）を観測。一昨年一〇月の北海道東方沖地震（マグニチュード8.1）や昨年一月の茨城県沖の地震（同6.2）前にVLF波の急増を検出した。

同研究所は今年中に受信機などを開発、三年後をめどに東海地震が予想される駿河湾や遠州灘に、長さ三〇〇キロの海底ケーブルを施設する計画。ケーブルには五〇キロ間隔で受信機を五台設置する。総事業費は約四〇億円（5・6読）

巨大地震探る深井戸

地下一〇キロまで深い井戸を掘り、関東以西の太平洋側で巨大地震を引き起こすフィリピン海プレート（地球の表面を覆う岩板の一つ）の動きを直接監視する世界最初の構想が、通産省の地質調査所（茨城県つくば市）によって進められている。次の関東大地震など巨大地震の発生場所やメカニズムなどを探るのが目的で、総事業費一十億円。今世紀中に掘り始め、二〇一〇年頃の観測開始を目指している。

地質調査所の構想「超深度掘削計画」では、陸のプレート突き抜ける深さ一〇キロの井戸を一本掘る。そしてフィリピン海プレートの中に、直接地震計など観測機器を入れたら、試料採取したりして、プレート境界や同プレート沈み込みの実態を解明する。天然ガスなどの地下資源開発なども行なう（5・15読）

二酸化炭素二倍で台風激減

大気中の二酸化炭素（CO₂）濃度が現在の二倍に増えると、地球全体の熱帯性低気圧の発生数は現在より三四パーセント減少、わが国を襲う台風の発生数も

約三分の一に激減する。茨城県つくば市の防災科学技術研究所と気象研究所の共同研究でこのような予測結果が明らかになり、五月二日から始まった日本気象学会で発表された。

杉正人・気象研究部第二研究室長らは、地球温暖化防止を国際的に協議する「気候変動に関する政府間パネル」の「二酸化炭素濃度が年一パーセントずつ増加する」というシナリオに基づき、CO₂濃度が二倍になる七〇年後の世界各地の海面水温の変化などを予測してみた。

七九一八年の一〇年間の海面データに、予測結果を加えて、温暖化時の海面水温を算出。コンピュータで熱帯性低気圧の発生数を予測し、七九一八年の発生数と比較した。その結果、熱帯性低気圧の全世界での発生数は現在より三四パーセント少なくなるなど、大部分の地域で減少した。ただ、北大西洋で発生し、米フロリダなどを襲うハリケーンは、約六割増えるという。

台風が発生するためには湿った大気が周囲から集まる「対流の収束現象」が必要だが、温暖化が進むと「現在の熱帯性低気圧の発生域に比べて、その周囲の海域での水温上昇の方が大きいため、対流の収束が起きにくくなり、発生数が減少する」と杉室長は言う。ドイツのマックス・プランク研究所でも、杉室長らと同様の減少予測をしている（5・18読）

〈医学〉

胃の粘膜をピロリ菌

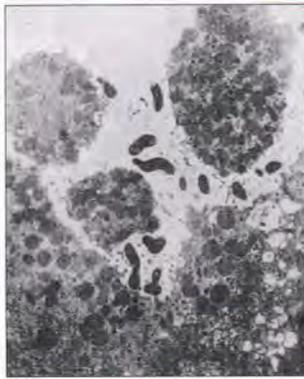
胃かいようや十二指腸かいようを発症させる「犯人」とみられるヘリコバクターピロリ菌が胃の粘膜細胞を傷つけてい



▲撮影／三島孝博（日本GAP会員）

る。証拠写真」を高知医科大学の緒方卓郎名誉教授が世界で初めて撮影した。五月二日から東京で開かれた日本電子顕微鏡学会で発表された。

緒方名誉教授は切除した胃を電子顕微鏡で観察した。その結果、ピロリ菌が胃の粘液分泌細胞の表面を食いちぎり、表層を失った細胞の露出した粘膜炎が、強い酸の影響で炎症や細胞壊死を起している様子を撮影することに成功した。緒方名誉教授は、「ピロリ菌が直接かような形成に関係していることが証明された」と



話している。

ピロリ菌はらせん状のペン毛を持つ約三ミクロンの細菌。消化性かのような患者の大半がピロリ菌に感染していることや、除菌すると再発予防効果が高いことから、かような関連が指摘されているが、かようなことを起す具体的な仕組みはわかっていなかった(5・13毎)

携帯電話、長時間は体に毒?

四月一四日付イギリス日曜紙サンデー・タイムスは、携帯電話が放つマイクロウェーブが頭部に集中するため、長時間の通話は使用者の健康障害をもたらす恐れがあると報じた。

同紙によると、携帯電話が発する低レベルのマイクロウェーブは、これまで頭部全体に均等に及んでいると考えられていたが、未発表の英米の研究結果では、マイクロウェーブは頭蓋骨部分に集中し、健康に害を及ぼす可能性が浮上。

携帯電話レベルのマイクロウェーブにさらされ続けたネズミのDNA(デオキシリボ核酸)分子が寸断された実験結果もあるという。DNAの寸断はアルツハイマー病やパーキンソン病、癌などとの関連性が指摘されている。

欧州連合(EU)の専門委員会のカメリア・ガブリエル博士は同紙に、「長時間の通話は勧められない」と語り、現在一般的に出回っている携帯電話の一〇〇一六〇〇ミリワットのマイクロウェーブ放出量を、二〇〇ミリワット程度に抑えることを提案する方向だという(4・15読)

白血病治療に造血幹細胞移植

血液の癌と呼ばれる白血病や骨髄などの造血器しゅようにたいして、血液を作り出す細胞の移植が有効な治療法として注目を集めている。これまで知られている移植に加え、最近ではヘソの緒・胎盤の血液(臍帯血)や、末梢血に含まれる造血細胞も移植の対象となり、治療の幅が広がってきた。

神奈川県立こども医療センターでは昨年七月、三歳の男児に造血幹細胞移植を行なった。九月月たった現在も順調に経過している。国内では二例目だったが、生存例としては最長。

この坊や九四年六月に急性骨髄白血病を発症、抗ガン剤治療を受けたが、半年後に再発した。白血病治療で成果をあげている同センターのことを母親が知っ

て受診入院した(4・15読)

おとり役遺伝子で炎症抑えて治療に

大阪大学医学部第四内科(萩原俊男教授)の森下竜一研究員らは、おとり役の人工遺伝子を作り、炎症を起す有害物質の合成を治療に役立てる方法を開発した。ネズミを使った実験で、腎炎を抑えるなどの効果を確認したという。このほど大阪で開かれた遺伝子治療のシンポジウムで発表した。

森下さんらはNFkBという蛋白質が細胞内の特定の遺伝子にくっついて炎症を悪化させる有害物質を作ることに注目。特定の遺伝子の一部とよく似た塩基配列の人工遺伝子を作った。これをおとり役にしてNFkBとくっつかせ、NFkBが特定の遺伝子にくっつく率を低くして有害物質の抑制を図ることにした。人工遺伝子は人工の脂質膜で包み、安定して目的の細胞内に送り込むように工夫した。ネズミを使った実験では、腎炎を起す刺激物質だけを注射したネズミはすべて腎炎を起したが、一緒に人工遺伝子を注射したネズミは腎炎を起さなかった。(3・15朝)

エイズ発症のカギ蛋白質解明

エイズウイルス(HIV)の中で、発症のカギを握るとみられている特殊な蛋白質の構造を、米国立保健研究所(NIH)のポール・ウィングフィールド博士らが突き止め、米医学誌「ネイチャー・ストラクチャー」・バイオロジー」四月号に発表した。HIVに感染しながら長期間発症しない人は、この蛋白質に変異があることが知られている。構造がわかったことで治療薬やワクチンの開発にはすみがつきそうだ。

この蛋白質は「Nef」と呼ばれ、核磁気共鳴(NMR)分光法という技術で構造を調べたところ、分子量二万七千でアミノ酸が複雑に折り畳まれた構造をしていた。

Nefは正常な人の免疫細胞に作用、細胞の情報伝達経路を遮断して、HIVの増殖を促す情報だけを細胞に伝える働きをすることが判明。この作用を阻止すれば、HIVに感染しても発症を防止できる可能性があり、治療薬などの開発にもつながりそうだ。

〈古代文明〉
一万二千年前のアマソンの文明

一万二千年も昔南米アマソンの密林に装飾した武器や道具を持つ独自の文明が繁栄していたと、米イリノイ大学のアンナ・ルーズベルト博士らが米科学誌「サイエンス」四月一九日号に発表した。ル博士らはアマソンの洞窟から槍の先端のとがった石器や、赤や黄色の染料を使った壁画を放射性炭素の存在比率を使って年代測定。一万二千年前のものと計算した。またこの文明は約千二百年間続いていたといひ、北米の古代文明とは異なっているという(4・18毎)

▲一万二千年前の壁画



ロズウェル事件の真相はこれだ



月一三日に編者が同新聞社に赴いて事情を説明し、同社の転載許可を得たのでここに掲載した。読者に裨益するところあれば幸いである(編者)。

★円盤から気球へ

物体がロズウェル郊外の荒地地に落下したのは一九四七年七月四日夜。地元紙「ロズウェル・デリー・レコード」は八日付一面トップで「軍が空飛ぶ円盤を捕まえる」と軍発表を報じた。ロズウェル陸軍航空隊第五〇九爆撃隊の情報担当少佐が「落下現場で円盤を確保した」と発表したのだ。

ところが同航空隊は半日後「あれは気象観測用気球だった」と訂正し、残骸の写真を発表した。当時の同航空隊情報担当中尉、ウォルター・ホート氏(七四歳)は、こう証言する。

「最初の発表は上官から言われて私が作成した。その後、上官が『あれは訂正する。気球だ』と言った。しかし、現場一帯を軍が何日も封鎖し、数百人が捜索するのを見て、気球にはおかしいと思った」

★目撃者は消えた

当時ロズウェルで葬儀店をしていたグレン・デニス氏(七〇歳)は、軍から「死体防腐剤と子供用ひづり四個を用意せよ、と言われた」。

まず死体を見てから、と思い現場に向かったが、近づくのを阻止された。友人の軍看護婦が「死体は子供のような大きさと、指は四本。つめや歯がなく、耳の部分には穴だけがあいていた」と語った。

看護婦はその二日後、英国の米軍基地に転属になり、デニス氏が出した手紙の返事は「死亡した」だった、という。

地元選出下院議員が求めた真相究明に対し、会計検査院は昨年、こう回答した。

「ロズウェル航空隊の記録は一九四五年から四九年分が破棄されている。軍や中央情報局(CIA)、連邦捜査局(FBI)、国立公文書館にもない」

政府と軍、真相隠した

★新証言

当時現場を見た唯一の生き残り民間人、ジム・ラグスデイル氏は昨年七月、ガンで亡くなる五日前、公証人の前で証言。そのすべてがテープに取られていた。

「夜一時半頃、恋人とデートしていた。閃光と爆発音がして、何かが落下した。そばへ行くと円盤があり、一・

二×〇・六メートルほどの穴があいていた。中に玉座のような椅子が一つと、四、五個の小さな椅子があり、壁のパネルには多数の装置があった」

「そして死体が四つ。身長一・二メートルほど。肌は灰色で、触るとヘビのような感じがした。まもなくサイレンが聞こえ、破片を幾つかポケットに入れた。数日後、恋人が原因不明の交通事故で死に、私の家には泥棒が入り、問題の金属片は持ち去られていた。怖くて今まで黙っていた」

★物証?

当時現場を捜索した軍人の一人からこの春、あの時、破片を持ち去っていた」とホート氏に破片が届けられた。五×三センチ大の二等辺三角形をしており、ニューメキシコ州鉱山鉱物資源局に鑑定を依頼した。

その結果は「当該物質は銀と銅で構成されている。少量のナトリウム、アルミニウム、ケイ素、鉄、クロムなども検出されたが、これは土壌や人間の手による汚染の可能性もある」

★大統領が命令?

米の全国紙ナショナル・エンクワイアラーは今年一月「政府は真相を隠している」との特ダネ記事を掲載。それによると、当時のトルーマン大統領は

本号冒頭の記事で述べたように世界で最も有名なUFO事件の一つとしてロズウェルの円盤落下事件がある。これについては去る五月一五日付毎日新聞夕刊に現地(ロズウェル)からのレポートが大々的に報道されたので、六

「ロズウェル事件」に関する特別調査委員会を設置。同委は五年後、アイゼンハワー大統領に報告書を提出した。報告書は「人類とは異なる地球外生物(E・T)四体」が、いかなる理由で地球にやってきたか分からないと結論。大統領は、国民のパニックを避けるためカバー・アップ(真相隠し)を命じたという。

米国プレスなどの追跡で「落下物の多数の破片をオハイオ州のライトバタールソン基地に運んだ」との軍人証言や、「妙な物が落下したと父が首をかしげていたが、絶対に口外無用と念を押された」との航空隊情報担当少佐の子供の証言などが判明。真相は今もって霧の中だ。

ロズウェルは、この事件を町おこしに利用。二つの「UFO博物館」には、全米や世界各地から八万人の観光客が訪れる。(ロズウェルで観堂義憲)

編注II以上であるが、この記事では小人の死体をあくまでも「宇宙人」すなわち「人間」とみなしており、ロボットという概念はみられない。しかしロズウェルの事件がまぎれもなく真実であったことはこれで首肯できる。

ロボット説については本号冒頭の記事「米政府が隠すUFO問題の驚異的真相」を参照されたい。右の記事では四本指遺体が主役となっている。六本指は別な事件に関連するものだろう。

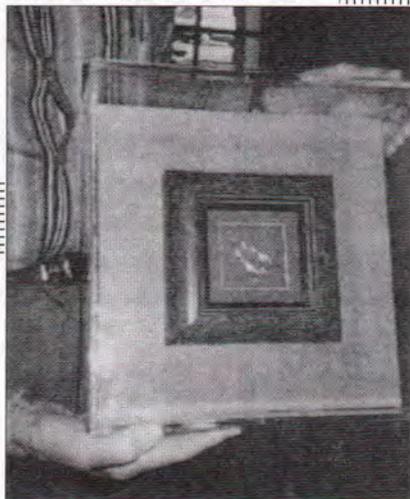


▲「軍が空飛ぶ円盤を捕まえた」と大見出しで報じている当時のロズウェル・デーリー・レコード新聞。



▲「政府と軍が真相を隠した」と話す元ロズウェル航空隊情報担当中尉のウォルター・ホート氏。右は宇宙人の模型。(ロズウェルUFO博物館にて)

▼銀と銅でてきたナゾの落下物の破片。ロズウェル警察署が保管している。



コンピューターによる UFO写真鑑定への疑問

遠藤 昭則

A Faker Using A Computer?
by Akinori Endo

□そもそもその発端

「UFO写真をコンピューターで鑑定する！」

そんなことが今から約二〇年前に日本に紹介されたことがある。コンピューターといえば科学の最先端を行くものとして考える風潮にあった当時は、それを使って鑑定するということになれば、それは文句を差し挟む余地もないような、かなりショッキングなものであった。

では、それはどのようなものだったのだろうか。

当時の日本で唯一のUFO専門誌であった「UFOと宇宙」一九七七年四月号から、その内容を探ってみることにしよう。

□UFO写真の鑑定

現代でもそうだが、当時もたくさんUFO写真が、それこそたくさんの人によって撮影されていた。

しかし、そのどれもが本当のUFOを撮影したものであるかという点、そうではなかったようだ。中にはいかかわしいものや、見間違えた物体を撮影したのもあったということである。

したがってそれらの写真をなんとかうまく鑑定しようということは当然必要となつてきて、当時も定着液を通じて引き伸ばし作業を終えた写真だけで

はなく、そのもとの引き伸ばし機の中でランプに照らされているネガフィルムを調べることも必要となつてきた。

撮影したカメラのシャッタースピードやレンズの具合、絞りなどを調べるのは当然であるが、さらに、撮影された物体の位置や太陽光線の当たり具合、そして模型を吊り下げたり、フリスビーのように投げ上げたりしたものではないかということも調べなくてはならなかった。

しかし、糸が見えないというよりも糸のない物であり、また、小さな物体を投げ上げたものではないということ判断するのは容易なことではなかったようである。

□やはりそれ以上に

しかしそれだけでは、機械的に鑑定して(というよりも、直感力やその写真からの印象を正しく得ようとする点に欠ける、頭の固い唯物論的にとってもよいかもしれないが)、論理的に納得したり納得させたりするには限界があった。

そこで彗星のように突然現われてきたのが、先ほどのコンピューターによるUFO写真鑑定技術であった。

□GSWという団体

それはどこかの企業の技術集団から

出てきたものではなかった。なんと、UFOの研究団体からであった。

アメリカのアリゾナ州に本部を置くGSW (Ground Saucer Watch) は科学的にUFOを研究する団体として、現在はどうかわからないが、メンバーの数は当時は約五〇〇人以下というものであったという。

そのメンバーについては、技術者はもちろんのこと、科学者や各分野の専門家などの厳選された人々であったということだ。しかし、そこに「科学的」という言葉によってUFO問題を否定しようとするキナ臭さを感じられるのは、私だけではないだろう。

代表者はフェニックス市の Air Research Manufacturing Company という航空宇宙工学会社の品質管理技術者であったビル・スボールディングという人物であった。

またGSWは、今でも活躍しているアメリカのUFO研究団体MUFONの姉妹機関であり、彼はそのアリゾナ支部長を兼ねていたようだ。

そしてGSWは、彼の専門分野の航空宇宙工学のコンピューターを取り入れて、UFOの写真鑑定を始めたのである。

□NASAという言葉の権威

この技術は、NASA (米航空宇宙局) のアポロ計画や火星探査機などで

撮影された写真を調べるものと同じである。と彼は述べている。そうだが、詳しいことはわからない。

しかし、「NASA」という言葉には権威があった。「NASA」が使っているから正しいものだという考えをする人は現在でもいる。

確かにその機器は、各時代の最先端を行くものではあるが、それをどう使うかということが問題になることだろう。それが誤って使われれば、何にもなりはしないのだ。

□どのようなコンピュータ技術なのか

では、その技術についてみていくことにしよう。GSWでは、次にあげるような、幾つかの方法を使っている。

(1) 輪郭強調

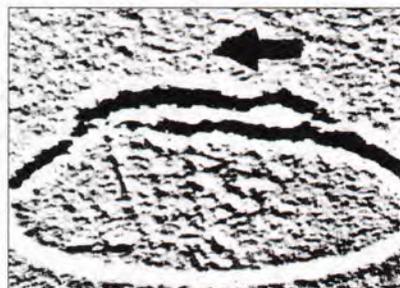
これは写真の中の植物や人物、また建物などの画像の輪郭線をはっきりとさせるものである。

コンピュータで写真からの映像を取り込んできて、暗い所は黒く、また明るい所は白くと、それらをはっきりとさせる操作である。

そしてまたこれは、強調したい輪郭線の太さも自由に変えられる。

この操作によって、撮影されたUFO写真を鮮明な画像にして調べるわけである。

それによって拡大鏡や引き伸ばし機ではわからなかった、細かい点や線が



▲レックス・ヘフリンが撮影したUFO写真をコンピュータで分析した結果、上部に糸が現われたと称する写真(矢印)。

はつきりとわかってくるというのである。

そこでGSWでは一例として一九六五年にアメリカ、カリフォルニア州でレックス・ヘフリンが撮影したUFOについての判定をあげている。それによると、このコンピュータ操作によって、そのUFOの上部に細い線が発見されたという。つまり、それは糸で吊るされた物体を撮影した偽物だとい

うのである!

そして、ジョージ・アダムスキーが撮影した、スカウトシップをほぼ真横から撮影した写真(一九五二年一月三日にアメリカ、カリフォルニア州、パロマー山腹のパロマーガーデンスに飛来した金星の円盤を、アダムスキーが六インチ反射望遠鏡にカメラを取り付けて撮影したもの)についても、その上には糸があったとGSWは述べて、その輪郭強調写真を発表していた。

□自分で試してみ

なぜ、アダムスキーの撮影した写真は偽物だといわれたのだろうか。それはどういふことなのだろうか。そこで私は自分でコンピュータとスキヤナーを使って検査を行なうことにした。問題の第一段階としての輪郭強調というものであるが、これは現在の画像

取り込み用スキヤナーであれば、必ずその操作は付いている。たとえそれが不完全でも、それを支援するソフトも現在ではできて安価で販売されている。

まず、アダムスキー撮影の写真をスキヤナーでプレビューして、大まかな全体像をパソコンの画面に映し出した。それから頂上のドームから磁気柱の上の球、そしてその上の空間を拡大した。

そうして明るさ、その他の調整から輪郭線を強調したり、画像の値を上げていくことで白黒をはっきりとさせる操作を行なってみた。

その操作を何度も行ない、写真を持ち上げては、それを乗せる台をきれいにし、また、髪の毛、その他のものが紛れ込まないようにした。

何度も行なったのは、乗せる台に写真が密着することによって、ドームの上の空間にできる影が変わって映るだろうと考えたからである。

しかし、ドームの上に出る映像は同じものだった。

いつも、ドームの上の左半分や下が濃い影となるだけであり、それ以外はまったく何の映像も出てこなかった。ましてや、頂上の糸など、画面いっぱいになるくらいに、いくら拡大しても出てこない。



▲1952年12月13日、アダムスキーがパロマー山から6インチ反射望遠鏡で撮影した金星の円盤(スカウトシップ)。これをGSWはコンピュータで分析し、糸で吊り下げた模型と称して葬り去ろうとした。

©日本GAP

□専門家の意見

どうもおかしいので、コンピュータの専門家に尋ねてみた。私のパソコンとスキャナーではまだ未熟なものなのかと思い、尋ねたのである。

しかし、彼は「ざら」と言った。彼はある大手の電気会社に勤めている人なのだが、それは、私の持っている機器で出てこないものを、いくら、もつと精度のよいもので調べても同じことだというのである。

しかし、GSWでは糸が見えたそうだから、変ではないのかと尋ねたら、意外な、しかし納得できる意見が返ってきた。

それは、個人にしろ団体にしろ、NASAが使っているような最先端の機器であれ、何であれ、現代では、それはどうということではなく、そこわざと誤差を入れることはたやすいことだというのである。

つまり、空間に糸を作り出すのは、コンピュータの映像の中では簡単なことであるというのだ。

それは、ほんの少しの誤差を入れればよいという。

または、写真にもともと糸のような傷を入れることも可能であるという。それには、その傷をつけたものを再度印刷してから映像として取り込めばよいというのである。

しかし、その映像を見ても、現代の人でも、それが本物か故意に作られたものなのかがよくわからないという。ましてや、当時のことであるから、それだけではわからなかったであろうということだ。

さらに、実際の写真を拡大したものでなく、その極端な輪郭線強調画像にしたものであるから、その映像が本物かトリックかということは、ただ見せられた側にとつては、まったくわからないことだというのである。

そして、そこに権威をつけるためにNASAという言葉が入れられたのではないだろうか。

なぜなら、その誤差を入れた人の企みは隠されて、NASAの使っている機械が悪いはずはないという、なんだから推測な考えが生ずるようになるからである。

□彼の発見したこと

その彼がある発見をした。それは、GSWが発表している、アダムスキーの撮影した写真、つまり糸が見えるという輪郭線強調画像の写真だが、それをさらに拡大したのである。

そして、もう一つは、糸がついているであろう罫上げをしている写真を拡大したのである。これを輪郭線強調画像にしてみた。

そして、その両者を比べたのである。

すると、どうだろう。罫上げの方の映像は、糸が所々に出てくるが、その出てくる糸を、さらに拡大してみた。そして、わかったのだ。

それは、GSWの発表した糸の映像には太陽光線や電球その他の光源の陰影がなく、また、罫上げの方の糸は、糸としての振じれによる不完全なときれとぎれのものとして出ており、それにははつきりと太陽光線の陰影が見られるのだ。

ここまでくると、GSWが、かなり不完全な糸作りの操作を、本物のアダムスキー撮影の写真の上の空間に施したことがわかってくる！

そして彼は言った。

「このGSWの糸の線って、雑誌の写真に折り目をつけただけでも簡単にできるものだよ」

そういえば、発表された写真の上の空間の画像は、その糸を境目にして切られている。

もしそこに本物の糸があれば、それは切られるはずはないものであるのだ。しかし、GSWは、さらに次の段階で追い打ちをかけてくる。それは、色調整というものである。

□色調整

GSWのコンピュータ操作の第二段階にあったものは、色調整というものである。それはコンピュータに取

り込んだ白黒映像の各濃度を細かい段階に分け、それらから段階的に色を着けていく。それによってUFOの形状がはつきりとわかってくるということだ。例えば小さな模型と本物の円盤との違いもわかってくるということなのだ。

しかし、ここでは、はつきりとアダムスキー撮影の写真にはふれていない。ただ、スカウトシップが小さな模型か、厚紙で作られた物ではないかとおわせる程度で終わっている。

それは次の第三段階への序章として使っているようである。

□模型などよりもすごい発見

この段階もパソコンで行なうことにした。

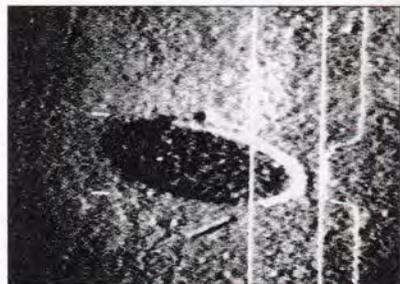
しかし、厚紙で円盤を作ったものと、アダムスキーの写真を比べても、そこで画像のシャドウのレベルをいくら調整しても、それはボール紙のように平らなものなのか、または立体的なのかという区別はできなかつた。

ところが、いろいろと調べていくうちに、それよりも、もつとすごいことがわかった。

円盤のフランジの左下部から見えている球形着陸装置を拡大して、その操作を緩めに行なったときのことである。それまで気付かなかつたのであるが、その着陸装置を通して、向こうにある



▲1950年5月11日、米オレゴン州マクミンビルで、農民のポール・トレントが妻とともに目撃したUFOを2枚撮影した写真の1枚。コンピューター分析の結果、これは本物としている。



▲左のUFOをコンピューターで分析したという写真。

中心部の膨らみ^くがはっきりと姿を現わし、また、着陸ギアの内部もうっすらと見えているのである。

球型着陸装置の中には、一部の人がちがとなえているような反重力装置などはなかった。それは真空のカップに支えられているようなコンデンサーなのである。

つまりこれは立体の物体を撮影したものだということである。そして、アダムスキーが撮影するときにはパワーを弱めていたとはいえ、そのパワーが着陸装置やフランジの辺りでははつきりと作用しており、それらが透明化しかかっていたのである。

ここまでは、GSWでも、分らなかったと思われる。

しかし、さらに次の段階が登場してくるのである。

□縦断面図の作成

これは第三段階ということで、撮影されたUFO写真の縦断面図を作成するものである。

当時はまだ磁気テープ式のコンピューターであったが、GSWのものは最先端をいくデジタル式のコンピューターを使うものであった。

しかしそれは現在では、パソコンと呼ばれて家庭でたやすく扱うことのできる時代になっている。

とにかく、この操作によって、厚紙か本物の物がわかるといっているのである。それは第二段階の方法とは異なり、物体の断面図を作ることができるというのである。

そして、本物の円盤写真の断面図として、ポール・トレント撮影の円盤写真の断面図を発表しているが、それは円盤を斜め下から撮影したものである。

その写真に真上から切り込みを入れて、その断面図として長方形の映像が公表されている。

しかしこれについても、どうもおかしいので、実際にその円盤型の模型を作り、GSW発表と同じように切ってみた。

その断面図を作ってみたのだが、それは長方形ではなくて、なんといびつな長方形と楕円とを組み合わせた形のものになった。

つまり、公表された断面図映像も正しくないのである。

そして、アダムスキー撮影の写真についてはどうかといえば、彼らは「厚紙をはりつけて撮影したものであり、コンピューターによる切断面画像では、あの細長い、単なる厚紙の形状しか出てこなかった」というのである。

この縦断面図操作は、果たして信用できるものだろうか。厚紙の物体が、いったいどうして、金星文字の写っていたネガホルダーを落とすことができたのだろうか。それよりも、どうしてカリフォルニアのデザートセンター砂漠に着陸して、アダムスキーとオーソンとが会見することができたのだろうか。六名の目撃者の前で。

このGSWの縦断面図操作段階においても、まったく都合のよいように操作されたことは疑いようのないものである。しかし、それでもひるむことなく、彼らは最後の段階をつきつけてく

る。ところが、それこそ、まさに企み
を暴露する結果になっているのである。

□映像の拡大

これは単に写真を映像として取り込み、それを拡大する操作である。写真の引き伸ばし機などよりも精度が上がることは確かであるし、また小さなUFOなら、そのはつきりとした形も現われてくる。したがって、小さな円盤写真を拡大すると、その形がよくわかるようになり、なんと、それがアダムスキー型の円盤だったということも多い。

そこで、アダムスキー撮影のさまざまな角度から写っているスカウトシップの写真をそれぞれ拡大してみると、粒子の荒さやコントラストの不鮮明さによって見にくかったものが、うまく解消されてはつきりとその形がわかるようになる。

したがって、コンピューター操作によって、逆に、スカウトシップが立体的であるということが明らかに becoming くるのである。

さらに、そのドームから上の空間に糸などは見られない。

先ほどの専門家の話によると、拡大映像によって、どんなに調整しても糸が見えないときは、他の輪郭線強調などをしても、糸など、出てくるものではないというのである。これはGSW

が糸があると発表しておきながら、糸がないということを確認していることになる。

□現代のパソコンの進歩

現在では、GSWの使った機能以上のことが、家庭でたやすくできるようになってきている。

二〇年の差というものは大きい。当時は糸があるなどと言われても、時代を経るごとにアダムスキーの撮影したUFO写真は一つずつ立証されていくことだろう。そして彼は進歩した惑星の人々と接していたということがわかる日があることだろう。なぜなら、写真に写された円盤は、はるかに高度な科学を駆使したものであるということがわかってくるのであろうから。

□では、なぜ当時は糸があったのか?

そして最も大きな疑問が出てくる。では、なぜ糸は故意に仕組まれたのだろうかということである。

そしてなぜそうする必要があったのかという疑問が再び頭をもたげてくるのである。

そしてまた、なぜ人々はそれを信じたのかということも大きな問題である。

□本物と偽物がまぜられて、両方が偽物といわれる。

糸が写っていたとしてGSWが偽物と鑑定して発表したものの中には、アダムスキーのスカウトシップ以外にも一つ、ある者が撮影したUFO写真が入っている。

それはスイスのある人物が撮影した鮮明なUFO写真であるが、そのUFOは太陽系外のはるかな宇宙からやってきたといわれている。

しかし、その人物が異星人と会見したという事件について疑問を投げかける書物が最近アメリカで発売された。なぜアダムスキーの写真とその人物が撮影した写真とが同じように鑑定されたのか?

そのようなことは、最近フリーエネルギー装置を研究している人からも聞いた。

それは、例えば誰かが本物の物を発見か発明したとする。そうするといかにもそれに近いような偽物が発表されて、両者によって大衆は混乱させられやがて両方に興味を失わせる手法がとられることがあるというのだ。今回のUFOのこの件についてはどうなのだろうか。

□二〇年前からの脱却を

しかし現在は、もう二〇年前ではない。そろそろ真実が認められるようになり始めてもよいのではないだろうか。だからこそ、その一歩として、二〇

年前のコンピューター鑑定からの脱却が必要であると考ええる。

二〇年前に心が作り出した誤った鎖を取り外し、より新たな気持ちで自分の力、内奥の力を扱う時代になってきたのではないだろうか。なぜなら、現実に円盤型UFOのスカウトシップは存在するのだから。

□レックス・ヘフリンの驚くべき体験

GSWが偽物として鑑定したレックス・ヘフリンの写真はどうやって撮影されたのだろうか。

一九六五年八月三日、カリフォルニアの太陽の下、レックス・ヘフリンはオレンジ郡の道路管理局員として、フォードのキャラバン車でパトロールに向かうところだった。

途中、午前一時三〇分頃にメイブ・オード・ロードで停車して、カー無線で交信を始めた。しかし突然に無線は使用不可能の状態になってしまった。彼の無線を聞いていた道路管理局長も、それに気がついてしまった。

どうしたものかとヘフリンがいぶかっている、彼の車の左側に軍用機が近づいてくるのが見えた。

しかしそれが軍用機でないことはすぐにわかった。なんとその飛行物体は空中に停止したのだ。直径は約九メートル、ドームのついた円盤状である(後の米空軍の計算では、直径が約三

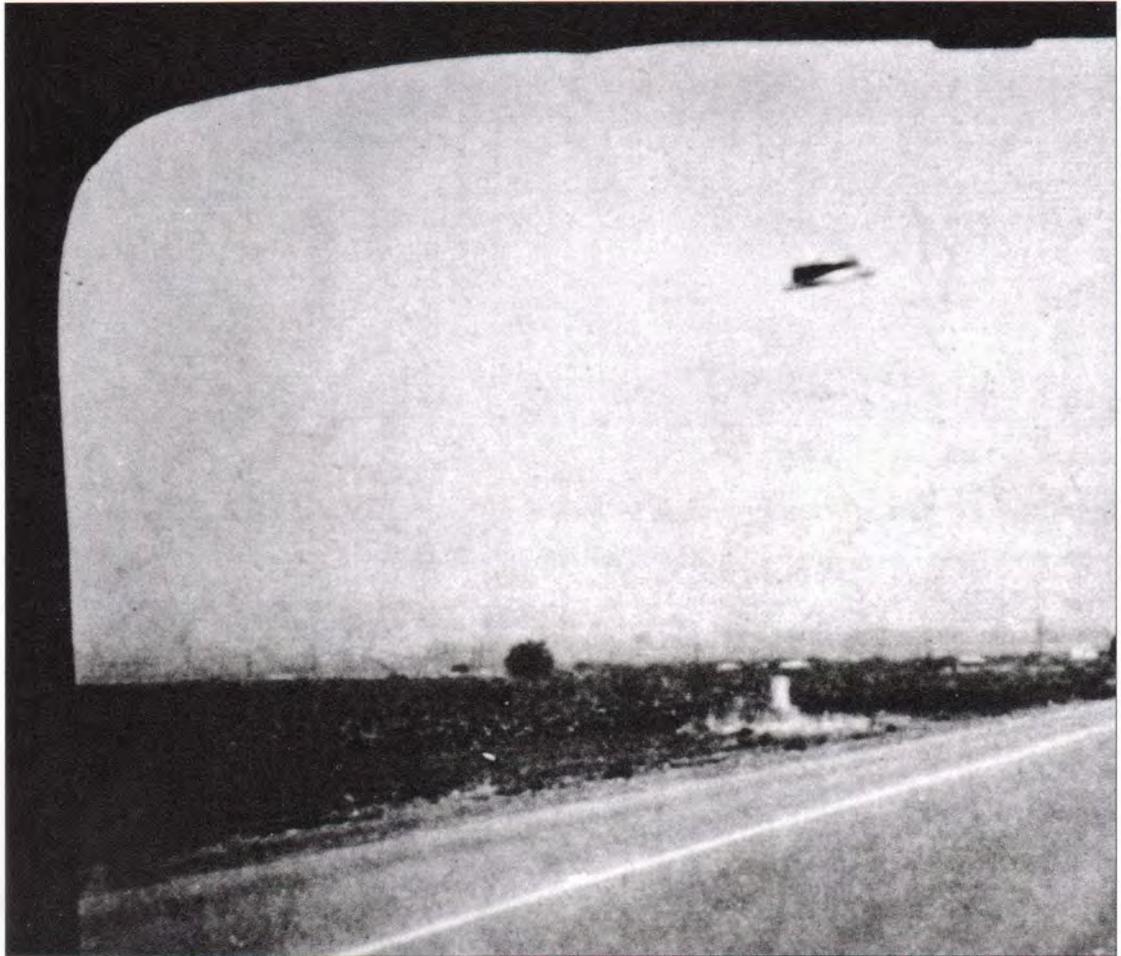
○センチメートル〜メートル、高度は約一二メートルとしているが、それはどうもおかしい。

彼がしばらく見ていると、それがやがてゆっくりと左右に動きだした。

慌てて座席においてあったポラロイド一〇一カメラで三枚撮影することに成功した。

最初の一枚目には、道路脇に砂ぼこりが三〇センチメートルほど舞い上がって写っている。それはUFOによるものではないかといわれている。これが、糸が見えるとして、GSWが偽物と鑑定したものである。

次の二枚目になると、UFOはゆっ



▲1965年8月3日12時頃、米カリフォルニア州オレンジ郡の住民レックス・ヘフリン（37歳）が自動車で行中、前方に出現したUFOをポラロイドカメラで連続4枚撮影した写真の内の3枚。GSWはコンピューター分析で偽物だとしたが、ヘフリンは絶対に本物だと主張していた。

くりと道路の反対側に移動している。このときに彼は、UFOの底部から円形に回転する白い光線が出ていたのを目撃している。

そして三枚目ではその白い光線がわずかではあるが写真に写っているという。こうしてUFOは写真にあたかも自分から写させるようにして道路に平行に進み、わずかな揺れを起こしてから、上空に驚くべき速さで加速していき、やがて消えていったということだ。ところが、UFOが飛び去った後には、空に青い輪が生じていた。

そこでその真下に急いで車で行き、撮影することに成功している(また、この写真に似た輪郭だけの写真は、一九六九年六月一八日に、イギリス、バリーミンガム近くでカール・ロビンズという人が撮影しており、さらに、輪郭だけで地上側にわずかにフォースフィールドのある写真は、日本でも最近撮影されている)。

やがて我に戻った感のある彼は、サンタ・アナの無線局に交信をとることができたが、撮影したことについては一切話さなかった。

彼が三枚のUFO写真を撮影するのは約二〇秒しか経っていないようだということだ。そんな短時間のうちにさまざまなことが起こったのである。彼は用心深かった。もしもそれが空軍の新兵器であれば大変なことになるだろうと考え、写真を約一カ月公表し

なかつたのである。

しかし後にサンタ・アナの新聞「レジスター」に紹介されることになる。

ところが、これが公表されるや、北米防空軍将校と名の二人の男がやって来て、彼の写真を持っていったのである。そして彼が軍に連絡をとると、そんな防空軍など存在しないという素っ気ない返事が返ってきたのであった。

また、一九六七年一〇月一日には、米空軍の一将校がやってきて、まだあの写真に興味はあるのかというようなことを尋ねたというのである。しかし彼は賢明に、もうそんなことはないという返答をしたということである。

ポール・トレンツォ

そしてGSWは、一九五〇年五月一日にアメリカ、オレゴン州マクミンビル近くでポール・トレンツォによって撮影されたUFOは本物であるとしている。

まずトレンツォ夫人がその異変に気付いたという。その日の夜午後七時三〇分、家畜にエサをやっていたときに、不思議な物体が北東の空にいたことに気がついた。

夫人は驚いて主人のポール・トレンツォを呼び、カメラで撮るように促した。そこで彼は二枚撮影することに成功した(三二頁の写真)。

そのUFOは青銅色がかつた銀色をしており、西へとゆっくりと動いていたという。それは円盤状をしており、その上に塔のようなものが突き出していた。

その後、彼の撮影したUFOは「ライフ」という有名な雑誌に一九五〇年六月に公表されることになる。アメリカでコンドン教授を中心に結成された科学的UFO研究機関による「コンドン報告」でさえも、約一一ページに渡ってこの事件の調査分析を行ない、それが本物であるという見解を出しているのである。

しかしコンドン教授を中心にした活動は、UFOの調査研究というよりもUFOということから大衆の目を引き離すことが目的であったようではない。

なぜなら、教授はコンドン報告の中で、「UFO研究は科学的に何も得られることはなく、そのような研究をするには無意味である」というようなことを述べているのである。

そして驚くべきことに、このポール・トレンツォが撮影した不可思議な形をしたUFOは、一九五四年三月にフランス、ルーアンでも撮影されているだけではなく、フランク・スカリーの著書「Behind The Flying Saucers」の中にも出ているのである。

スカリーの著書の中では、それは一九四八年頃にアメリカの砂漠に墜落したUFOの形として出てくるのである。ただしその中であつた乗員の遺体は、現在いわれるような変な恰好をしたものではなく、身長の高い数人の人間であつた。

しかしスカリーはその書を出したおかげでひどい中傷を受けることになる。よく考えれば、その書の中には、当時米政府としては公表してほしくはなかつた何らかの情報があつたのではないだろうか。

なぜトレンツォ撮影のUFOに、政府の科学的なグループや科学的と称する団体が太鼓判を押すのか。

謎ではあるが、そんなスカリーの書物をも考慮するのなら、現在騒がれている(というよりも混乱させられている)、あの砂漠に墜落した円盤事件である、ロスウェル事件の真相が出てくる鍵の一つがここに隠されているのではないかと思われてならない。

そして、先ほどの道路管理局レットクス・ヘプリンの写真といい、両者には何かがあるということを暗示しているようではない。

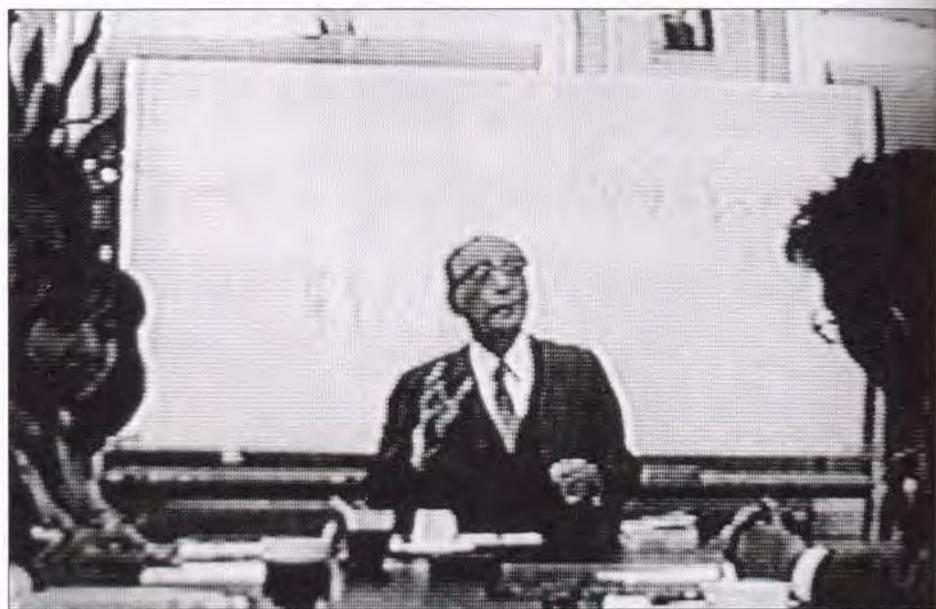
その「何か」とは何か。それは、両者ともに本物であるということだからなのではないだろうか。結局、本物を大衆が信じるのを最も恐れているのは米当局ではないだろうか。

今年四月三日、医師先生方の研究会である「自然治癒を考える会」の定期会合で、久保田会長に講演の依頼があった。このグループは約五〇名からなるそうだが、当日は都合によって約二〇名の先生方が集合。幹事は若い女医さんの浦尾弥寿子医学博士。この方がかねてからアダムスキーの「生命の科学」等を読んでおられて、その素晴らしさに感動し、アダムスキー問題専門家の久保田会長に連絡してこられたのである。当日の会場は都内千代田区、郵政省横のニューダイヤモンドビルの一室。七時三〇分から九時三〇分までの二時間の予定で、会長は講演を開始した。スライド映写その他の助手として本部役員に加藤純一が同行した。以下は会長の手記。

「自然治癒を考える会」で会長講演

西洋医学に限界を感じて難病治癒に精神的な面からのアプローチを試みながらホリスティック医学の先端を行うと探求を続けるこのグループの先生方はまさに真剣そのものであった。まず驚いたのは、私が話を始めるやいなや先生方はいっせいにノートを取り始めたことである。過去に無数の講演を行なったけれども、こんな光景は初めてなので、「これはウカツなことはしゃべれないぞ」と自戒し、慎重に言葉を選びながらアダムスキー問題や宇宙哲學的な問題について話し始めた。

当初は雑談的な会合だと思っていた



▲講演中の久保田会長。左端の人が浦尾弥寿子医博。(ビデオ画面より)

ので、まとまった原稿を用意しておらず、手帳に重要人物五、六名の名前を記していただけだが、これが大いに役立った。名前を見れば、それに関連した話が奔流のように出てくる。大体に原稿なしでしゃべりまくるクセのある私は、むしろきちんと原稿を用意しておく、それにとらわれて音声がない

めらかに出てこなくなったりする。原稿なしで雄弁に話す人として秋山眞人氏の右に出る人はいないだろう。記憶力が物凄いのだ。私はそれを見習っているのだが足元に寄れない。私は医者ではないので、精神世界探求的な面からの話と超能力の開発、超能力的な治癒の実例等を展開したが、

このような席では、ある程度の医学的な知識を見につけることの重要性をイヤというほど感じた。しかし私はユーモラスな話を大いに好むので、これもふんだんに応用した。

講演のあとの質疑応答で意外にもフランスの名高いルルドの聖泉に関する質問が出たときには驚いた。そこで発生する奇跡的治癒に関しては西洋医学で禁句とされているからである。私は「ルルドの奇跡」と題する著書を学研から出しているけれども、しばらく無縁になっていたので詳細を忘れていた。しかし話し始めると不思議なことに昔訪れたルルドの光景や事件の筋や固有名詞などが洪水のように溢れてきて滔々と解説することができた。

私の話が面白いのだそうで、時間を超過したのにもっと話せという要求から、さらに一時間ほど補足して計三時間を費やした。これほど時間がアツというまに過ぎた経験はこれが最初である。時間の経過は気分によることを痛感した一夜であった。ご招待頂いた浦尾博士、その他の方々に深謝致したい。

現在、アダムスキーの「生命の科学」に説かれている諸理論は次第に医学の面で応用されつつあり、各種の書物が出つつある。あらためてアダムスキーの偉大さを認識するとともに、自分自身の生き方に応用することの重要性を再確認した次第である。浦尾先生から、また来てくれとの話があった。



一昨年から八王子市の東京造形大学でアダムスキー問題の講演を毎年一回行なうようになった。これは同校教授(体育)の佐藤彰先生が熱心な日本GAP会員で、その関係から先生の持ち時間を割いて私を招待して下さるわけで、学生の出欠をとった上で、れっきとした正規の授業として行なわれるのである。したがって私としては、きちんとした原稿と資料等を用意して時間の割り振りを考慮の上、万全の態勢で臨むことになる。

今年も三回目なので、すでに慣れており、学生の興味を引き付けるコツも把握しているから、気軽な気持ちで出席した。むかしと違って今の大学は授業時間中に私語を交わすことが多いのが問題となっていて、今年は入学してまもない一年生ばかりなのでわりと静粛だった。女子学生がやたらと多い。芸術系の学校だからだろう。東京造形大学はデザインで名門の桑沢デザイン研究所の創立者、故桑沢洋子女士の設立になる桑沢学園の一環をなす。森の中の寺院ともいうべきストイックな感じのするモダンな校舎へ横浜線の相原駅から徒歩十五分で行ける。GAPから岡田茂が同行した。

午後三時より指定された大教室へ出る。約三五〇名の学生が階段教室を埋めつくしているのは壮観。私は聴衆が多いほど度胸が出るタチなので気分爽快だ。

まず一時間を講演、それもUFO問題を四〇分、宇宙哲学で二〇分と割り振りし、残り三〇分でスライド映写を

行なう。昔の暗黒時代の戦時中の若者と比較すれば、まるで別な惑星の人間かと思うほどに違う現代の二〇歳前の男女学生達は徹底的に自由を満喫しているのだから天眞爛漫そのものだ。前の方の席に陣取った十数名の男子学生達は、しきりにノートをとったりして熱意を示していた。

ここでも一時間半はアツというまに過ぎてしまった。やはり二時間以上はほしいところだが、そうもゆかない。後ろ髪を引かれる思いで教壇を降りると意外にも盛大な拍手が響いてきた。胸が熱くなってくる。一生懸命にしゃべった甲斐があったと安堵する。

一昨年、ここで第一回の講演を行なった件を、アメリカのニューヨーク州ロチェスターに住むUFO研究者で、昨年ワシントン市でアダムスキー大会を開催したウィリアム・シャウウッドに知らせたら、ひどくたまげたらしく、アメリカの大学でUFO問題、特にアダムスキー問題について講演をするとは世の中が逆さまになっても考えられぬことだといわぬばかりの表現で伝えてきた。アメリカどころか日本でさえもこんな講座を持つ大学はないだろう。この超進歩的な学風は東京造形大学の特徴でもあるのだが詳細は省略しよう。

佐藤先生によれば、今後毎年一回は必ず来校して講演を行なえということなので私も満を持している。先生は同校の体育専門の教授で、日

本体育大学卒後、ドイツに留学され、帰国後スポーツ整体協会会長として難病の治療にも専念しておられる方。すでにスポーツ整体に関する著書を出しておられるが、今年七月には「巻いて貼るだけでこりと痛みがとれる驚異のテープ療法」と題する著書を成美堂出版から出される予定である(左の写真は表紙カバー)。定価八八〇円。

先生はきわめて男性的で豪快な気性を発揮される反面、愛の精神に徹した方で、研究室には有益な標語があちこちに取り付けてある。だいいち入口のドアには「太陽の心を持つ」と大書したポスターが貼りつけてあるほどの精神世界探求者なのだ。したがって全学生の敬愛的になつていく。

元氣 佐藤 彰 加瀬建造

**巻いて貼るだけで
こりと痛みがとれる
驚異のテープ療法**

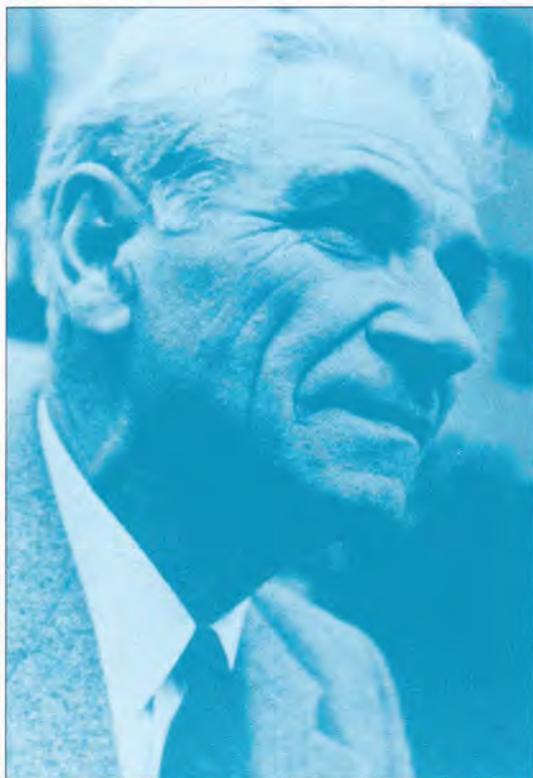
腰痛、肩こり、神経痛、冷え症をスッキリ治す
キネシオテープ&リンパテープ療法

How To Unite Man's Mind With Cosmic Consciousness
by George Adamski / Translated by Hachiro Kubota
© From Alice Pomeroy's "For An Example"

肉体を超えて大宇宙と一体化する方法 (2)

ジヨージ・アダムスキー／久保田八郎訳 〈アダムスキー講演集連載14〉

この記事はアダムスキーが一九六〇年代ニューヨーク州ビンガムトンの小集会で行なった質疑応答集の前半部分。人間の肉体と大宇宙との関係を説いた宇宙哲学の凝縮であり、人間の到達すべき最高の真理を展開。個人の向上と至福化に不可欠な方法が述べられている。前半部分は前号に掲載（文中の傍点の部分はポマロイ女史の原文の指定に準拠した。）



▲ジヨージ・アダムスキー ©日本GAP

物質も英知も永遠に不滅

しかし人間のエゴが宇宙の魂と一体化するということは決して容易なことではありません。それなのに多くの人はそのための努力を払おうともしません。人間は一般に、あまり努力を必要としない生き方を好む傾向にあるからです。何も努力せずにただ生きていくだけで進歩したいと考えているんです。

しかし、ときには泥のボールでさえも努力を始めねばなりません。どこかに到達するための努力をです。我々の問題のすべてがここにあります。（訳注Ⅱ泥のボールの例え話は本誌前号に詳述してある）

一部の教会が煉獄、地獄、または魂の消滅という考え方を起こしたのもここからです。皆さんは「あなた方は何かを畏れねばならない」と教えられており、そのことを知っています。私も知っています。それには一つの法則がかかっているのです。しかし一般大衆はそれを完全にゆがめています。

たとえば多くの人は物事を物質性かまたは靈性に分ける傾向があります。しかしこの両者は一つなのです。現代の科学が次のように証明しています。「物質は本質的には破壊され得ない」と。

我々は形あるものを破壊することはできません。しかしその形を作りあげている物質の本質は決して破壊できません。それを破壊することは誰にもできません。それ自体は永遠に存在します。

そして物質を用いて形を塑造または創造する「叡知」が存在します。それは常に形あるものに先行します。ということは、それもまた当然のごとく永遠だということになります。

真の人間は不死

結局、科学はすでにいかなる宗教でさえも証明できないことを証明しているわけです。真の皆さんはどのようにしても死ぬことはありません。

（訳注Ⅱ人間の肉体は永遠に生きる

いう意味)

しかし形を持つて物質の法則と靈性とのあいだにあるもの、つまり現象は、一時的に存在する現象にすぎません。ただしそれも、それ自身が両側の法則つまり靈性と物質の法則に吸収されることを許したならば、その二つの法則の一部となり、永遠に存在し続けることとなります。

(訳注)ここで言う靈性というのは波動性というほどの意味であつて、心靈とは無関係)

この種のことを人々に話すのは容易なことではありません。なぜならば、ほとんどの人々はきわめて利己的であるからです。つまりエゴの支配下にあるのです。古い師達が皆さんの過去生について話すときに皆さんが過去生で洗濯女だったとかミゾ堀り人夫だったなどと決して言わないのもそのためです。彼らはいつも皆さんに「あなたはどこかの王だった、または女王だった」というたぐいのことを言つて、皆さんのエゴをくすぐるうとするはずです。それが皆さんの聞きたいことであり、こうして古い師達が皆さんの求めているものを提供しているわけです。

人間は常に土台からスタートする

(客席からの質問) 過去生で王だった人が今生で何をしようというのですか
答 面白い質問です。王であるからと

いつて決して進歩した人間であるとは限りません。人間はどんな環境に生まれてきたとしても常に土台からスタートします。もしあなたがイエスの言つた「父」(創造主)の仕事につくとしたら、彼は決してあなたを頂上からスタートさせたりはしません。「父」はあなたを必ず土台からスタートさせるはずです。

もしあなたが自分の息子に自分の仕事を継がせるとしたら、おそらく息子にその仕事を一番下のレベルからやらせるでしょう。それと同じことです。それによつて彼は後になって仕事が多くゆかなくなつたときに問題を正しく発見し、それを正しく解決する方法を学ぶこととなります。

ところがもし彼が頂上からスタートして仕事に関する詳細を学ぶ機会が得られなかつたとしたら、あとで仕事がおかしくなつたときに、なす術がないということになってしまいます。あなたはそんなことは決してしないはずす。

あなたの「父」(創造主)の仕事に關しても全く同じことが言えます。あなたは(転生、つまり生まれかわりによつて)あらゆる種類の生涯を体験しながら、生命の階段を一步步登つてゆかねばならないのです。

シーザーの生まれかわりの意味

ところで、皆さんも存じのように「私はシーザーの生まれかわりだ」と称する人がときおり現われます。

(訳注)シーザーは古代ローマの偉大な武將で政治家。前六〇年に第一次三頭政治を開始し、ガリアその他を制覇して大帝國を築いたが、反抗者の謀略によつて暗殺された)

これは本当のことかもしれません。これは真面目な話です。その可能性は充分にあります。というのは次のとおりです。

我々の肉体は土のようなものです。たとえばあなた方の誰かが死んで埋葬されたときでしょう。その人は亡くなり、本人の遺体は土の中に埋められ、またも無くその肉体は崩壊し始め、それ自身をガスやら液体やらさまざまの形で土の中に浸透させてゆきます。シーザーの肉体も同じようにして崩壊しました。

そしてある人物が誕生しました。この人の肉体は、かつてシーザーの肉体を構成していた原子の一つを吸収しているかもしれない。その原子が彼の肉体の一部になつたわけです。

しかしその原子は彼の肉体の中で沈黙を続けます。彼の肉体はとてつもない数の原子でできているわけですから、それも当然のことです。それはしばらくのあいだ、それ自身を表現することは全くありません。肉体の一部として静かに眠り続けます。

しかしあるとき、彼がシーザーの一代記を何かで読み、それに強い興味をもつたとしたらどうでしょう。その想念がシーザーの肉体の一部であつた原子を揺り起こすかもしれません。揺り起こされたその原子はそれ自身をふたたび表現し始めます。

すると、それに従つて彼の心には極めて自然に「自分はシーザーだつたのだ」という認識が芽生えることとなります。それは確かにそのとおりなのです。それがたつた一つの原子であつたにしてもです。それは一つの想念のようなのです。この現象は俳優が特定の役になりきるととてもよく似ています。

すぐれた俳優がいて、舞台上でシーザーの役を演じるとしましょう。彼が本當に優れた俳優であるならば、舞台上で、彼自身の人生ではなくて、シーザーの人生を生きるようになります。彼はシーザーの想念が自分の想念を圧倒することを許します。そしてその想念が、彼がシーザーになりきつて見事な演技を披露することを可能にするわけです。

シーザーの肉体を構成していた先ほどの一つの原子にも同じようなことができるんです。

我々はまだ自分の心や、それがどのように機能するかをほとんど知らないと言つてよいでしょう。

霊界は存在しない

この話を聞いて、今、私は自分のある体験を思い出しました。それほど前のことではありません。

あれは私の家内が死んだ一九五四年のことでした。

その前にことわっておきますが、私はいかなる宗教的教えも、オカルトの角度からは全く信じていません。それが全く論理的でないからです。私はいかに宗教的な教えであっても、他の理論を吟味するときと全く同じような感覚で吟味しています。常に真実を知りたいからです。

たとえば、ある教えによれば、人間は死んだ後に土に埋められてから、およそ六フットほどの深さの所で、天使がプリエルがラツパを吹くまでのあいだ横たわっているということになっています。そして彼がラツパを吹いたら死人は野ウサギのように墓から飛び出してふたたび地上を走りまわるといわれています。

でも考えてみて下さい。もし誰もが次々と肉体に戻ったとしたらどうなるでしょう。人間の体重は平均五〇六〇キログラムあります。その一方で地球がたくわえている土の量には限度があります。そのうち皆さんの肉体を構成するための土が足りなくなってしまうでしょう。また、たとえ土が充分にあつ

たとしても、地球が作られてもしない限り、人間は地球上から溢れてしまうことになりません。

また、別のオカルト信者達はこんなことも言っています。

「あなたは死んだら空間つまり霊界内を漂う霊になるんだ」

そこにはいかなる樹木も生えていません。ということ、そこに行つたとき、皆さんは木の枝にとまってひと休みすることもできないんです(笑い)。これは大変なことですよ。ザーツと飛び回ってはいけません。ザーツと飛び回るとええ霊であつても、ときには一休みして周囲をゆつくりと見回したりすることが必要ですからね。

いづれにせよ、人間が死んだら霊になつてたまたまという考え方は私には全く理解出来ません。全く非論理的なことであるからです。

自然は常に活動を続けています。その活動は決して止まることはありません。「意識」は絶対に停止しないんです。夜間に休息をとるのは「心」だけです。それは眠り、それ自身と肉体とに休息を与えます。

しかし「意識」は決して眠りません。それは絶対に停止しません。もしそれが睡眠中に停止したならば、次の日の朝、肉体は死体になつてしまふことになりません。結局「意識」すなわち我々の本質は決して疲れず、決して眠らなず、常にあらゆる場所に存在しているんで

す。そして私はこれまでにその「意識」を通じてさまざまなことを探求してきました。

妻メリーの転生の「予言」

さて、先ほど言いかけた話にもどります。私は一九一九年に初めて妻と知り合いました。最初のデートの場所はイエローストーン国立公園でした。ちよつと照れますね(笑い)。

続けましょう。妻と私はイエローストーン国立公園で初めてデートしました。

(訳注)イエローストーン国立公園はワイオミング州とモンタナ州にまたがる最大の国立公園)

美しい夜空が広がっていました。無数の星がきらめいていました。それらはまるですぐそこにあるかのようでした。

妻のメリーが言いました。

「実はね、私はもう、この次に生まれかわる場所を知っているの。私が今生まれる場所は、あの明るい星。そう、金星なのよ」

私はその話にあまり注意を払いませんでした。たんなる夢物語を語っているだけだ——私はそう考えて、それを聞き流しました。

その後結婚してからも彼女はそれと同じことを何度か口に出しました。彼女の話には宗教的な意味合いは全く

ありませんでした。

そして一九五四年に彼女は突然、旅行先(ロサンゼルス)で亡くなりました。私達は彼女を埋葬しました。そしてその後で私は考えたのです。メリーの願いはかなつたのだろうか? 私はそれを、もはや夢物語ではなくて「願い」と言っていました。彼女がそのことを妙に確信して言っていたからです。そしてそれは見事に実現しました。

(訳注)一説によれば、彼女はもともとアダムスキーを助けるために金星から地球へ転生してきて、ふたたび金星へ帰つたと言われる。アダムスキーも没後、金星へ転生したという)

霊媒師達への講演

彼女の埋葬から三週間後に、私はカリフォルニア州アナハイムで霊媒達を前にして講演を行いました。

(訳注)現在のアナハイムはデイズニランドのある町として有名)

それはメリーが亡くなる前から企画されていたものですから、私にはそれを行なう義務がありました。それでそこへ行ったのです。私は彼らがどんなことを信じているのかを全く聞かされていませんでした。彼らから私に講演を依頼してきたのです。彼らは私に宇宙に関する話を聞きたいといっていました。もちろん何を知らうとも知る



▲1953年、パロマー山腹にパロマーガーデンズのアリス・ウェルズが経営していた軽食堂に集まったアダムスキーと助手達。中央奥がアダムスキー、その右隣りがメリー夫人、手前右方の年配の女性がアリス・ウェルズ女史。珍しい写真である。 ©日本GAP

権利は誰にもありません。

聴衆は一五〇名ほどでしたが、そのうちの二〇〇名は霊媒師でした。彼らは当時のアメリカで最も優れた霊媒だということでした。しかし私は彼らが霊媒だということを全く知りませんでした。私がそれを知ったのは講演を終えてからのことです。

それは妻が死んでからわずか三週間後のことでした。私達夫婦は三五年間とても親密な間柄を保ち続けました。ですからなおさらのこと私は彼女のことととても頻繁に思い出していました。彼女に関する追憶を心の中から一挙に追い出すことなどは到底不可能なことでした。その追憶はいわば習慣的想念として私から決して離れることはなかったんです。

真の直感力を持たぬ霊媒達

さて、私が講演を終えると、主催者側は聴衆に対して何らかのメッセージを送り始めました。彼らにとつては恒例の行事です。ただし私はいかなるメッセージも受け取りませんでした。まあ、それはいいんですが、そのあとで私達は会話を交わす機会をもちました。

彼らの一人が私にたずねたのです。「ところで、奥様はお元気ですか？」たずねたのはアメリカでも最も優秀な霊媒の一人でした。

そこで私が「彼女は三週間前に亡くなりました」と答えると、彼は「えっ、亡くなられたのですか！」と言って目を丸くしました。

そこで私は言いました。「ええ。でも奇妙ですね。私のまわりに浮遊している彼女の霊がみえませんか？」(訳注||これはアダムスキーが冗談で言ったもの)

そうなんです。彼らは私の追憶の想念をチャッチしていません。私の家内はもちろんそこに霊として存在してはいません。彼女は私の追憶の想念、つまり後々までとどまり続ける私の習慣的想念の中にのみ存在しているんです。

霊媒達は彼らがキャッチしているものが何なのかを知っていません。人間の本质つまり「意識」はすでにどこか他の場所で別な肉体を得ているのです。ですから残っているものは他人の追憶という習慣的想念の波動にすぎません。それは例えば、

「私は以前にニューヨークに住んでいた。私達はそこでこれこれこういうような家で暮らしていた。私はよくあの木の下に座っていた。あの木は私の一部だった。なぜなら私は毎日少なくとも一〜二時間は過ごしていたからだ。やがて私は西海岸へ引っ越した」と考えるようなものです。

あの木の下で座っている私をもはや見ることでできない人々にとっては、

私は死んでいるのと同じことです。私はもうそこに存在していませんから。しかし私としては、三〇〇〇マイルも離れたけれども、折にふれてあの木のことや何人かの隣人達のことを思い出します。すると私の想念波動はそこに戻るのです。

残留想念をキャッチする人間

またたとえそれが戻らなかったとしても、私のその種の想念波動は、そのあたりにただよい続けています。なぜなら、それは私が多年あの木の下に座っていた間に作り出された習慣的な想念であるからです。もし敏感な人があの木の下に行ってそれを感知したとすれば、その人は言うでしょう。

「あの人だ！ アダムスキーだ！」と。でもそれは違うんです。その時私はおそらく他の場所で忙しく働いています。その木のことなどは全く考えていないかもしれません。敏感な人がキャッチしたのは「残留想念波動」つまり印象なのです。そこに残っていた習慣的想念の波動です。幽霊屋敷などで発生する現象もこれと全く同じことです。

想念感知機が完成している

今アメリカではある機械装置が出来ています。まだ一般には知られていませんが、いずれはおおやけになるでし

よう。その装置が実用化されると殺人者達はきわめて困難な状況に追い込まれることとなります。

それはこんな装置です。例えば、誰かがそのハイウエーで人を殺してすぐに逃げたとします。目撃者は誰一人としていません。しかし警察がその装置を利用したならば、その犯行のすべてを確実に写真に撮ることができるようです。

(客席より質問) 犯罪が行なわれたあとでですか？

答 ええ、そのとおりです。犯人はすでにその場所から逃げているですが、彼はその場に「印象」を残して行きました。彼の人格的、性格的特徴、さらには犯行時の具体的な想念波動などです。それらのすべてが犯行現場にいつまでも残ります。そして今お話しした装置を用いると、たとえ一〇カ月後であっても、そのときの様子をしっかりと写真に取めることができます。

人間の心にもそれと同じ事を行なう能力があります。ただし、ある人々はそれ(映像)を見て霊だと言ったりするわけです。本物の霊はすでにそこにはいないのに――。

真の叡知(人間の实体)はすでにそこから立ち去って、どこかで幸せに暮らしているか、またはそんなこととは全く無関係に生きています。(客席より質問) その装置はどこにあるんですか。



▲1952年11月20日、米カリフォルニア州南部の、デザートセンター砂漠で円盤から出てきた金星人。アダムスキーがこの人と会見しているあいだ遠くから目撃していた6名の証人の1人、アリス・ウエルズ女史が双眼鏡で観察しながら描いたもの。このときの詳細は新アダムスキー全集第1巻「第2惑星からの地球訪問者」に出ている。

答 政府が管理しています。あなたがいくらお金を積んでも、現時点ではまだ買うことはできません。しかしいざれにしても、我々はすでに人間の想念内容をキャッチできる装置の開発に成功しているんです。

存在するのは残留想念波動あるいは追憶です。霊はすでにそこにはいません。あるのは人物自身ではなく、その人物に関するさまざまな情報が印象として残っているだけです。

金星に転生したメリー

さて、私の妻の話に戻りましょう。私は実に奇妙なことだと感じました。妻が亡くなったのは、わずか三週間前

のことでした。しかしそのことを感知できるはずの霊媒師達の誰一人としてそのことに触れなかったんです。

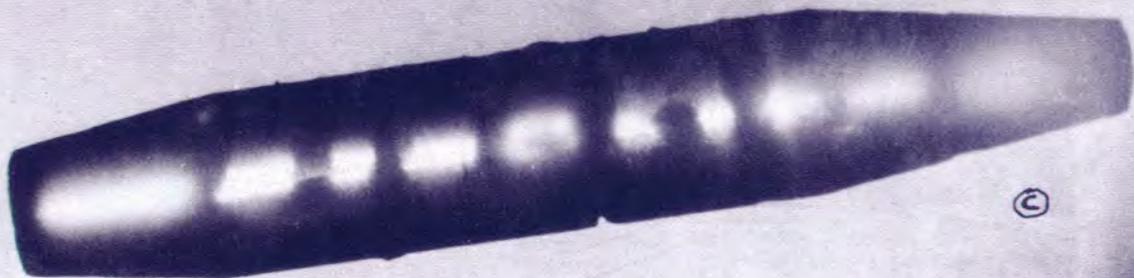
実際、彼らは私の妻は元気がとたずねました。彼らは妻が亡くなったことさえ知らなかったんです。

そして金星人のオーソンがやってきたのはそれから四週目のことでした。例のデザートセンター砂漠で私が最初に会った異星人です。

(訳注) この会見の詳細は新アダムスキー全集第一巻「第二惑星からの地球訪問者」に収録)

彼は私の所(パロマー山のアダムスキーの住居)へやって来るなりたずねました。

「なぜ疑っているんですか？」



▲1952年5月1日、午前7時58分、アダムスキーがパロマー山の自宅前から6インチ反射望遠鏡で撮影した金星の大母船。大きいになると長さ数キロに及ぶのがあるという。いずれも重力場推進機関で宇宙を航行する。アダムスキーが金星人の少女と会したのはこの写真の大母船の内部であったと思われる。この会見の詳細については新アダムスキー全集第5巻「金星・土星探訪記」(中央アート出版刊)に詳述してある。 ©日本GAP

(訳注)これは妻のメリーが生前に金星に転生すると言っていたことが実現したかどうかを考えていたことを意味する)

「いや、疑っているわけじゃないんです。妻の願いが実現したかどうか、気になっていただけですよ」

すると彼は次のように言いました。「あれは願いなんかじゃなくて、法則の一部ですよ」

そうです。彼女は肉体の目を閉じると同時に金星世界の他の肉体(新生児)の中に生まれていました。その間にはいかなる停滞もありません。二つの「生」のあいだでさまよったりすることもありませんでした

(訳注)霊界というような所へ行ったのではないの意。メリーの転生に関する詳細は新アダムスキー全集第五巻「金星・土星探訪記」に出ている。アダムスキーは大母船の中で、金星の少女に生まれかわった、かつてのメリーと劇的な対面をする)

そうなんです。彼女は肉体の目を閉じると同時に金星上の他の肉体の中に生まれていました。その間にはいかなる停滞もありませんでした。

(訳注)人間が他の新生児に生まれ変わるには平均三秒間を要するだけだという。死者の実体(意識)が移行するのは新生児が母体から出た瞬間だとアダムスキーは説明している)

それはイエスの言葉を確証するもの

でもありません。

あれはイエスが実際に口に出したことなのです。メリーの話を聞いた瞬間、私はそのことを思い出しました。イエスは磔にされたとき、隣の十字架につけられていた盗賊に向かつて言いました。

「あんたは、今日、私と一緒に楽園にいらさう」と。

この意味は、我々は死んでから霊となってあちこちを浮遊したり、土の中で横たわっていたりしないで、急速に次の肉体の中に移動するということです。

その日オーソンは「彼女がもう少し成長したら宇宙船の中で会わせてあげますよ」と言いました。

それから二年が過ぎて、私がパサデナで講演をしていると、そこに一人の異星人がやって来て言いました。

「いま宇宙船が来ています。その仕事が終わったら一緒に行きましょう」

我々は一緒に出かけました。そしてスカウトシップで地球から飛びたつて宇宙空間の大母船に移ると、そこに私の亡き妻メリーの生まれかわりである少女がいました。ちょうど、これくらいの背の高さでした(とアダムスキーは手で示す)。

前生の事をすべて記憶している少女

彼女は地球にいた当時の面影をとて

もよく残っていました。ずっと若いというだけで、相手は間違いなくメリーでした。

(訳注) 金星の幼児は地球の子供よりもはるかに急速に成長するという。死後数年なのに、この金星人の少女は一三歳前後に見えたアダムスキーは述べている)

彼女は地球での体験をあまり思い出したくないと思っていたようでした。相手は次のように言ったからです。

「私は今ここで(金星で)学んでいるんです。それで地球から来るどんな想念波動も私を混乱させて、私のここで学習を妨げてしまいがちなのです」

このあと私は大母船で金星へ行つてそこで五時間をすごしました。そこでは彼女の両親にも会っています。彼らはとても若い夫婦で、彼女は彼らの初めての子供でした。メリーはまだ少女でしたが、相変わらず美しい女性でした。

最初私は彼女が(過去世の記憶ではなくて)テレパシーで私の心を読み取っているのかと思いました。私達夫婦がイエローストーン国立公園で初めてデートした晩に、「ある事」があったんです。つまり私がある事を言ったのですが、私自身はその時以来、そのことを完全に忘れていました。ですから、そのことは私の心の中には存在しなかったのです。したがって、当然、彼女はそのことを私の心の中では見つけられ

れなかったはずですよ。

彼女は言いました。

「あなたは私があなたの心の中を読んでいると思つていてしょうか? でもそれは間違いです。私は、あなたに対して私が知っている事を話しているだけです」

そう言うつてから彼女はあの日に起こつた、私が完全に忘れてしまったことを思い出させてくれましたが、それは彼女がメリーであることの完璧な証明でした。

その後で彼女は、もうすこし大きくなって心をうまく管理できるようになつたら、私に彼女の写真を撮らせてくれるとも言いました。

「その写真(地球の)人々に見せたら、私が少なくとも表情に関してはほとんど変わっていないのを知つて、みんなきつと驚くでしょうね」

実際、そうなんです。転生(生まれかわり)というのは、全く異次元なものへの突然の変化などではありません。それは一つの段階から次の段階への、わずかな前進にほかならないのです。それは皆さんがちょうど毎日少しずつ成長してゆくのと同じようなものなんです。

テレパシクな予感力が重要

(客席からの質問) メリーさんは地球にいた当時に自分が金星に転生すると

いうことをどうやって知つたのですか。答 我々の誰でも「予感」を感じるこ

とがあります。でも我々はそれに注意を払いません。彼女はこの次にどこへ転生するのかを予感で知りました。

しかし我々はその種類の事を無視してしまいます。そうするように教育されてきたからです。

メリーは地球にいた頃には多くの旅を経験した女性でした。彼女は北アメリカ鉄道のあらゆるホテルに関連がありました(訳注) それらのホテルで働いていたという意味か)。彼女はまさにあらゆる種類の人々と出会い続けました。そしてそのために人々と認知に関する広範な理解を得るとともに、とても鋭い知覚力と素晴らしい高度な精神性を身につけていました。

また彼女は人間の心がどんなことを行なえるかを知っていました。そしてその知識をもとにして自分自身を管理してました。彼女が身につけていた知識のほとんどは、人々との接触を含む彼女自身の経験から学ばれたもので

す。

あるとき彼女は、「自分は金星に転生するのだ」というフィーリングを起こして、それを大切に保っていました。ついにそのとおりの事が起こつたのです。

どこかで会つたようなフィーリングは過去世での親密な関係の結果

このことはまたイエスが言つたもう一つの事とも関連しています。彼は言いました。「天国ではいかなる結婚も行なわれない」と。

ここで天国というのは宇宙を意味します。たとえば我々はみな配偶者が亡くなると彼あるいは彼女にとっても会いたくありません。相手が生きていたときには、ひどい悪たれをついていたとしても、亡くなつていなくなつたとたんに、強く愛し、会いたくてたまらなくなりません(笑い)。実におかしな話です。

ここで質問を出しましょうか。皆さんはたとえ自分の今の配偶者をどんなに愛しているように、もし、今後も永遠にその人物と夫婦であり続けねばならないと宣告されたとしたら、どうでしょうか。それを喜んで受け入れるでしょうか(会場はシンとなる)。

そんなことをすれば、いかなる進歩もありません。そのとき皆さんは、言わば全くの手詰まりの状態に陥ることになります。それは次の理由によつても決してうまくいきません。

皆さんは常に知人とはめぐり会うでしょう。事実、皆さんは一度会つた人にはいつか別の場所でもかならず再会することになります。我々はその種の再会をこの生涯の中で何度も体験してきました。初めて会つた人なのに、以前どこかで会つたことがあるというフィーリングを皆さんも何度か体験した

はずです。皆さんはすでにその種のフイーリングを起こすために必要な感知力を充分に身につけているんです。

さて、ポイントはお次のとおりです。ここに私の妻がいます。もし私がもう一〇年、あるいは一五年生きたとしたら、我々の時間を採用した場合、そのときメリーは二〇歳になります。そのとき私は死んで赤ちゃんとして誕生します。そんな赤ん坊を彼女がどうして夫にまでできるでしょうか（笑い）。

それゆえにイエスは「天国では、地上で慣れ親しんだ結婚は行なわれな

い」と言ったんです。人間同士は永遠に知人として存在できませんが、永遠に夫婦であり続けることは到底不可能なのです（訳注Ⅱ各生涯で配偶者は変わるのであって、そのために人間の進歩があるの意）。

宇宙は一つの肉体

前にも言いましたように、皆さんが創造主を愛しているときには、創造主が造りあげている万物を愛しているという事になります。

創造主は何で作られているのでしょうか。ちなみに我々の肉体は九千億個の細胞で作られています（訳注Ⅱ現在は六〇兆の細胞から成っていると言われている）。あらゆる形あるものと、あらゆる形あるものの成長を可能にしている空間が、宇宙という一つの肉体

を形成しています。その肉体的なわち宇宙が、我々が神と名づけているもの、そのものだとすることもできます。それは同時に神あるいは創造主によって作られているということもできます。

そして我々は皆その壮大な一つのものの一部なんです。我々は決してそれと分離した存在ではありません。

ただし我々は同時に常に同じ形で結びつきあっているわけでもありません。基本的には先ほどお話しした二つの原理の接触によって、あらゆるものが変化を続けています。その二つのものが接触するたびに新しい現象、あたらしいアイデア、新しい想念が発生します。そしてその持続的な変化は、限界を持たない持続的な進歩と言い換えることができます。

地球人の知性は七パーセント

我々が今後身に付けうる知識には、いかなる限界もありません。これだけの文明を築きあげている現時点でさえ、我々はまだ自分達の知性を七パーセントしか発達させていません。しかもそれは地球人のなかで最高のレベルにある人々の数値です。我々が開発している知性は、まだ九三パーセントも残っているんです。

我々人類はこの地球上に四〇〜六〇億年も前から住んでいます。その間に我々が発達させた知性はわずか七パー

セントだけなのです。先はまだ無限にあります。

所有物の奴隷になってはいけない

さて、我々人類はさまざまなものを作成し、それらを所有しています。我々がそれらに支配権を与えたならば、それらに使われることになりました。

たとえば皆さんの自動車は皆さんをここへつれてきてくれました。その点では自動車は皆さんにとってもよく奉仕したわけです。しかし我々の社会体制の中では皆さんは自分の自動車の奴隷でもあるんです。なぜなら、皆さんはそれを所有するために汗水たらして働かねばならないからです。我々は自分達の創造物の奴隷になってはいけません。それらが常に我々に奉仕するべきなのです。しかし我々はほとんどあらゆる所有物の奴隷になることを強いられています。それらを所持するために働かねばならないからです。

でも金星では事情が全く異なっています。あちらの人々は何かを所有するために働いたりしません。あらゆる所有物が、ただひたすらに人々に奉仕しています。というのは、それらは個人の所有物ではないからです。あらゆる物がいわば社会全体の所有物なんです。争いをくりかえす複数の国家も存在しません。

また金星には惑星社会と呼ばれる一

つの社会しか存在しません。そしてあらゆる物が公平に分配されています。そのために彼らはいかなる所有物にも奉仕しません。逆にあらゆる所有物が彼らに常に奉仕しているのです。彼らは所有物の絶対的な主人であり、決して奴隷などではありません。

しかしこの地球世界の貨幣経済の機構の中では、我々はいやでもその経済機構や、ひいては自分達の所有物の奴隷とならざるを得ないわけです。この点が他の進んだ惑星の社会と地球社会の間に存在する最も大きな違いの一つです。

（訳注Ⅱ以上の説明によれば、進歩した惑星は貨幣のない完全な共有財産制であることがわかるが、これは地球の共産主義とは根本的に異なることを意味する。地球の共産主義は人間の持つエゴの欲望を温存させて物質の財産のみを権力で共有させようとするために挫折するけれども、金星人は個人的な欲望をもたぬために天国のような平和な社会に発達したという。したがって共有財産制による平等社会の実現にはまず個人のエゴの消滅が前提となるようだ）。

しかし遠い未来には地球社会もエゴの欲望をなくして金星のような共有財産制による天国のような平和な世界に発達すると、訳者はある方面から聞いている。したがって地球が破滅することはありません。

盛況! 秋田支部大会

1996年6月8日 / 秋田パークホテル



このたび第六回日本GAP秋田支部大会を開催し、大盛況裡に終了することができました。ご参加下さった四名の方々衷心より御礼を申し上げます。久保田先生におかれましては多忙な中をご来秋の上、高遠なるご講演をいただきましてまことに有難うございました。また東京より加藤純一さんを始めとする黎明会の皆様の応援をいただき、心からお礼を申し上げます。

今回の久保田先生のご講演は従来とは多少異なつて、科学的な面と哲学的な面を織り交ぜた広範多岐にわたる興味深い深遠なお話でした。UFO問題ではアポロ計画のエピソード、ロズウェル事件の真相その他が展開し、哲学面では転生の法則をアダムスキー夫妻の実例で説かれ、宇宙的な生き方として大宇宙思念法の重要性とその実習に

ついて指導がなされました。ビデオで映写されたワシントン市のアダムスキー大会後のニューヨーク上空を飛ぶUFOには本当に感動しました。異星人は常に久保田先生をマークしているのだなと感じました。

大会後の夕食会では楽しく談笑する中を民謡の大家である副支部代表の佐藤春雄氏の素晴らしい歌声に拍手喝采が鳴りやまず、続いて福引き大会で大いに盛り上がりつつ閉会となり、そのあと二次会でカラオケ大会を開いて一同歌いまくりました。

翌日は快晴下を三四名でマイクロボスを利用して鳥海山の由利原高原へ観光に行き、ここで観測を開始しましたところ、早速田村勝利氏と松岡圭一氏がUFOを目撃して一同気をよくしたしだいです。今回の秋田支部大会は

かつてないほどに大成功裡に終了して、これもひとえにご参加いただいた皆様のおかげであると、支部一同心から感謝しております。再来年にまた大会を開催しますので、その節はよろしくお願い致します。支部代表・伊藤正治

※

早いもので今回の秋田支部大会は二年間の第六回目になるが、いつ来ても素晴らしい集いである。大体に秋田市は清楚なストイックな感じがして東京のような猥雑さが無い。これは他の東北の街々も同じである。快適な会場での講演では少ししゃべり過ぎた感があるが、まあいいだろう。素晴らしい大会だった。支部の方々に深謝したい。

夜の夕食会では民謡の大家・佐藤春雄氏と津軽三味線の名手・佐藤裕二氏の名演に場内は感動の嵐が渦巻いた。

涙で聴く人々を前にしたこの大熱演にワーズワースの「Saturn (水夫)」と題する詩を思い出す。誰も人生の大海で孤立してはいないのだ。

翌日は快晴に恵まれて観光。鳥海山の標高五〇〇メートルの由利原高原で田村、松岡の両君がUFOを目撃したという。良かったね！ 久保田八郎



UFO contacteeバックナンバー主要記事

★在庫は101号105号以降全部（100号以前と102, 103, 104号品切れ絶版）。96年4月よりバックナンバーのみ1冊¥700に値下げ断行。代金後払い可。ハガキに号数、冊数、住所、氏名、電話番号を明記して日本GAP宛気軽にご注文下さい。バックナンバーの送料は本会でサービス。

No.133 1996年(平成8年)4月25日発行 ¥700

月は異星人の基地だった——久保田八郎
私の宇宙哲学実践とUFO目撃——加藤純一
懐疑論者から支持者に転向——J・ローリーノ
アダムスキー哲学と波動感知法——林 国宣
創造のための宇宙哲学——佐藤 彰
宇宙の夢とUFO目撃——吉川美香
カルナの意味——林寺正俊
東京大地震は近未来に発生しない——秋山眞人
肉体を超えて大宇宙と一体化する方法——G・アダムスキー

No.132 1996年(平成8年)1月25日発行 ¥700

別な惑星の文明と創造性——秋山眞人
イエスの時代を透視する——遠藤昭則
奇跡を起こすイメージ療法——原 永倉
宇宙船の形態に関する一考察——遠藤昭則
アダムスキーの思い出と彼の宇宙哲学——アリス・ボマロイ
好評、名古屋市の講演
東京造形大学で講演

No.131 1995年(平成7年)10月25日発行 ¥700

アダムスキー問題と日本GAP——久保田八郎
ワシントン、ニューヨーク両市でUFOがひんぱんに出現！——加藤淳一
私もワシントン市でUFOを見た！——清水 正
カイパーベルトはアダムスキーの主張を立証するか——植木淳一
アダムスキー大会を思う——岡田茂/西川太/大根田匡史/加藤路徳
熱烈な呼びかけに応えたUFO——石井一江
私のUFO目撃と宇宙的な生き方——忍田裕昭
宇宙時代の夜明け——村上博一
人間の肉体・意識・テレパシー原理——G・アダムスキー

No.130 1995年(平成7年)7月25日発行 ¥700

M氏の「UFOと異星人」体験——久保田八郎
アダムスキー型UFOの飛行原理を解明——遠藤昭則
超能力者ディナの驚異的パワー——久保田八郎
異星人女性との出会い——佐々木八郎
スペースビープルを見かける私——原垣内良子
透視・臨死体験・不思議な女性——千葉福造
白山のUFO——沼倉孝彦
父と従兄が「UFO」目撃——高橋克彦
人間の肉体・意識・テレパシー原理——G・アダムスキー

No.129 1995年(平成7年)4月25日発行 ¥700

地獄の大地震からの奇跡の脱出——平塚和義
大地震を前夜予感した私——西村悠子
偉大な教訓となった大地震——田辺健司
ロスで見かけた異星人女性——加藤純一
アダムスキーの大地を訪れて——黎明会有志
巨大母船、安比高原に出現！——秋山和広
サイコメトリーによる書物の質の感知法——林 国宣
UFOの速度・肉体と魂・
真の科学・長寿法——G・アダムスキー

No.128 1995年(平成7年)1月25日発行 ¥700

アダムスキー・永遠の真実と栄光——ダニエル・ロス
わが母の驚異のUFO目撃——ミシエル・ジルガー
総会の日にUFO出現
那須高原で巨大母船出現！——堀江健一
ダニエル・ロス氏宅訪問記——久保田八郎
あなたもオーラが見える——遠藤昭則
予知能力を持つ土星人女性の援助——G・アダムスキー

No.127 平成6年10月25日発行 ¥700

UFO出現の国—メキシコ——久保田八郎
ロスウェル事件とMJ12文書——坂本貢一
UFO目撃と不思議体験の旅——4名執筆
私もアダムスキー型円盤を見た！——山口邦雄
UFOとオーラと想念——山崎和子
奇跡的に難病を治す方法——久保田八郎
異星人とUFOの真相②——G・アダムスキー

No.126 平成6年7月25日発行 ¥700

驚異の瞬間移動とUFOの超低空降下——久保田八郎
UFOを頻繁に見る私のカルマ②——溜池みゆき
私も母船を見た！——津田篤孝
ムー大陸から見た原日本人——澤入達男
昔のUFO目撃の思い出——橋本恵一
異星人とUFOの真相①——G・アダムスキー

No.125 平成6年4月25日発行 ¥700

UFO、デザートセンター上空を飛ぶ——久保田八郎
私はアダムスキー型円盤を至近距離で見た——大野義和
UFOを頻繁に見る私のカルマ——溜池みゆき
不思議な予知透視——米川宣雄
突然出現した不思議な人間——千葉敏江
生命と物質と超能力——伊藤陸史
異星人はなぜ地球へ来るのか——G・アダムスキー

No.124 平成6年1月25日発行 ¥700

信念の力、希望の力、絶対に諦めない力を起こす方法——久保田八郎
今世紀末、大変動発生なし！——秋山眞人
私を助けてくれる異星人達——上原則子
アダムスキー型円盤、長時間出現——石井佳子
浅草上空に出現したUFO——堀江健一
UFO・宇宙・人間——G・アダムスキー

No.123 平成5年10月25日発行 ¥700

濃い超能力者のUFO目撃と遠隔透視——編集部
私を助けてくれる異星人①——上原則子
山梨県に出現した巨大UFO——編集部
エゼキエルはUFOを見た？——久保田八郎
私はアダムスキー型円盤を見た——海瀬宏子
UFOと異星人の実態——G・アダムスキー
謎の古代マヤ遺跡とUFO——久保田八郎

No.122 平成5年7月25日発行 ¥700

金星文字を解読してUFOの推進原理を解明！——バシル・バン・デン・バーグ
星々への切符——遠藤昭則
オム教授が発見した金星？文字——久保田八郎
不思議な体験連続の人生——千葉福造
オーラで異星人を見分ける——紙屋光孝
私だけが見るUFO——須山有美子/宮本浩子
万物は人間の想念に感応する——塩谷信男
四感・生命の息・転生——G・アダムスキー

日本GAP創立35周年記念

1996 GAP-JAPAN GENERAL ASSEMBLY

日本GAP総会開催

1996年度

全国の日本GAP会員の皆様ご待望の総会を今年も下記の要領で開催致します。今回は日本GAPに対する古くからの支持者で久保田会長の導師である医学博士・塩谷信男先生をご招待して超健康法の秘訣をお話し頂きます。先生は今年95歳になられますが、いまだにゴルフをなさる驚異的な体力の持ち主であらせられ、宇宙的な哲学の実践によって不思議な奇跡を起こしておられます。めったにないこの機会をお見逃しなく、多数ご出席下さい。本部役員一同心からご歓迎致します。

日本GAP本部役員幹事 加藤純一

機械振興会館▶
(左は東京タワー)



講演

医学博士

塩谷信男先生

「大宇宙の無限の力による長寿健康法」

日本GAP総会 (予約不要)

- 日 時＝9月22日(2日連休の初日)12時受付開始/1:00開会
- 会 場＝機械振興会館 地下2階大ホール
東京都港区芝公園 東京タワー前 (芝公園は本物の公園ではなく、単なる地名)
- 交 通＝都内JR山の手線電車で浜松町駅下車(東京駅より三つ目)。降りたホームを有楽町方向(東京駅方向)の端まで歩き、階段を降りると同駅の北口へ出る(注意＝この駅から羽田空港へ行く大勢の人が同じホームの昇り階段を登るが、これにつられて一緒に登らないように)。改札を出て駅隣の超高層「貿易センタービル」の正面まで数10メートル行くと東京タワー行きバス停がある。タワーまで約8分。料金¥200。貿易センタービル手前横にはタクシ乗り場もあり、タワーまで約5分。料金¥650。徒歩約20分。タワー前の道路をへだてた斜め向かいに機械振興会館がある。休日は正面玄関が閉じられているので、右へ回って右側面入口から入り、エレベーターで地下2階で降りてすぐそこ。
- 会 費＝¥4500 中学生¥2000 小学生以下は無料。受付で納入。

－プログラム－

- 1:00 会長挨拶 久保田八郎
- 1:10 講演「大宇宙の無限の力による長寿健康法」塩谷信男先生
- 3:10 休憩
- 3:25 質疑応答 塩谷信男先生
- 3:35 米アダムスキー関係、ロドファー円盤等の映画上映
- 5:00 閉 会

※ご注意＝総会中のストロボカメラ、ビデオカメラ等による撮影、テープレコーダーによる録音は自由ですが、講演その他の発言内容の著作権は日本GAPに帰属しますから、個人または日本GAP以外の他の団体が印刷使用することはできません。
◎主催者に無断で印刷物を会場配布することは厳禁します。

予約申込

- (1)大夕食会＝ハガキに「総会後の大夕食会出席予約」と書いて住所・氏名・電話番号を明記の上、9月20日までに(必着)日本GAP宛お申込み下さい。
- (2)ホ テ ル＝ハガキに「日本GAP総会ホテル予約」と書いて氏名・住所・電話番号・宿泊日・シングル/ツインの別を明記し、9月5日までに下記へ(締切り厳守)お申込み下さい。
(注意＝日本GAP宛ではありません)
〒150 東京都渋谷区神宮前3-22-9
満月ビル 3F
スバルツーリスト 小林様(宛)
※宿泊費は各自ホテルで支払って下さい。
- (3)観 光＝ハガキに「観光参加希望」と書いて、住所・氏名電話番号・希望コースを明記の上、9月20日までに(必着)日本GAP宛お送り下さい。
観光コースについては右の欄を参照のこと。

大夕食会 (要予約)

- 日 時＝総会終了後 6:00～8:00(時間厳守)
- 会 場＝機械振興会館 6階65+66号室大ホール
- 受 付＝入場受付5:30
- 会 費＝¥7,500会場受付で納入(中学生割引なし。小学生以下は保護者同伴で無料)飲物(ビール・酒・ウイスキー・ソフトドリンク等)は飲み放題。
- 70プログラム＝6:00開会、会長挨拶。乾杯(音頭は大阪支部代表・平塚和義氏)、食事、歓談
- ※ご注意＝大夕食会は立食形式のため自由に移動可能。愉快地歓談して楽しくすごして下さい。ただし塩谷先生に質問することは一切ご遠慮下さい。出席者はある程度きちんとした服装をお願いします。椅子は多数あります。
- 2次会＝8:30～10:30 会費¥3,000程度。多少の変動をお含みおき下さい。会場は銀座8丁目のギンザナイン地下「天狗」奥座敷。希望者はタワー前からタクシーで「新橋の土橋(どばし) 交番前」と告げて直行すれば早いし数人でワリカンで乗れば安くつきます。タクシー料金約¥800。

ホテル (要予約)

- ホテル＝銀座キャピタルホテル(昨年と同じ)
〒104 東京都中央区築地(つきじ)3-1-5
☎03-3543-8211
- 料 金＝シングル ¥7,500(朝食・サービス料込み・税別)
ツイン ¥15,000(同)
(一昨年度より約¥3000 安くなりました！現在、シングル60室、ツイン10室を確保)
- ※ご注意＝ホテルは団体予約なので必ずスバルツーリストへお申込み下さい。

都内観光 (要予約)

- 日 時＝9月23日(連休2日目)雨天決行
- コース＝今回は観光コースを3種類に分けるので、各自希望するコースに参加して下さい。交通は電車利用の団体行動。観光申込みハガキに希望コースを明記して下さい。
Aコース＝都心方面。東京駅→皇居前→日本橋→銀座で自由行動(デパートで買物その他)→東京駅。
Bコース＝横浜方面。東京駅→横浜ランドマークタワー→山下公園等。
Cコース＝上野方面。東京駅→上野公園→上野動物園→アメヤ横丁等。



Letters

ユークン広場



理想を実現する力

伊豆支部代表 高梨十光

久保田先生、いつもありがとうございます。ごさいます。先生にはますますご壮健のこと、お喜び申し上げます。社者をしての活躍のご活躍ぶりに感嘆申し上げる次第です。

先般は「意識の声」をお贈り下さい、ありがとうございます。ご厚情に感謝申し上げます。「意識の声」の希望と力溢れる文章を拝読するたびに意欲づけられます。「意識の声」ばかりでなく、久保田先生のご書簡やご講演にはいつも希望が溢れていて、次の体力と気力が湧き起こってくるのを感じます。

大体において、天才的な久保田先生の最も魅力的な個性のひとつは、「理想的イメージを描いて未来を創造する」という壮大大胆なる法則を、終止一貫主張されて実践されている点にあります。久保田先生の宇宙的なパワーがほとばしるような今後の内容をご期待申し上げます。

また久保田先生の著書「UFOと宇宙哲学の行方」を拝読いたしました。中には桁の違う小生のことなども忘れずに書いてくださいます、恐縮の極みです。

「UFOと宇宙哲学の行方」にはジョージ・アダムスキー氏、スペース・ブラザーズの思想はもとより、久保田先生の「理想を実現する」力

投稿歓迎 字数を問わず。匿名発表可なるも住所氏名明記のこと。

強い波動が随所に溢れていました。先生の著書を拝読することにより、多くの人々が宇宙的に救われることと存じます。

久保田先生にはどうぞ今後とも御身お大切に、いつまでもご壮健でいらせられますようお祈り申し上げます。

(編注)「意識の声」というのは日本GAP維持会員のみに久保田会長が毎月贈っているエッセイの小冊子。これには会長のふだんの行動、宇宙哲学の思索、秘話、能力開発法、良書紹介、会の動向と行事速報等、ユークン誌に掲載されないためずらしい記事が満載してある。維持会員に入会希望者は日本GAP宛にハガキで申し込まれば案内書が送られる。

充実した大阪支部で研鑽

福井県 津田朝美

新緑の薫る季節となりました。先生には益々御健勝のことと御慶び申し上げます。

先頃は素晴らしい内容のユークン誌一三三号を御送り下さいまして誠にありがとうございます。私は大阪支部の平塚氏のもとでセミナーへ出席させていただいて一年を過ぎたところですが、支部の充実した内容と、すばらしい会員の皆様方との交流ができて、出席するたびに心身と

もにリフレッシュしております。今後とも久保田先生の御指導のもと、先輩会員の方々とともに宇宙哲学、生命の科学を学び、近く到来する二一世紀に向けて、宇宙時代に目覚めた人間になれるよう頑張りたいと思っております。

現在は対処しにくい危機の時代だと思っております。だからこそ日本GAPの活動と久保田先生の存在は大いなるものだと思っております。今日日は万物の創造主様からいただいた日本の幸(若狭カレイ)を御賞味いただきたくて、わずかですが贈らせていただきました。久保田先生もお体を大切にしてください。そして今後ともどうぞよろしく御指導下さいますようお願い致します。

遅れている日本

北海道 大寺 勉

地球人は宇宙へ出るることによって真に宇宙の理にかなう生活ができるのではないかと考えております。

地球人の精神性は高まってきているものと思えます。戦争をおこなうことが戦争犯罪となり、経済、政治面で統一されております。

先般、図書券を送っていただいたていなが、お礼が遅れてすみません。有難く使わせています。誠にありがとうございます。

札幌支部の高野支部長が訪ねてきて下さいます。月例セミナーにも出席させていただきます。

F総研が二一世紀の経済、地球、そして宇宙生活を考えているのを見ますと、日本はどのも意識が低いと思えます。欧米に比べると宇宙については全く一九世紀の西洋科学です。

二一世紀にはほど遠い状態です。福来博士の名譽を挽回できるのは、いつのことやらと考えます。マスコミに踊らされない真実があるものと思えます。どうぞこれからもよろしくお願ひ致します。

(編注)福来友吉博士は昔の東大教授。超能力の科学的研究の大先駆者。心の中で何かのイメージを描きながらその想念波を写真の未使用ネガフィルムに放射するとイメージどおりの写真が写るのを「念写」といじが、実験で念写が事実であることを証明したのに、物理学の法則から逸脱していると他の学者やマスコミから猛烈に非難されて大学を追われ、仙台で不運の生涯を終えた人。

良い意味でのこだわりを

紀南会 松口幸之助

昨日久保田先生のエッセイ「意識の声」六月号をお送り頂きまして誠に有難うございました。毎月お送り頂きまして深く感謝致す次第でございます。今号も愛と敬知、そして迫力に満ちておりまして、感動する心持ちでございます。

私は先程気づいたのですが、こだわりを持つことは良いことだと思えます。超高度に進化した別な惑星の文明とかG・アダムスキー哲学にこだわることとは自分にとっても地球社会にとっても良いことだと思えます。ですが、ネガティブな想念にこだわっては自分や地球社会にとってもマイナスになりますので、ここではあくまでも良い意味でのこだわりを意味します。自分は一個人の人間として存在し、創造主に祝福されて生きていくこと自体、幸せなことだと

実感致しております。

意識と心の相違に気づく

東京都 早川真智子

去年の一月に初めてアダムスキーの本を知り、いま全集も四回目を読み返しているところですが、恥ずかしいかな、私はつい先日「生命の科学」を読んでいて初めて意識と心の違いがわかったという次第です。意識に自分の心を従わせることがわかったとき、ふだん道を歩きながら眺めている花や草が目前に飛び込んで見えて、まるで「私達もこうして一生懸命に生きていますよ」という草花の音が聞こえてくるかのようでした。輝くばかりに美しく生き生きと見える草花に、きつとこのとき私は心の目ではなく意識の目で見ているということになるでしょう。

そして次に聞こえてきた声は「人間だけがわがわがの顔で生きていますが、私達もこうして精一杯に生きています。そのことを忘れないで下さい」というものでした。恥ずかしいながら私はやっとうアダムスキーの宇宙哲学の意味がわかったという次第です。有難うございます。

音楽を聴く喜びと疑問

長野県 宮下かつえ

先生、お元気でいらっしやいますか。アスパラガスを少しお送り致します。お召し上がり下さいませ。

今年はブルックナー没後一〇〇年ということで、特集記事や演奏会も多く、時間が許せば先生としましては、かけつけたくなる状況です。クラシック音楽界の状況です。私は今のところピアノ曲中心です。

が、もちろん交響曲も聴いていくつもりです。家にいるときはいつもFMラジオ(CDも)からクラシックをBGMとして流しています。聴く気で聴いているときも多いのですが、でもしよつちゅう聴覚と心を、人工的。な音で満たしていることは、あまり好ましいことではないかもしれなと思います。先生のご意見を聞かせて下さい。

音楽は人間の心を慰めて平安をもたらす、悲痛な感情を消失させて生氣を復活させる妙薬です。したがって誰しも西洋音楽にこだわる必要はなく、自分の好みの音楽なら何を愛好してもよいでしょう。日本の俗謡でも演歌でもいいようにかまいません。沈んでいた心が明るくなればそれでよいのです。他人に憎悪の想念を放射し続けるよりも音楽で平穏な明るい心を持ち続けるならば、そのほうがるかに良いでしょう。

しかし酒と同じで、度を越せば良くないでしょうが、たまに聴く程度ならば一向に差し支えないどころか、荒れた心をしずめる良薬になります。昔から「音楽を好む人に悪人は、いない」と言われています。美しい音楽を聴いて心が平安になるならば、下手な説教を聞くよりもはるかに良いことです。

超常現象番組の制作への提言

東京都 浜田敏博

昨年は某教団事件の影響もあってか、いわゆる超常現象番組はほとんど影をひそめていたようですが、九六年になってふたたび超能力やUFOの特別番組がちらほらと見られる

ようになりました。

私は超常現象などに関心を持つ一視聴者なのですが、そうした番組を組むに、その番組の企画・制作にあたる方々に申し述べたいことがあります。特に「透視」について述べますが、結果の審査を行なう観測者(たとえばO教授)が、何か文字で書いた紙をお読みたんで、テープで書いこんでクジ引き箱のようなものの中にいれて、超能力者がそれを手探りで読み取るような実験をされるようです。

しかしこのとき、番組制作にあつた方々が超能力者が紙に書かれた文字を手さぐりで当てる場合があるといつて、それを「手」あるいは「指」で読み取っていると考えることは、全くの唯物論的発想というかナセンスだと思えます。

私が考えるには、超能力者らは答えを当てるとき、その文字なり図形なりのイメージが頭の中のキャンパスに浮かんでくると述べているのですから、これはいわゆるテレパシー現象によつて答えているものと思うのです。

それでは、テレパシーとはどういう現象を指しているかといえ、例えば自分の思いが相手に伝わることを指していると思えます。

ただしこの場合、O教授が言うような以心伝心といった情報伝達による現象ではなくて、あくまでもエネルギー伝達型の現象を指して述べているのです。

そうすると、例えばO教授が紙に書いた文字を超能力者が読み取っているとき能力者は手さぐりをしていますが、現象の実際は相手の「思

い」あるいは「考えていること」を、そうとは自分でも気づかずに読み取るうとしていっているのですから、O教授が例えば、「彼女は当てることのできるだろうか」などと、答えとは違う全くの雑念を放っていると、能力者のほうも雑念しか読み取ることができず、その結果、失敗に終わるのだと思います。

そこで必要なことは、文字を書いた人にもその文字を頭の中で思つてもらうこと、あるいは実験準備終了後、別室に入ってもらい、モニターを見ながら壁にでもその答えを書いてもらつて、その答え(文字や記号)をじつと見続けてもらうことを条件とするべきでしょう。

そうなれば、実験は否定論者の目前でも成功することは予想されますが、大切なことは、透視とはいわゆるテレパシー現象であり、テレパシーとは観測者の「思い」が相手の被験者にエネルギー伝達現象として伝わる現象である、ということを念頭において、実験の計画・制作をして頂きたいということ。

福山支部からの報告

福山支部代表 栗田雅則

風薫る五月となりましたが、先生におかれましては益々ご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。福山支部の近況をお知らせ致します。

- (1) 現在までの出席人数
 九五年八月〇七日、九月一四、一〇月一〇、一二月一四、一二月一五、九六年一月一八、二月一七、三月一〇、四月一六。
- (2) 支部でのイベント
 今年の四月七日に福山市の春日池

公園でUFO観測会を実施するも、雨のため参加者三名。ほとんど中止状態なるも強行。

(3) 支部でのイベント

福山支部では久保田先生を福山にお招きすべく、今年の三月より「久保田先生を福山にお招きしよう!」と題する基金を作り、支部内に展開中。来年五月二十五日に第一回支部大会を開催の予定。

(4) 総会に参加しよう運動

今年も福山支部は秋の東京総会に参加すべく団体旅行参加者を募っている。九月に先生とお会いできることを一同楽しみにしている。以上です。なんとか頑張っていますのでご安心下さい。

▼福山支部1996年1月月例セミナー。



素晴らしい会合へどうぞ!

「日本GAP東京月例セミナー」

日本GAP東京本部は下記の要領で毎月月例セミナーを開催しています。久保田会長の「生命の科学」解説講義を主体に会員の講演テレパシー練習、質疑応答などで、きわめて高次元な宇宙的雰囲気にあふれた素晴らしい研究会にご参加下さい。ビデオ映写します。GAP会員外の方でも参加できますのでお気軽にどうぞ。一同あたたかくお迎え致します。

日時 毎月第1日曜日午後1時~5時。
 参加費 ￥2,500 (終了後別な場所で夕食会。実費)
 会場 都内港区東京タワー前「機械振興会館」6階67号室(本年5月より地下3階から部屋を変更)。詳細は本誌巻末「月例セミナー案内」の東京本部の欄をご参照下さい。

George Adamski

新アダムスキー全集

ジョージ・アダムスキー＝著／久保田八郎＝訳
全面改訂・改訳／全10巻／各 四六判



超絶した文明を持つ、太陽系の他の惑星群の人々と接触したアダムスキーを米政府機関は密かにマークしていた！UFOや惑星群の驚異の実態と深遠な宇宙思想を伝える本全集は、地球人類に宇宙的覚醒の必要性和真の生き方を示す永遠の古典。UFOと宇宙哲学の研究者にとって必読の名著。旧全集を全面改訂した最新決定版。世界に類書なき金字塔！

① 第2惑星からの地球訪問者 ●352頁●定価＝1,980円

UFO研究者として世界的に著名なジョージ・アダムスキーの、1952年11月20日、カリフォルニア州の砂漠に降した円盤から出てきた金星人との会見から始まる驚異的なコンタクト実録。著者自ら円盤や母船に乗り込み、他の惑星の超絶の大文明の実態を明かにする、本全集の中心の書。写真多数収録。

② 超能力開発法 (テレビシー、遠隔透視その他) ●192頁●定価＝1,300円

世間に氾濫する通俗的な超能力開発法とは根本から異なる宇宙的能力の発現法を説いたもの。目、耳、鼻、口、の四官をコントロールして、肉体内部の宇宙意識から来るメッセージを感じ、真の意味でのテレビシー、遠隔透視その他の超能力を身につける方法を具体的に詳述。類書皆無の重要文庫。

③ 21世紀/生命の科学 ●208頁●定価＝1,300円

アダムスキーが他界する前年に出した12冊分の講座を一冊にまとめたもの。アダムスキー宇宙哲学の総括的な一大金字塔。特に人体細胞の実態と真実のテレビシー、及び霊界通信の誤り等を科学的に解説した超能力開発指導書。心霊現象への接近を警告する画期的な理論を明快に説く、第5巻の続編として必読のテキスト。

④ UFO問答100 ●216頁●定価＝1,300円

1958年にアダムスキーは、世界中から来る質問の洪水を分類して質疑応答集を出した。全部で100問のUFO関係の質問に懇切な回答を与えている。現在の混沌とした世界のUFO研究界に的確な示唆と回答を示すものとして、内容は今も驚くほど新鮮で有用である。UFO研究者の素晴らしいガイドブック。

⑤ 金星・土星探訪記 ●380頁●定価＝2,400円

アダムスキーが大母船に乗せられて、想像を絶する進歩をとげた金星と木星を訪れた体験記。特に金星人の少女として生まれかわった亡き妻メリーとの劇的な対面が圧巻。第2部には1958年以来、日本におけるアダムスキーの代理人として啓蒙活動に専念している久保田八郎宛の多数の書簡を収録。

⑥ UFOの謎 ●262頁●定価＝1,980円

UFOの推進原理をはじめ、聖書とUFOとの関連などを詳述して様々なミステリーを解明した重要な文庫。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記で、各国GAP網の活動状況が克明に描写されていて1960年代のUFO研究界の実情と一般人の宇宙観がよく理解できる。第1巻の続編。

⑦ 21世紀の宇宙哲学 ●148頁●定価＝1,030円

地球人が真に宇宙的な成長をとげるための基本的思想として、マインド(心)と肉体内部に宿る宇宙意識との一体化を説いた書。既成のあらゆる宗教や哲学では理解し得なかった人間の意識と万物との関係を説いて21世紀の思想を先取りした。第5巻、6巻と合わせてアダムスキー哲学の三部作をなす。

⑧ UFO・人間・宇宙 ●370頁●定価＝2,400円

アダムスキー支持活動団体として世界のトップクラスをゆく日本GAPの機関誌に掲載された、アダムスキーのUFOと宇宙哲学関係の論文、講演録等を編集。他界する直前の最後の講演が圧巻。第2部には訳者・久保田八郎が再三渡米してアダムスキーの今は亡き高弟たちと接したインタビュー記事を収録。

⑨ UFOの真相 ●320頁●定価＝1,980円

アダムスキーの薫陶を受けた人達の論説・講演録等を収録。宇宙の実像と人間味豊かな庶民性をあわせて偉人の素顔を多角的に描写。アダムスキー氏の高弟アイリス・ボマロイ、キース・フリットクロフト、ハンス・ピーターセン、金星文字を解読して画期的な永久モーターを開発したバジル・バン・デン・バーグらの証言が白眉。「サンビエトロ大寺院の異星人」と題する久保田八郎の体験記も興味深い。

⑩ 超人ジョージ・アダムスキー ●232頁●定価＝1,300円

膨大な新アダムスキー全集の最後をしめくくる完結篇。アダムスキーの宇宙的な活動と深遠な哲学を集約して伝えるとともに、彼の伝記をも加えてこの巨人の人間像を克明に描写。これ一冊でアダムスキー問題の何たるかが理解できる全集のコンパクト版。豊富な写真入り。国際的なアダムスキー研究者・久保田八郎が書き下ろし執筆。

別巻UFO-宇宙からの完全な証拠 ●480頁●定価＝2,800円

ダニエル・ロス著／久保田八郎＝訳

アメリカの気鋭UFO研究者ダニエル・ロス氏が全力で展開したUFO問題の真相。月・惑星探査結果に関するNASA(米航空宇宙局)の隠蔽工作を暴露し、アダムスキーの体験の真实性を科学的に実証した画期的な内容の本書は、UFOの研究者のみならず、宇宙科学に関心ある人々にきわめて有益な知識情報の源泉となる。写真多数掲載。



中央アート出版社
〒104 東京都中央区京橋3-7-13
TEL＝03-3561-7017／郵便振替＝00180-5-66324

*新アダムスキー全集全巻をまとめてご注文頂きますと定価の10%引き+送料がサービスとなります。
*定価は、全て税込みです。

UFOと宇宙哲学の行方(ゆくえ)

●久保田八郎著 定価1650円 送料310円 四六判・288頁

本書はわが国UFO研究界の第一人者・久保田八郎が「UFO contactee」に長年にわたって掲載してきた記事や講演から選りすぐって編集したもので、UFO問題とアダムスキー哲学に関する著者の研究の集大成ともいえる内容になっています。2部構成になっている本書は、まず第1部でUFOと異星人に関する様々な問題について著者の見解を示し、続いて第2部では、アダムスキー哲学を人生に生かしたり、難病の治療に応用する実践法を明らかにしていきます。UFOを研究する人のガイドブックとしても最適の書です。



UFOと異星人の真相

●久保田八郎著 定価1650円 送料310円

四六判・256頁



UFO研究の第一人者・久保田八郎が書き下ろした本書は、別な惑星へ行ってきた青年の驚異の体験をもとにUFOの内部の様子や作動原理、異星人の文明の実態等を明らかにしていきます。加えて超能力等の問題や、氾濫するUFO関連情報の真偽にも迫るUFOを研究する人の必携の書です。

UFO・遭遇と真実—日本編—

●久保田八郎著 定価1500円 送料310円

四六判・264頁



日本で発生した驚異的なUFO事件を8件選び、わが国UFO研究界の第一人者・久保田八郎が書き下ろして読みやすく編集した本書は、実証主義をつらぬく著者が徹底的に調査した結果、真実そのものであると確認した事件のみを流麗な筆致で活写。読者を大気圏外の世界へ誘います。

※上記の書籍は日本GAPでも取扱います。著者の署名捺印入り。ハガキでご注文下されば代金後払いで直送します。



中央アート出版社
〒104 東京都中央区京橋3-7-13
TEL=03-3561-7017 / 郵便振替=00180-5-66324

英文版「UFO contactee」No.11 日本GAP

B5版/12頁/コート紙使用/¥500 送料¥190/5冊まで¥270/6冊以上¥390 (NO.1~3は品切れ)

日本GAP発行英文版「UFO contactee」誌は、たんなる興味本位や娯楽趣味を排した理想主義的なUFO専門誌として、世界のUFO研究団体や個人研究者から絶賛をあげています。多数のUFO専門誌はオバケ宇宙人、誘拐事件、その他恐怖心をおおるような記事に終始していますが、日本GAPは日本語版、英文版とも地球世界の未来に大いなる希望をもち、人間の無限の可能性を引き出すための指針に満ちた記事を掲載しています。英文版第11号には1994年度総会におけるミシェル・シルガー氏の英語講演の全文を主体に、きわめて有益な記事と写真を流麗な英文で掲載。ご注文は代金後払いで結構です。



編集後記

SSSS

●米政府も人間の集団であり、しかも世界平和のための警察官を自負しているようですからUFOのごとき重大問題の真相を簡単に洩らすわけはありませんが、本号では海外から殺到する最新の資料をもとに可能な限りの探索を試みました。その成果が、「米政府が隠すUFO問題の驚異的真相」です。それにしては英語の重要さと言語としての英語の難解さを身にしみて感じます。しかしやはり英語は世界語になるでしょう。

●アダムスキー問題は真実以外の何物でもなかったという結論は遠からず権威筋から出るでしょう。その兆候はほのかに見えています。一般に出回らない極秘情報類でそれがわかるのです。

●一時期米国の某団体がコンピュータでUFO写真の真偽を判定しており、「科学」という言葉に弱い大衆は文句なしにその結果をウノミにしていました。しかしコンピュータは神様ではありません。遠藤氏が見事に欺瞞性をあばいています。

●本誌掲載のUFO写真類を無断で複製して使用すれば違法行為ですから、ご注意下さい。●UFOの目撃報告、UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究実践体験、宇宙科学等の原稿や資料等を募集しています。掲載分には感謝を呈します。

●本誌は多数のボランティアにより全国の主要書店に直販で卸されています。この活動に参加希望の方はハガキでお申込み下さい。説明書をお送りします。

日本GAP専門誌・季刊 秋季号
UFO contactee 134号

編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP

〒104 東京都中央区本一色1-12-1-311

03-36551095

1996年七月(五日)発行

定価九二七円(本体九〇〇円)、送料二七〇円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断引用転載を禁じます。

日本GAP全国月例セミナー案内

支部名	日 時	会 場	会 費	プログラム・テキスト
東京本部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※8月より毎回UFO関係その他のビデオまたはスライドを映写。 ※9月は総会なるも9月1日に月例セミナー開催。 ※10月の月例セミナー会場は6階66号室に臨時変更。	港区芝公園3丁目5-8「機械振興会館」地下3F第2研究室。 ☎03-3434-8216。JR浜松町駅下車。東京タワーの正面前。 浜松駅から東京タワー行きバスで約8分。 連絡先=日本GAP本部 ☎03-3651-0958 ※日曜日は正面玄関が閉じられているので、右へ回って建物の右側の入口から入る。	会場費 ¥1000 セミナー受講料 ¥1500 計¥2500	1:00→1:30 会員による講演。 1:30→3:00 久保田会長による講義。 テキスト=「生命の科学」 3:10→5:00 超能力開発練習/近況報告/質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。JRまたは阪急電車吹田駅下車。 連絡先=平塚和義 ☎06-411-2367	¥500	東京月例セミナーにおける久保田会長の講義のビデオまたは録音テープを公開。テキストは上記と同じ。
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※本年9月の月例セミナーは中止。	新潟市東万代町9「新潟市青年の家」(万代市民会館と同じ建物) ☎025-246-7711。JR新潟駅より徒歩5分。 連絡先=星 富治夫 ☎02579-2-5562	¥500	同上
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30 ※本年9月は1日(日)に臨時変更。	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。 ☎052-331-2141(代) JR東海・名鉄・地下鉄の金山駅より徒歩5分。 連絡先=林 国宣 ☎0586-45-6468	¥300	同上
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※日時は変更があるため、毎月事前に柴田宛電話で問い合わせること。	山形県天童市老野森1丁目1-1「天童市中央公民館」 ☎0236-54-1511。天童駅から徒歩10分、タクシー4分。天童市役所の裏側。 連絡先=柴田光明 ☎0233-25-3261	¥500	同上
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※日時と会場は不定につき、事前に高野宛問い合わせること。	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821 連絡先=高野省志 ☎011-783-6393	¥500	同上
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市五条4丁目「旭川ときわ市民ホール」3F 302研修室 ☎0166-23-5577 連絡先=川上三秀 ☎166-61-0044	¥500	同上
沖縄支部	毎月第4日曜日 午後1:00→4:30	宜野湾市嘉数1-6-5 早川宅 ☎098-890-1324 連絡先=里 孝人 ☎098-869-9964	¥500	同上
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377 連絡先=伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥500	同上
横浜支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※7月は移動月例会のため中止。 ※8月から毎月第4日曜日に変更。 ※9月は東京総会のため第3日曜日に変更。	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」 ☎045-681-6551 JR 関内駅、地下鉄・伊勢崎長者町駅より徒歩3分。 連絡先=清水 正 ☎03-5995-6038	¥500	同上
茨城支部	毎月第4日曜日 午後1:20→5:00	水戸市梅香1-2 ひと好文カレッジ小集会室。 ☎029-224-6602。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先=清水勝一 ☎029-273-1903	¥300	同上
長野支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	塩尻市大門7番地「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253 連絡先=博田文喜 ☎0264-24-3012	¥500	同上
紀南会	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※日時については事前に松口に問い合わせること。	和歌山県新宮市春日1番35号 「新宮地域職業訓練センター」工業コーナー ☎0735-23-0005 JR 新宮駅下車、徒歩5分、新宮市役所隣。 連絡先=松口幸之助 ☎0735-34-0384	¥300	同上
南九州支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2-3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111 連絡先=曾我部勇人 ☎0992-53-2315	¥500	同上
高松支部	毎月第3日曜日 午後1:30→4:30 ※日時は変更があるため事前に電話。	香川県坂出市寿町1-3-5「坂出労働福祉センター」 ☎0877-46-2463 JR 坂出駅より徒歩10分。 連絡先=関 高明 ☎0875-72-2698	¥500	同上
伊豆支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※日時に変更があるため事前に高梨宛電話。	静岡県三島市一番町20-5「三島市民文化会館」第3会議室。 ☎0559-76-4455。三島駅より徒歩3分。 連絡先=高梨十光 ☎0558-72-7832	¥500	同上
福山支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:00 ※日時は変更があるため事前に電話。	広島県福山市丸の内1-3「びんご荘」 ☎0849-25-3977 福山駅から徒歩3分。 連絡先=藁田(なつめだ) 雅則 ☎0847-52-6306	¥500	同上

※本年7月より仙台支部と栃木支部を廃止。



オーソン肖像写真

1952年11月20日、アダムスキーがカリフォルニア州のデザートセンターで会見した金星人を、目撃者の一人アリス・ウェルズ女史が双眼鏡で観察しながら描いたスケッチをもとにして女流画家ガイ・ベッツが油絵に仕上げた絵画の写真。10.5cm×17cm(不許複製転載)

¥1,000 送料¥130



金星のシンボルマーク

中央の眼は万物を見透す宇宙の意識、つまり人体を生かす生命/パワーと叡知をあらわし、周囲の4層の放射状ゾーンは人間のマインド(心)の発達状態をあらわしています。人間のマインド(心)は眼・耳・鼻・口の四つから形成されるので4層になっているのです。

¥500 送料¥80



ESPカード<超能力開発用>

テレパシー、遠隔透視等の能力開発用としてアメリカのテューク大学で開発されたカード。5種類の図形カードが各5枚ずつあり、計25枚のセット。堅牢な厚紙製。重さ40g、5.7cm×8.9cm。携帯に便利なポケット用。どこでも気軽に練習できます。使用説明書付き。

¥1,500 送料¥130 (2~5個)¥190



テレフォンカード

日本GAP特製テレフォンカードの第8弾。1954年2月15日、イギリスのランカシャー州のコニストンで、当時13歳のスティーヴン・ダービシャー少年が撮影したアダムスキー型円盤。詳細は新アダムスキー全集第1巻「第2惑星からの地球訪問者」40頁に出ています。

¥1,500 送料10枚まで¥80



GAPキーホルダー

日本GAPがデザインして製作したオリジナル・キーホルダー。シンボルマークの周囲を「WITH COSMIC CONSCIOUSNESS(宇宙の意識とともに)」の金文字が取り巻く優雅なデザイン。円形部分は直径3.2cm。鎖とも全長9cm。非常に堅牢に出ています。

¥1,900 送料130



会員バッジ

金星のシンボルマークが金色に輝く優雅なデザイン。表面の透明樹脂がキズを防ぎ、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏の留め金が心棒スリ留め式。女性用は安全ピン式。ご注文の際は、いずれかを明記して下さい。実物の直径は1.7cm。

¥2,000 送料4個まで130



ブックカバー

主として新アダムスキー全集用に作られたカバーですが、同じ大きさの四六判の書籍ならどれにも使用できます。表側の中央にシンボルマークと「宇宙の意識とともに」を意味する英文が金色で箔押しされた濃紺色の優雅なデザインです。人造皮革製。

¥1,200 送料¥190 5枚まで¥270

GAPシール

シンボルマークを「宇宙の意識とともに」の英文が取り巻く優雅なデザインのシールです。カバンその他の持ち物に最適。

1枚に大小5個1組 ¥200 送料10枚まで¥80



新アダムスキー全集 訳・著者 久保田八郎の署名捺印入り

中央アート出版社刊「新アダムスキー全集」を日本GAPでも取り扱っています。各巻とも扉に久保田八郎の署名と捺印を入れてお届けします。詳細については本誌の広告を参照して下さい。全巻注文の際の定価割引はありません。送料は1冊310、7冊まで¥660、10冊まで¥900。ハガキでご注文下されば代金後払いでお届け致します。

申込先 上記各商品のご注文の際は住所・氏名・品名・個数・電話番号をご記入の上、郵便振替か現金書留でご注文下さい。代金後払いも承ります。その場合は、ハガキに上記のとおりにご記入の上お送り下さい。商品の中に郵便振替用紙を同封しておりますから、現品到着後、最寄り郵便局からご送金下さい。消費税は無関係です。

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511

日本GAP 振替 00140-2-35912

☎03-3651-0958

日本GAP能力開発カセットテープ

●能力開発テープ「生命の科学」¥1500
送料1本¥190 計¥1690

日本GAP東京本部が毎月開催する月例セミナーで久保田会長が97年3月まで行なう「生命の科学」解説講義と質疑応答を録音したテープ。雄大な信念と勇気を起こさせる講演をぜひお聴き下さい。8月より業者の製作により音質とラベルが本格化しました。従来はテープを①と②の2本セットにしていたのですが、8月より1本のみで頒布します。

●テープのご注文に限り前金注文とします。○年○月○日、個数、氏名、住所、電話番号を明記の上、郵便振替、または現金書留で必ず日本GAP宛にご注文下さい。



日本GAPビデオ

臨場感溢れる画像があなたを会場に引き込み、宇宙的な一体感を起こします。全巻VHS。

●東京本部月例セミナー 全1巻 ¥3000

〔内容〕久保田会長の解説講義、他、約120分。

●日本GAP総会 全2巻各¥3000

〔内容〕毎年開催される日本GAP総会を完全収録。(1989年度分から在庫あり)

●日本GAP海外研修旅行 全1巻 ¥3000

〔内容〕旅行のハイライトをまとめた楽しいビデオ。(1989年度分から在庫あり)

●米ワシントン市のアダムスキー大会における久保田会長の講演(英語) 全1巻 ¥3000

〔内容〕1995年9月8日、久保田会長が英語で講演したためずらしいビデオ。英文テキスト付き。日本語訳文は本誌131号に掲載。送料はビデオ1本¥300、2本以上3本まで¥700。



申込先

ご注文の際は品名、○年○月分、上下巻の区別、個数、住所氏名、電話番号をご明記の上、郵便振替でお申し込み下さい。(ビデオの代金後払いも可) 〒162 東京都新宿区富久町36-18 奮久マシソン103 伊東芳和 振替 00140-8-13811 ☎03-3351-9525

宇宙に満ちるプラズマと 良質波動をあなたの耳元に お届けする大ヒット音響商品!

パラ・スバツハ



**PARA
Su-Bahha**

プラズマ回路内蔵
ダイナミック型
ステレオヘッドフォン
パラスバツハPS2348
(本体、ステレオ金メッキ変換
プラグ、保証書)

◆今や世界で愛用されているパラ・スバツハが
今回のみ当誌限定で超お買い得プライス。

32,000円→15,800円(税別)

今回のみ150台限定商品

■お申し込みは今すぐおはがきか、お電話で!

●お支払い方法は便利な代金引換払いか、下記口座
にお振り込みください。

三和銀行高田馬場 支店普通3733990
(株)アイカ

◎商品到着後8日以内は返品可能です。

◎返送料はお客様負担となります。

- 学習能力が上がった!
 - 本当にリラックスできた!
 - より深い瞑想感を得られる!
 - 直感、ヒラメキが、湧き出る!
 - おじいさま、おばあさまが、元気はつらつ!
 - ご主人様のくつろぎ、安らぎに。
 - 奥様のストレス軽減に。
 - お子様の能力向上のために。
- この機会に、ご家庭で、一人に一台お使いください!

体験談の1例

私の場合、コピーライターという職業がら、ひらめきとか発想力がいつも要求されます。仕事が煮詰まってくるとどれだけアイデアを出そうとしても、つまらない考えばかり出てくるのがよくあるのですが、そんな時は十分ぐらい休憩をとってこの「パラスバツハ」で音楽を聴くようにしています。疲れがすっきり取れて頭が冴えてくるので、それまで予想もしなかったようなアイデアがぼんぼん出てきます。

大阪府MMさん(女性、32歳) 広告会社勤務

- 名前 (印)
- 生年月日
- 住所
- 電話
- お支払い方法

パラスバツハを
注文します。

切手 〒171
日本 株式会社 豊島区池袋2-43-3
GAP 係 田村ビル5F
係 アイカ 3

株式会社 アイカ

〒171豊島区池袋2-43-3田村ビル5F

TEL03-5992-4661 FAX03-5992-6461

(株)アイカでは業界最新、最安値の波動転写装置、全ての音をα波誘導音に変える
画期的な波動バイオメディア商品を多く取り扱っております。興味のある方はお問
い合わせください。